

788.1-Y79



1200500752899

788.1
Y79
Ⓢ



始



788.1

Y79



横山健堂著

日本相撲史

納本



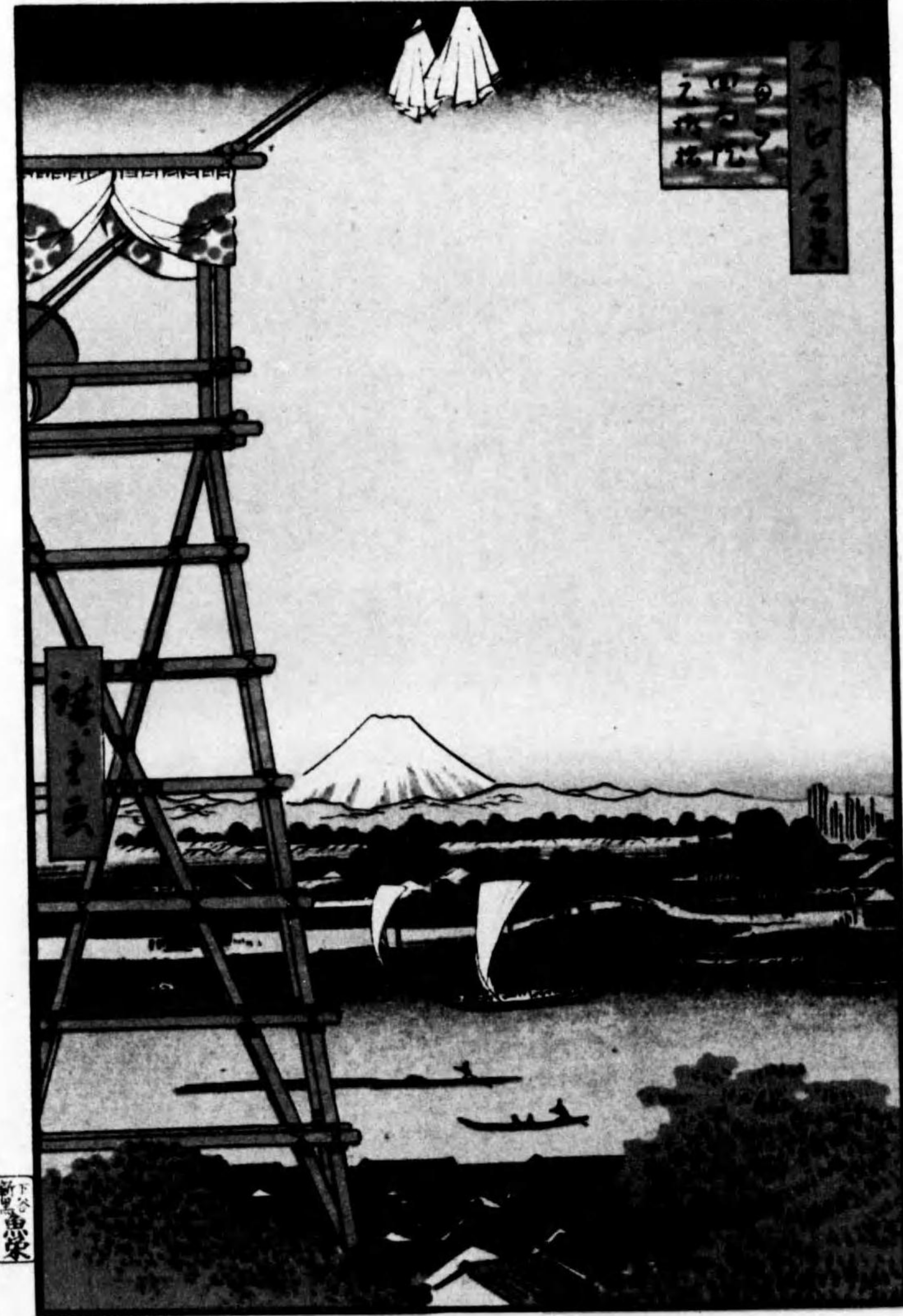
東京富山房



1.1
112

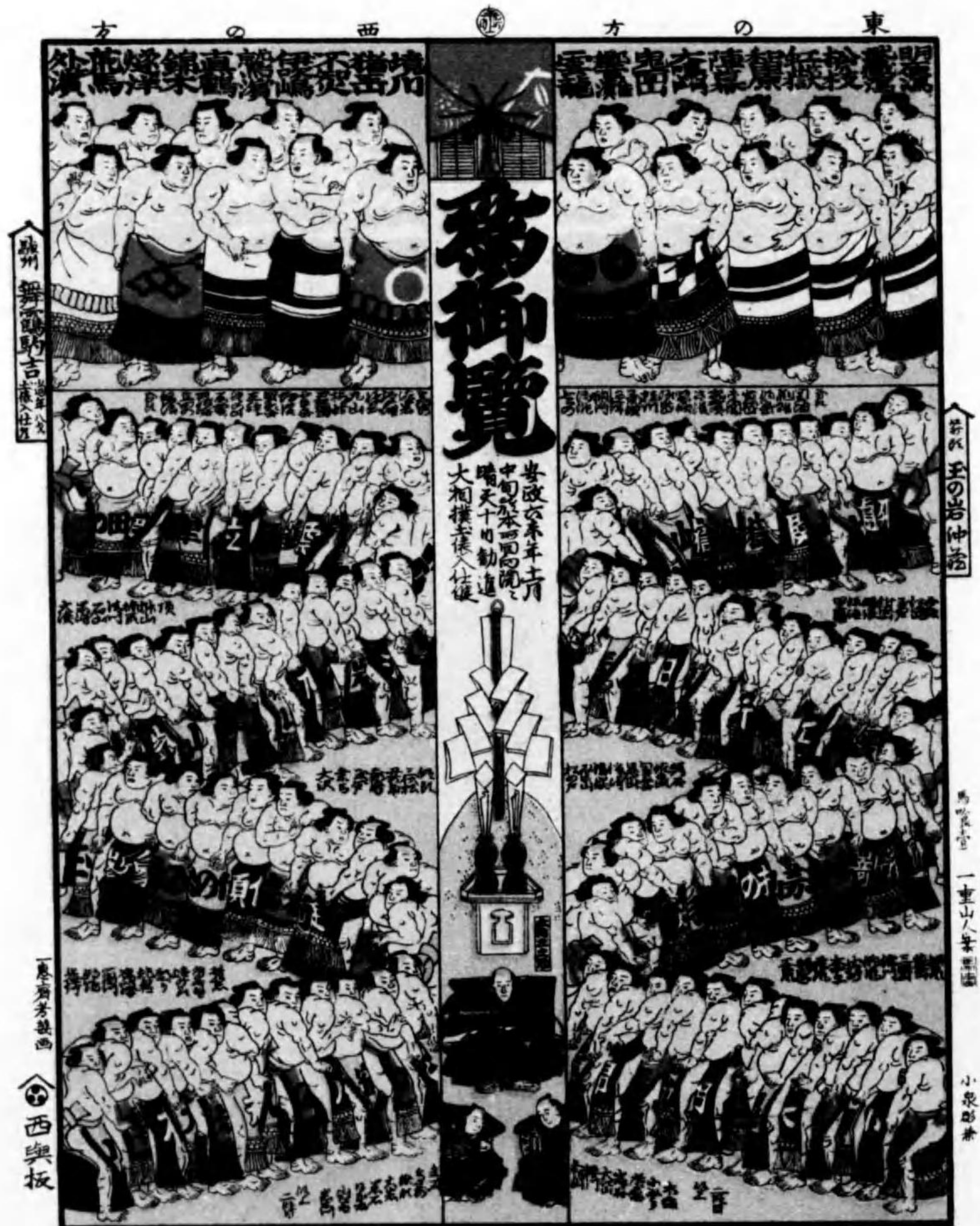
511
41

56



(中尾方一氏藏)

影面の鼓太櫓ぶ俵に番板



附番撲相進勸院向回國兩月一十年六政安

〜紙化宜 かき可ふ謂もでと附番き解繪
 〇るあでのもな歴綺のり刷版木

(中尼方一氏藏)



同 圖 (其ノ二)



江戸時代兩國回向大院相撲之圖 (其ノ三) 續



西郷隆盛曰ク、人ハ體ヲ鍊ラザル可カラズ。體ヲ鍊ルハ心ヲ鍊ル所以ナリ。見ズヤ夫ノ氣象活潑、自ラ常人ト別ナルハ他ノ由來無シ。平素身體ヲ鍛鍊スルノミ、余力士ニ對スル毎ニ、鄙吝ノ念消ユ。故ニ善ク之ト交ハル。

西郷隆盛、角瓶ヲ好ム。而シテ其持論以テ虛ナラザルヲ見ル可シ。

(中尾方一氏藏)

西郷隆盛曰ク、人ハ體ヲ鍊ラザル可カラズ。體ヲ鍊ルハ心ヲ鍊ル所以ナリ。見ズヤ夫ノ氣象活潑、自ラ常人ト別ナルハ他ノ由來無シ。平素身體ヲ鍛鍊スルノミ、余力士ニ對スル毎ニ、鄙吝ノ念消ユ。故ニ善ク之ト交ハル。

(原文第二行不字脱ス)

西郷氏常ニ角瓶ヲ好ム。而シテ其持論以テ虛ナラザルヲ見ル可シ。

正七位富岡百鍊寫并録



(三ノ其) 圖 同

國技館の一日

—(序言に代へり)—

拙著日本相撲史の校正が略ぼ完了に近づいたから、序言を書かねばならぬと考へてゐると、幸に上京中の郷里の知人から、棧敷を取つておいたからといつて、大相撲初日に招かれたので、久しぶりに初日を見た。今から廿年前頃までは、年兩度の大場所は、毎日ぶつ通し観てゐたから、知人などは、君はもう木戸御免だらうと言ふ者もあつた位だが、其後、身邊事情の變化の爲に、一場所四日も観れば精々といふやうになり、前晩から押掛けて鐵傘下占領、二日掛りの見物といふ妻い初日の壯觀などは、新聞で見ればかりであつたから、此意味に於て、此度の初日觀角は一層興味の深いものであつた。

從來、大相撲の初日は木戸錢がやすいものだから、歌舞伎座の初日に對すると同じやうな感想を抱く者もあるやうだが、それは大へんな見當違ひである。蓋を開けたばかりの歌舞伎座は、俳優が未だ臺詞を善く覺えない爲に、黒ごが後ろにつく必要があつたりして、實質上、初日はやすすいのが當然だが、大相撲は其とは大に趣を異にし、初日をやすくするのは開業祝の意味であり、

相撲としては眞劍中の眞劍、尤も純真なうぶな勝負が見られるのである。移動稽古場のやうな地方巡業の花相撲を長らくやつて来た力士が久しぶりの眞劍勝負に臨むのだから、いやが上に張切つて登場する。埒を離れた奔馬の勢を現はすものもあれば、緊張し過ぎて固くなるものもあり、幸先よく最初の一番をと、だれもかれも颯爽としてゐる。投げた一箇の駄に飛びつく群鯉の潑刺たる氣分が土俵に漲ぎつてゐる。大相撲は續けて見てゐれば一日一日と新しい興味が断えず湧いて来るが、何としても初日の土俵には他に見られぬ清新さがある。故横綱大錦が私に述べた話に、大場所中につらいことは、自分の負けた噓がひろがるのを思ふことで、終りの二三日となれば、噂されるのも短かいから氣が軽くなるが、初め頃に負けると、その噂が場所中、長く續くかたまりませんと言つたが、力士には、此のやうな見物には知られぬ苦衷がある。初めには負けとも後に勝てばいゝと言つたわけのものではない。大錦の話のやうだと、同じ負ける一つとしても、初日の負けが一番嫌なことではなければならぬ。初日に負けて發憤の種になることもあれば、それで腐ることもあるらしい。初日の土俵は、極めて清新潑刺たるのみならずして、此の如く意義の深いものがある。

かういふ風な感興を以て見てゐると、果然、此日の勝負は非常におもしろいものがあつた。幕下のホープといはれる三根山は、體が一向動かすに負けた。固くなり過ぎたのだ。十兩の全勝を

期待された東富士も脆く敗れた。俊敏、隼の如くであつた金湊が働けなくなつたのを見ると有爲轉變の感を深くする。幕内では嶄然、大剛ぶりを加へて来たのは相模川だ。太刀山と男女の川とを寄せて二で割つたやうなのが今の彼である、心機一轉したら太刀山らしくなるであらう。相撲合理化の名人笠置山が強剛鶴ヶ嶺に對する力戦も亦興味深いものがあつた。笠置山は得意の二枚蹴りを連發して鶴を崩したが、同時に小軀の自分が潰れた。物言つて取直し、前と同じ立合、同じ作戦を繰返して、こんどは笠置が明らかに敗れ去つた。智將といはれる笠置には敵陣を脅やかす新作戦があるかと期待したが、あのやうに強敵に十分用心されては、奇襲を施すべき見込は無い。再び二枚蹴の一途に出たのは、前の勝負は、二枚蹴がもう一息といふところだつたといふ自信に驅られたのか、あの場合、さうする外に手が無かつたのか。此所は検討を要するところだらうが、とかく必死の場合になると、本能的に得意の手を出すものである。

大の里以來、清瀬川、幡瀬川、旭川など相撲上手が續出したが、今では出羽湊が業師であらう。出羽の相撲には柔らかな曲線美があるとでも言はうか。彼の業師たる本領が潜ぐり相撲ではない。此日、自分よりすつと上脊のある強い松浦瀉に低く組まれ、松の頭を彼の胸に受けて、高い構へとなつたので、彼危うしと見てゐると、ちつと自分の備へを固めつつ、機を見て蹴つて敵の體を崩し、すぐ附入つての二丁投は鮮やかだつた。此日、第一等の名勝負であらう。その變化の

早いことと、前捌きの巧いのは、明治の名力士源氏山以來、稀に見る逸材である。これほどの業師だから、一度は双葉山攻略の旗を揚げたい希望を持つらしいが、相手の双葉山は、彈丸のやうな、手裏劍のやうな突撃相撲には往々破られるが、決して上手といふ相撲には敗れたことは無い。双葉は洗練し切つた相撲である。これを突破するには蠻勇を要するが、出羽には蠻勇が缺けてゐる。そこに出羽湊の惱みがある。

競馬フアンの見物が、此日、豊島が楯甲を突いて出て交はされて前に這つたのと、羽黒山が九州山に引落されたのと、二つの番狂はせは、大穴といふところだと話してゐた。全く相撲は取つて見なければ分らぬものだ。豊島の突張りは、鐵砲を放つやうだから、目標が移動すると、彈丸が空を打つのである。羽黒と九州との對場は猫と鼠との戦のやうだつたが、猫が遂に鼠に喰はれた。九州山は大陸の戰場から歸來して、土俵を戰場として荒れまはる、霸氣勃々、奇襲を生命とする精悍兒である。小軀非力だから魁偉大力の羽黒を衝くには、神經戦の作戦に出る外は無からうと見てゐると、殺氣満面、立上るや、猛烈に双手突きに突かけ、突かけては飛び退き、飛び退いてはまた突掛け、ひたすら敵陣攪亂に邁進した。果して羽黒は三分の怖氣ついたのか、用心し過ぎたといふものか、守を固くしてゐるばかりで、敵の突張りに合はせてゐるうち、知らず／＼誘びき出されて、脚は伴はぬに、上半身のみが著るしく前進して來た途端に、九州此機を逸せず、

颯と蹴つて引くやうにすると、大剛の羽黒山ベタリと兩膝突いた。此の大敗北、九州の蹴りも引きも有力なものではなく、神經戦に精神動搖した羽黒山の自滅といふが至當であらう。

此日、土俵上の興味を満喫したばかりではなく、各方面に於ける角道革新の光景を見た。國技館、出入法の改良、殊に勿ねた利那の混雜の防止等は勿論。土俵上に於ける力士の禮儀正しくなつたこと、大鐵傘下に於ける國民儀禮、滿場幾萬人總起立して國歌合唱、天皇陛下の萬歳三唱に至つては、他に比類なき民族的壯觀にして、國技館は面目を一新したものとといふべく、國運を暗しての大東亞戦争が土俵上に及ぼした影響の尤も光榮あるものである。しかし大相撲が國技といふ美名を完うするには、設備、經營、組織及び斯道の技術等に涉つて研究改善すべきものは、まだ多々あるであらう。

此日、私を案内してくれた同郷の紳士は、卅年前、東京の玉椿に對して、等しく小軀ながら大阪の玉椿として鳴らした經歷を有し、角界には縁故が深い。國技館がはねてから、更に私を出羽海部屋に案内し、名力士兩國の接待を受け、瀟洒とした小庭に沿うた坐敷で、隅田川を眺めつつ茶を喫んだのは風流なことであつた。それから兩國が得意の手料理を御馳走するからと、招かれて濱町三丁目の自宅に往き、佳肴清酌、半夜の快談をしたのは、意外の感興であつた。兩國は長崎人だから郷里に因んで瓊ノ浦の名で鳴らしてから、角道に名高き兩國梶之助を襲名し、幕内生

活十年、本名太田勇雄、三十六歳、身長五尺八寸、幕内としては肥満せず、體重は廿二貫二百目の二の字盡しで軽い方だが、しかし虎のやうに腹は引込み肩は盛り上がつて隆々たる双腕の筋肉、成程、これであの櫓投をやるのだなと感嘆した。古來、櫓投の名手少からずといへども一際目立つ彼の櫓投は、かねて私の憧憬の一つであつた。今や私は計らずも彼の室に坐し彼と肩を並べて談笑してゐるのである。兩國の印象は意表に出ることが多く、相撲振りのキビ／＼した男性的の離業をやるのに、言葉少なにニコ／＼してゐる好漢、しかも庖刀の冴えの鮮やかさにも驚かされたが、何よりも驚ろいたのは、其の居宅、調度すべてが整齊雅潔にして、家の中が歌舞伎座の舞臺の書割のやうに綺麗なことである。兩國は、「私の家内は蒲團が一寸曲がつてゐても嫌やだといつて直します」と言つて、押入をあけると、眞白な絹の寢具が、正しく奉書紙を重ねたやうである。私ども土俵の上で龍驤虎闘する裸金剛が、此の如く繪に描いたやうな生活をしてゐやうとは思ひがけなかつた。私は今まで土俵の力士しか知らなかつた、その人間味の一面を今始めて見たのである。

.....
私は遠き數代以前のことは分らぬが、私の曾祖父以來、代々の相撲好きで、私も傳統的に相撲を見たり、自分でも少しは稽古したこともあり、随つて相撲に關する古今の文書を耽讀し、東京

に出て、大相撲を見ることになつてから、愈々その趣味を醗酵せしめ、新聞や雑誌に相撲に關する批評や隨筆を書いた。新著、日本相撲史は、私の家系及び私自身の趣味の結晶にして、此の超非常時の社會趣味の啓發に多少なりとも貢獻するあらんことを期するものである。
本書編纂に當つては、故大錦卯一郎、中尾方一、加藤進、上園一樹等の諸友に負ふところ少からず、茲に特筆して敬意を表す。

昭和十七年五月十夜、大相撲初日より歸りて

横山健堂記

目次

緒言	一
國技館の一日(序言に代へて)	一
一角力の起原	一
二 相撲節會の概要	一〇
三 平安時代の力士	三
四 鎌倉時代の角力	三〇
五 室町時代末期伏見桃山時代の力士と上覧角力附、女力士	四
六 寛政の上覧角力	五
七 谷風、小野川、雷電	七
八 傳説及び劇化された名力士	一〇八
九 角力道に傳へられてゐる巨人	一三
一〇 女角力の盛衰	一四九

一 角力道の維新……………一五五

明治角力の危機と國技館創立に至るまで

一二 延遼館天覽大角力以前に於ける明治初期角力道の實況及び佳話挿話……………一七一

一三 力士の殉國精神、及び伊藤公と力士隊……………一八九

一四 明治十七年の天覽角力……………二〇四

一五 明治四十三年 東宮殿下國技館春場所に台臨……………二一八

一六 昭和聖代の天覽角力……………二三四

一七 梅ヶ谷、大達より常陸山、二代目梅ヶ谷に至る中間の名力士……………二三八

一八 張手、大勝負の批判……………二四三

一九 新時代角技の妙諦及び其の原則確立者たる横綱大錦の研究……………二五三

二〇 力士の名稱、階級及び横綱の起原……………二八九

二一 前角力から横綱になるまで(横綱大錦の自敘傳)……………二七六

二二 歴代の横綱略傳……………三八

一角力の起原

(一)

相撲また角力と書き、現在に於ては、此の二つの稱呼が尤も廣く通用してゐる。互に力を角するの技であることはいふまでもない。角力の名稱、字義等は、改めて後に記すであらう。

抑、角力の起原は漢としてゐる。世界諸邦、到るところ、太古の代より角力らしいものが行はれてゐて、そして概ね今までそれが傳はつてゐる。しかしそれを國技として誇としてゐるのは、我邦だけであり、また單に技術としても、日本の角力が世界的に尤も高尚、優雅な發達を遂げてゐるのみならず、ますます發達すべき將來性を有してゐる。

我邦の角力は、遠く神代のむかし、建御雷神と建御名方主神とが、出雲の小濱で力くらべをされたことが神代記に見えてゐる。

「力競チカラクラベ」といふは、本邦固有の術名である。此時、建御雷神より、力競せんと求められたるを見れば、此時、「力競」といふは、既に定まつた術名であつたことが分る。また此時、「力競」の

方法として、互に、手を取らんことを求められたのであつた。敵手の手を取つて強く引く、または刎ねるのであつた。神代の「力競」といふのは、此のやうな簡單なものであつた。しかし數千年を歴て今日に至つても、此の「手」と「取る」との兩語は、いつまでも失はれずして、角力に於て術のことを手といひ、組むといはずして取るといふは、遠く神代に淵源してゐる。

此時の兩神の力競は、今の角力とはよほど違ふ。また神代の角力は、果して日本固有のもののみであつたか、外國の影響をうけた點があるかといふことに就いては、遺憾ながら未だこれを明らかにすることを得ない。廣く海外に考へて見れば、世界の何處にも、古くから角力はあつた。

聖書の舊約全書中には、ヤコブが神と力較べをしたことが載せてあり、埃及の古墳のうちに殘る壁畫に、角力の圖が描かれてあり、五千年前の埃及の角力の技術が稍々想像するに足るものがある。印度に於ては、數千年前、角力が盛んに行はれたことを徴するに足るものが多々あり、法華經安樂品の中に、「相扱」「相撲」等の字が見え、此の相撲の字が、後世、我日本に尤も廣く用ひらるるに至つたのである。其外、佛經中、相撲の字を見ると少からず、釋迦の時、角力盛んに行はれ、悉多太子の弟、難陀太子は調達と相撲して、調達、顛倒して神心悶絶すとある。佛經は梵語を譯したものであるから、翻譯が正當であつたとしたら、相撲は蓋し拳を用ひて突く拳法のやうなものではなかつたかと思ふ。とにかく、これ等、埃及、印度諸國古代、これ等圖畫及び

記事の見えたる時より遙に以前より角力の存在したることは疑ふべくもない。

支那に於ては、戰國の時に、穀抵の字が見え、それが改まつて、「角抵」となつた、即ち「角觥」である。角觥は、必ずしも今の角力と同じきものか否か、不明であるが、古來、吾邦に於ては、角觥を以て角力と解釋して來た。其後、支那に於て、晋書あたりに相撲の記事が見えてゐる。日本角力と、よく似てゐるのは蒙古の角力でその起原に何等かの關係があるかと思はれるやうである。これを要するに、數千年の昔より世界到るところに角力あり、いよ／＼其の起原に至つては、更に遼遠なる人類發達の最初期に溯るであらう。

(二)

我邦に於ける角力が正史に現はれたのは、垂仁天皇御宇（紀元六三〇）、野見宿禰、當麻蹶速を朝廷に召させられて、其技を、天覽ありしことを以て最初とするが、これは勿論、本邦角力の起原ではなく、「天覽角力の起原」である。爾來、日本紀に雄略天皇十三年（紀元一一二九）に、采女たちをして、裸體に幘鼻禪をつけて、相撲はしめたとあり、續いて、皇極天皇、及び持統天皇の御代等にも、相撲が催されたことを見て居り、兵士の士氣を振起すための遊技の一つとして賞鑒せられ、夙に、皇室より御獎勵を辱くしてゐることが知られる。野見宿禰と當麻蹶速との

勝負を見ると、宿禰は蹶速を蹴り倒し、その肋骨を蹴折つて死に到らしめてゐる。蹶速の名が、第一、蹴ることの速かなるを以て稱せられたものであることは疑なく、互に蹴りあひ突き合ふ、勿論土俵などは無く、その術、頗る支那の拳法などと似たものがあるやに思はれる。その勝敗の決、生死を賭して戦つた深酷なものであり、今のやうに、僅に土俵を踏越しただけで勝負になるのとは、まるで雲泥の相違どころではない。およそ諸國の角力的の技は、支那及び西洋には、拳を以て突くものが多く、埃及及び印度の如きは、その圖、その記事、ともに取組んで競うてゐる。大體に於て、此技、突くものと、取組むものと分れて二流となるけれども、その源流が一なることとは言ふまでもなく、日本の角力を見て、突き、蹴り、取組むと、悉く備はり、立合の初は概ね皆突き合ふのが普通であるのを見ても知るべく、後世に至り、敵を傷害することを避けて、拳を以て突くのが、掌を以て突く突張と變遷したるに過ぎず、日本の角力が支那西洋の拳を主とするに對して、取組を主とするものであるとは、斷言することはできぬ。

和名抄に、「相撲」を、「古布之字知」と訓じてゐる、相撲は即ち相扱と同じく、支那の拳法によつて訓を下したのであらうが、本邦の角力も、立合の始は、突き合ひ、即ちコブシウチである。しかし本邦の角力は、單に此のコブシウチのみに止まらず、突く、蹴る、そして戰場格闘及び捕縛等の技と相出入して、極めて複雑、高尚なる技術の發達を致し、遂に世界的に、尤も發達した

る今日の角力となり、殊に近世數百年間、角力に武士的精神を吹込むことを獎勵し、成功したるを以て、「角力」者は、力士の名を以て呼ばれ、武士の名、既に廢せられたる現代に於ても、力士の名は嚴存し、また將來に於ても、力士の稱呼の下に斯道の鼓吹に任すべく、我邦の國技として世界に誇るべき内容の充實を見るに至つたのである。

(三)

聖武天皇、神龜三年（紀元一三七五）相撲節會を起し給ひ、毎年七月、天下の強力者を召して、朝廷の禁庭に於て相撲、天覽ありし以來、平安時代を通じて、相撲節會は、朝廷の盛儀として行はれたが、武家時代となり、節會が廢せられて、將軍の上覽角力となり、戰國の世となつて、始めて角力を職業化し、公開して生活の道とすることが行はれ、元和偃武、天下泰平の世となり、寄付角力、または慈善角力の形で行はれたもの、即ち「勸進相撲」であり、今の大角力は、つまり其の延長に過ぎない。勸進角力の起原は、明正天皇、寛永元年（紀元二二八五）明石志賀之助が四谷、鹽町の笹寺境内で興行したのを始とするといふ説があるが、明石志賀之助の事に關しては、史實、即ち學問的材料が不十分である爲、彼を横綱第一代とすることも、唯だ傳説の上のみといふにとどめたい。とにかく此頃から勸進角力が諸方に盛んになり、その弊害もあつたと見

え、慶安年間に、一旦、禁止令が出たが、元禄十一年、淺草にあつた三十三間堂が炎上したため、深川、富岡の八幡宮境内に移轉するに當り、寄付金奉納の地固めを申立てて、官許を得て、勸進角力を復活したが、連綿として永續し、今の大日本相撲協會の起原となつた。

爾來、八十年間、深川、富岡八幡宮の社地が、大角力の興行地となり、即ち本場所の起原となつたものであるが、その後、神田明神境内、四谷、鹽町、藏前八幡、芝神明等でも舉行され、文化十年（紀元二四七三）に至つて、始めて「東兩國、回向院」で、春夏二回の大相撲が舉行せらるることになり、即ち「本場所」ができたのである。回向院といへば、寺院といふよりも角力場として天下に知られ、種々の變遷を経て、明治四十二年、斯道の大に隆盛を極めるに至つて、「國技館」の建設となり、いよ／＼ますます無限榮昌の一途を辿りつゝあるが、昭和、聖代の洪運に際し、さしもの大鐵傘も、狹隘を告ぐるに至つたので、淺草、藏前、工業學校跡に廣大なる地をトして、將來の「大國技館」建設が豫定されてある。いづれは日支事變解決、東亞經綸の聖業大成の日を待つて、實現するものと思ふが、實際には、角道の各方面に、多くの懸案の解決が試みられるであらうし、第一、協會組織の革新、力士の生活、行司即ち審判制度の改善、仕切時間の問題、興行上にも、短時間制、及び茶屋の存廢、見物の椅子席、棧敷に於ける酒食の禁止等、多數の問題が解決されて、新しき大國技館が、世界的に東京の誇となるの日が來るであらう。

(四)

現代に於ては、字面の平易なるを喜び、角力の字を廣く用ひてゐる、將來も、此の字がますます用ひられるであらう。斯道の字義、名稱について少しく書いて見よう。

(一)力チカラ 競チカラ 本邦固有の術名である。當麻蹶速は衆に語つて、「何ぞ強力者に遇つて死生くことを言はずして、ひたぶるに争チカラ力せん」と言つてゐる。争力、角力、力競みな同じく、チカラクラベといふ和語を漢譯したるに過ぎない。角力の用語は、「テコヒ」である。即ち手乞ひで、建御雷神、建御名方主神の神事に徴して知るべく、古今著聞集にも、「時弘頻りに宗平をテコヒて、若し負くるものならば、時弘が首を斬られん」とある。

(二)搦力スマヒ 日本紀、野見宿禰、當麻蹶速の力競の記事に、始めて此字を用ひてある。スマヒといふ言葉は、日本紀編纂の頃に行はれたもので、溯つて昔の事蹟に命名されたものであらう。此のスマヒが、今のスマフの起原たることは言ふまでもない。

菅家世系録といふ書物に、野見宿禰は、蚤ムシのやうに速かつたから、野見宿禰といはれたとあるのは、斯道に於ける古い笑話である。宿禰は出雲國の人で、そこに野見といふ郷名が残つてゐる。

(三)相撲 日本紀、皇極天皇の御代以來の力競に、此字を用ひてある。相撲の音がスマフに似てゐることは、後來、此字が尤も廣く行はるゝに至つた主因であらう。

(四)部領合 コトリヤヘ 光孝天皇の御代より部領使を諸國に遣はして、相撲人を召し、節會の取手に充て番合せらる、故に節會の角力を「部領合」といつた。

(五)角觥 これは支那に在つては極めて古く、秦の時、既に此名あれども、角觥は一種の戲技にして、圖に據れば、牛頭の假面を被つて演じ、側に在る者、金鼓を鳴して節を打つてゐる。角觥の中に、角力の技を含むやうであるが、角觥即ち角力ではない。

「角力」、「手搏」、「拍張」等は、ともに角觥の換字にして、漢籍及び佛書等にも、往々、散見してゐるが、詳解するまでもあるまい。

(五)

角力に關する文獻及び著書等斯道に關する研究は、斯道の隆昌とともに、ますます盛んになりつつある。然れども、古來、其の發達の徑路、技術の内容の變遷等、まだ研究すべき問題は多々あり、斯道の史的研究の前途は、猶ほ遼遠である。惟ふに、今の角力は、その精神作法ともに古風を傳へてゐるが、技術に至つては、數千年來の研究、練磨によつて、今日の進歩發達を見

るに至り、日本の國技として世界に稱揚せらるゝこととなつた。蓋し我邦の肇國以來、多數、國人の力が加はり、國體とともに榮えて今日に至り、日本が世界の大國となるに及び、斯道も亦世界的となつたものであるが、此の如く、數千年來、連綿として、嘗て中斷したることなく、ますます進歩發達しつゝある競技は、世界的に見て、わが角力が唯一であらう。

斯道は、古來、角力を以て稱せられ、「力競べ」より、力競べする技術の發達が、肇國以來、最近に至るまで、駸々として發達し來り、斯道は古來の面目を一新するものがあるが、併し「力」といふ一字を主とし、勝敗の決は「力」にあつたのが、最近に至り、國運の發展と共に、斯道に大變革起り、智的角力、即ち所謂頭で取る角力、勝負の推進力が頭腦にあるといふ角力の世の中となり、角力といふ字面に未曾有の衝擊を與へた。故に、これ以前の角力を舊角力とし、これ以後を新角力とし、角道が、其の内容に於て、躍進して、新世界に突入したのである。

明治維新は、新日本を出現せしめ、有らゆる方面のもの皆新しくなつた。角力は、其形體に於ては、大日本角力協會が創立されたのが斯道の維新であり、内容に於ては、「智的角力の開拓」が斯道の維新でなければならぬ。此の内容の維新こそは、角力道に於ける永遠の光輝である。故に本篇に於ては、特に此事に重きを置いてゐる。

二 相撲節會の大要

(一)

相撲節會は、正しくは之を「スマヒノセチ」「相撲節」といひ奈良時代及び平安時代、數百年間に涉りて宮中に於て盛行された儀式の一つにして、本邦角力道の發達を促した大切な過程となつたものである。後世、相撲節は廢せられたが、天覽角力は、専ら此の相撲節の故實に則り施行されるのである。

さて元正天皇、養老三年七月（紀元一三七九）に、初めて、「拔出司」を置かれたのは、角力道發達の濫觴と稱すべきである。拔出といふは選手といふことである。初めて角力の選手を選び、その人々が相撲節に出場する。即ち拔出は力士の起源になるのである。かくの如く、角力道及び相撲節會の曙光は、奈良時代にあり、元明、元正、聖武と御三代、續いて相撲節會を重んじ給ひ、聖武天皇の時、諸國から力士を貢進せしめられ、違背する者は位記を剝奪するとあるから、その一斑が想像されよう。聖武天皇の天平六年七月丙寅の年（紀元一三九四）に、角力を天覽遊ばさ

れたことが、續日本紀卷十一に見えてゐる。これが角力節會の濫觴である。

さて角力節會は、爾來恰も百年を経過して、仁明天皇天長十年五月（紀元一四九三）の勅に、相撲節は音に娛樂の爲のみに非ずして、武力を練磨する爲であることが述べられ、越前、加賀、能登、佐渡、上野、下野、甲斐、相模、武藏、上總、下總、安房等の國から力士を貢進せしめることが見えてゐる。これに由つて、當初、唯だ闘技として愛看せられてゐた角力が、武技として重んぜらるゝに至つたことを知るべく、また茲に列擧され、諸國は、爾後、最近に到るまで力士輩出を以て有名なるを見れば、これ等諸國が「角力の國」として淵源するところ、甚だ遠きを知るべきであらう。

(二)

延喜式によれば、宮中の年中行事に、「三度節」といふものがあつた。即ち正月十七日の射禮、五月五日の騎射、七月廿五日の相撲との三節會である。この三節會は、いづれも、本邦の國體よりして、武を練り、體を鍛へ、以て武道的精神を鼓吹せられた儀式の會である。これが儀式といふ意味からして、式部省の所管であつたが、闘技から武技に移るに及んで、相撲節會は、兵部省の所管に歸するに至つたのである。明治以來、國技館の土俵に、陸軍の幕を張つてゐるのは、此

の古精神の復活とも見られる。

相撲節の期日は、最初は七月七日であつた。されば野見宿禰と當麻蹶速との角力の記念日であるのと、七月七日は、かねて七夕の節であるから、晝は角力を見給ひ、夜は七夕の雅筵を催し、詩歌の遊をなさしめ給ひて、文武兩道の節日であつたが、後に七月十六日に改められ、更に七月廿七、廿八日の兩日、その月が大であれば廿八、廿九日の兩日といふことになり、更に延喜式には廿五日、廿六日の兩日と定められたのである。

相撲節會の準備について略説する。相撲節會の行はれる年には、先づ其年の二三月頃に左右近衛府の舍人などの中から、相撲使を任命して諸國に派遣せしめらる。これを「コトリノツカヒ」、即ち事執りの意味で、「部領使」と書く。全國から角力の選手を集めるのである。體格偉大、力量絶倫の者を探し出す爲に、部領使は、遠く東北の僻地、山村までも尋ねあるいて苦心したやうである。殊に僻境の關所などには、關を固める爲に強力の者を採用してゐたから、さういふ所も目ざして行つた。後に「關取」の名、「大關」、「關脇」などいふは、關所に因んだ名稱だといはれてゐる。かくて角力人として指定されたものは、六月廿五日、節會より約一箇月前までに上洛するのである。此の期限を誤ると、角力人は禁獄され、その國司も所罰される。左近衛府で募集した角力人は「左方」、右近衛府で募集したものは「右方」と定められ、節會の角力は、此の「左

方」「右方」の對抗となるのである。

相撲節日の一箇月前に、左右、各、「相撲司」を任命し、參議以上のものを左右に分屬せしめて、諸般の準備に當らしめ、全體の總長、即ち「別當」には、親王を任命せられるから、相撲節會といふものは、朝廷の儀式の中でも、大きなものである。相撲を國技などと稱する由來は、遠く此邊にも存するのである。

相撲節の十日許前になると、「相撲召仰」といふことがある。先づ上卿、勅を奉じて、左右近衛府の中將、少將及び裝束司の辨官等を召し出して、相撲を行ふべき仰せを達せしめられる。即ち事始めである。それから左右近衛府の相撲所が開始され、相撲稽古が始る。この稽古を「内取」といふ。即ち地取であり、左右の府で行ふのを「府の内取」といふ。此の内取は、左右別々に行ひ、その角力振りは、互に祕密にしてゐる。そして節日の二日前になると、角力人を宮中に召し、仁壽殿若くは清涼殿の庭上で、稽古を、天覽に供する。これを「御前の内取」といふ。即ち天覽地取であるが、これまた左右府別々で、左府が終つて右方に及ぶ。各、十五番、左右合はせて三十番の取組である。左右近衛大將は、終始、その勝負附をとつて、各、角力人の順位を定め、節會の取組作製の参考とするのである。

相撲當日の本儀式「江家次第」によつて略説する。

先づ前日の準備から始める。紫宸殿の殿中を隈なく洒掃し、御帳帷を立派に装飾し、御簾、御屏風など整頓し、玉座、御座、皇族以下高官の座席が設けられる。相撲場に充てられる南庭を、綺麗に掃き清め、長樂門、永安門より内に、白砂が清々しく敷きつめられる。幕を所々に張りめぐらして、それ／＼所定の座が設けられ、東の長樂門寄りに、左の相撲屋（角力溜）、西方の永安門寄りに、右の相撲屋を作る。紫宸殿の正門を承明門といふ。門内、東、長樂門、西、永安門に向つて、東方に、左方の第一大鼓、第二大鼓、第一鉦鼓、第二鉦鼓、大棒一、小棒十二が立てられる。西方には、それに應じて右方が飾り立てられ、すべての光景が厳しくも亦素晴しさを極めてゐる。角力節會はかくの如く輝かしい儀式である。

却説、節會當日となれば、早朝、左右近衛大將が、それ／＼「御前の内取」の勝負表を参考して、番組を作製する。装束司は、上下の御衣紋を上げる、相次いで角力人、樂人（左右各六人）が參入する。

辰刻、即ち午前十時頃、天皇は黄植染の御袍、御束帯を御召しになり、紫宸殿に出御遊ばさ

れる、時に麴塵の御袍を召させられ、或は略式に御直衣のこともある。東宮を始め、皇族、高官着席。文官は縫腋袍、武官は闕腋袍の晴の束帯姿である。次に左大將、右大將、順次進んで、各相撲の奏文を上る。右方の奏文を左大將にお下げになり、番組を作つて再び奏進せしめ給ふ。

次に、「相撲長」（頭取）左右各二人が、退紅袍、白下襲シメガサネ、白布袴、帶劍といふ出立ちで式場に參入する。次に「立合タチアハセ」（行司）が出る。服装は「相撲長」と同じだが、箭を負ひ弓を持つてるのが違ふ。最後に「籌刺カズサシ」（籌刻、又は籌指）が出る。これは記録掛である。これも弓箭を帯びてゐる。勝負の審判官は、近衛の大將、中、少將等を以て充てらる。勝負の審判は鄭重にされたもので、勝負が疑はしい時は上卿が左右の中少將を階下の東西によんで所見を求め、或は列席の公卿に聞き、なほ決し難い時は、最後に、天皇の御裁決を仰ぐことになる。これを「天判」と稱へる。

萬端の準備が整つて、第一番の相撲が始まる角力人の服装は、裸體に、布の「犢鼻褌ウツサギ」を締め、これに紐小刀を差し、烏帽子をかぶり、狩衣だけを着て、袴を穿かず、足は跣足といふ珍妙な姿で參入する。いよ／＼出場となれば、この劍衣を脱して、承明門寄りの圓座の上に置き、烏帽子を脱ぎ、犢鼻褌一つとなつて角力を取る。抑、角力は裸體で取るのは、此時に始まるのではなく、我邦の古風であることは、これより遙以前、雄略天皇の時、（御即位十三年、紀元一二八）采女

を召し集めて、犢鼻褌だけで角力取らせ給ふ記事を見ても分る。双方、裸體で取るのでは、見馴れぬ目には、見分が付き難いから、左方には、葵の造花、右方には瓠の造花を頭髮に差して出場させる。この挿頭花には、

「ゆふがほに あふひの花のさしあひて いづれか花の かたんとすらん」

といふ名高い歌がある。勝方の造花及び劍衣は、縁喜好しとして持てはやされるが、次の番に着けしむる慣例もあつた。それを「肖物」といふ。今の大角力に、勝つた力士が次の力士に水をつけて行くやうなものであらう。

節會の取組は、東西ではなく、左右方である。先づ左方の角力人が、左近の櫻樹の下に、次いで右方の角力人が、右近の橘樹の下に進立する。かくして「立合」の指導の下に、角力が開始されるのである。一、二番の後に、王卿以下に酒饌を賜はり、三、四番後に 天皇に御膳を供し奉る。一番毎に、勝方の「立合」は舞を舞ひ、勝方は負方に對して笑聲を浴びせかける。また負方は、その都度、「立合」「籌刺」がとりかへられる。若し勝負が長びいて容易につかぬときは、承明門の方に追下げて、次番に移る。番數だん／＼と取り進み、日も西に傾き、十七番に至つて終了するのである。左右府の對抗角力であるから、勝量の多い方を勝とする。しかし勝量が少くとも、[★]最手（大關）が勝てば、其方が勝利となる。勝つた方は、「亂聲」といつて、大鼓、鉦鼓を打つて

囃し立てる。左方が勝てば「抜頭」、右方が勝てば「納蘇利」の舞を舞ひ、左右の樂人が一處になつて樂を奏するのである。舞樂終つて還御、續いて王卿以下退出。

その翌日、節會第二日には、「拔出」といつて、前日の優勝角力を組合はせ、また勝負のつかなかつた者を取直させる。この日の「拔出」は、二番位のもので、音樂抜きの場合でも四五番以上にはならぬ。「拔出」の後で、「追相撲」といつて、白丁や左右衛府の舍人などを角力せしめることもある。

節會第二日は、同じく紫宸殿南庭で行はれて、天覽を始め、すべて前日と同じやうに行はれるのであるが、唯近世の土俵入の起源と思はれるやうな所作が行はれることである。先づ左方の角力人が、庭上の東方、北向き西頭に、すらりと列立する。すると上卿が「南へ向け」と號令すると、一同、南へ向く。次に「西へ向け」と號令すると、西へ向く。そこで「罷入れ」と號令すると、一同退下する。次に右方の角力人が、庭上西方、北向き東頭に列立する。そこで右方の上卿が、「南へ向け」「東へ向け」「罷入れ」順々の號令で、右方角力人、退下すること、左方と同じやうである。

相撲節が、めでたく終了した後で、負方から献上するものを「輸物」といつた。また左右近衛の大將が、節會の關係者及び角力人を、その自邸に招宴して慰勞するのを、「還饗」といつた。

なほ餘興として布引なども行はれ、角力人にそれら、引出物を與へた。

(四)

相撲節會の日の取組及び取口に就いて概略を述べたい。

取組の番數は、最初の中は二十番であつたが、後に減つて十七番となり、實際には、其日の都合や、立合に手間がかゝつたりして、十四番位で終つたこともある。尙ほ古くは

一、「占手」(小童) 二、「垂髮」 三、「總角」

以上いづれも白丁である。相撲の初に、即ち前角力として、此の順序で取組ませ、終はつて角力人の取組に移つたものであるが、後には此の前角力は廢せられた。

角力人の第一雄者を「最手」(大關)といふ。また「本手」とも書く。次を「腋」(關脇)「腋手」また「助手」ともいつた。かういふ席順は、角力の成績によつて上下されたことは、當代の物語等にも見えてゐる。そして取組の順序としては、後世と同じやうに「最手」が最後に登場するのであるが、時によつては、「腋」が最後に出ることもあつた。

節會角力の取口、即ち「相撲の手」は如何なるものであつたか、それを考へるには、先づ「土俵」といふことを考へなければならぬ。原則的に、我邦の角力は、節會角力から變遷發達したも

のであるが、唯だ節會角力には後世の所謂土俵がなかつた。畢竟、勝負の場所が非常に廣いといふことであつた。「角力の手」は、此の土俵の廣狹に關係することが非常に多いのである。「相撲大全」の書中には、「相撲の手は古法四手である。それらの一手より投、かけ、ひねり、その十二手づゝを編出し、四十八手と定む」とあつて、四十八手の名の起源は頗る古いけれども、節會角力には、まだ四十八手の名は無かつた。節會角力が年代を経るに隨つて、漸次發達したことは想像されるが、「角力の手」らしいものが、當代の文學に現れたものをひろつて見ると、土俵が無いから、突出し、寄切り、打捨り等の勝負は無く、自然に、前に後に投げ倒し、下に潜ぐつて反ること、手を突き、膝を突かせる等の勝負であつた。「頭をつめて攻めたまけるに、悶絶してけり」とあるは、わが胸に敵が頭をつけて来るを、構はず、其儘、力に任せて、敵の頭を締めつけたものらしく、爪を長くして敵の顔を引掻いたといふ話も見えるから、先づ張手のやうなものもあつたであらう。手を突かせ、膝を突かせるには、引落しの手は屢々行はれた。四辻を取つて、前へ強く引かれたればとあるは、四辻、即ち禪の尻の上の結び目を取つて引落したのである。面白いのは、

「敵の腹へ、頭を入れて、こゝくじり轉ばしければ、これより腹くじりといひける」とある。腹くじりは、即ち頭捻りである。突倒しはあつた。角力の手は、だん／＼粗より精に入

たのである。

立合は、行司が弓を以て指揮するが、その合圖に應じて、すぐに立たぬものがある。今昔物語には、六度までも何とかかとか言つて立上らなかつた者のことが書いてある。節會角力は、行司の指揮一度ですぐに立上るのが常法であるが、中には立合の下手な者が、或は何か策戦を考へたりして、十分に有利の場合でなければ立たぬ者がポツ／＼現はれるやうになつたのは事實である。唯だ六度位で特筆されてゐるのは、最近の角力と違ふ。「待ツタ博士」も「注文上手」といふことも、みんな節會角力の昔に淵源してゐる。

(五)

相撲節會の盛衰變遷の大略を述べる。相撲節會は、聖武天皇の天平六年に始まること前述のとほりであるが、同十年に更に盛んに行はれ、平安時代となつて桓武天皇の延暦年中に至つて、ますます盛んになり、續いて、平城天皇の大同年中、嵯峨天皇の弘仁年中、淳和天皇の天長年中、仁明天皇の承和年中、清和天皇の貞觀年中より、陽成天皇の元慶年中、光孝天皇の仁和年中、村上天皇の天曆年中に至る二百二十年間は、大體に於て、相撲節會が盛大に行はれた時代であるが、しかし其間に於ても盛衰あり、平安時代の初期淳和天皇から清和天皇まで(紀元一四九一—一五

三六)約四五十年間が、相撲節會の最盛期と稱すべきであつた。

其後、相撲節會が、漸く縮少されたのは、その式場が神泉苑から武徳殿に移されたので知られる。従來森嚴を極めた相撲節會の儀式を略式で行ふのを「節代」と唱へ、また「仁壽殿相撲儀」とも唱へ、規模が餘程縮少され、醍醐天皇より鳥羽天皇の御代に至るまで、更に、節代、仁壽殿御儀を縮少されたものが、臨時相撲である。

鳥羽天皇の保安年間から、相撲節會は中止され、後白河天皇の保元三年六月(紀元一八一八)に至つて、一旦、復興されたが、保元、平治と兵亂が續いた爲め、節會は恒例となるに至らず、其後十六年を経て、高倉天皇の承安四年(紀元一八三四)に再び相撲節會を行はせられ、次いで十二年を経て、後鳥羽天皇、御即位の年文治二年(紀元一八四六)、直ちに節會を再興させられたが、時、偶々鎌倉幕府の創立となり、兵馬の權、武家に移り、角力人を全國的に京都に集めさせられることも容易ならざる有様となつたので、平安時代の相撲節會は、此時を以て終を告げたのである。

三 平安時代の力士

(一)

平安時代は、角力道に於ては節會角力時代である。此時代の話題に残る力士に就いて略説しよう。

第一に、文徳天皇の御時、第一皇子維喬親王と第四皇子惟仁親王との皇太子選定に、競馬にては、惟仁方の勝利となりしが、天皇は安心し給はず、角力勝負によつて、いよいよ決定せらるることとなり、紀名虎と伴善雄との二人が目覚ましき勝負をして、第四皇子惟仁親王方の大勝利となり、惟仁親王即ち清和天皇にて在しますといふ話は、世繼物語にも載せず、前々太平記にも、あと方もなき虚説と、一蹴してゐる位で、史實とは認められない、畢竟、此勝負、祈禱によつて、神通力が伴善雄に乘移つたといふのは、僧侶が作り上げた靈現記に過ぎぬであらう。

第二に、好色で名を得た在原業平が、案外に角力が強かつたといふのである。宇多天皇、御年十九にて、未だ東宮に立たせ給はざりし以前、殿上の御椅子の前にて、業平と角力とらせ給ひ、

高欄が折れたことが世繼物語に見えてゐる。

第三に、源氏の祖先として有名な多田満仲は、さほど強くはなかつた。時しも、冷泉天皇の御世に、橘繁延、僧蓮茂、藤原千晴と満仲等と、式部卿宮を奉じて關東に赴き旗揚せんと、寄り寄りに陰謀を凝らしてゐたが、或時、西の宮殿にて、満仲と繁延と角力を取つたるに、満仲ひどく格子に投付られ、顔を打缺いたりして、衆人環視の中といひ、圖らずも激昂して、腰刀を抜いて突かんとすれば、繁延、高欄の根木を引放つて、大上段に振りかぶり、寄らば頭を一撃と構へて立はだかつたので満仲、力及ばず、その儘で別れたが、此ことから仲間割ナカマワリがして、満仲は此の陰謀を密告することになつたのである。

第四 一條天皇の御代に、宗平といふ強力士、その頃、三河國の伊勢田世といふ丈高く骨太く力極めて強きが、節會の最手を久しく勤めてゐたのを、宗平うち勝つて最手となり、田世は脇に下つた。左右の角力に、一人として宗平に敵する者は無かつた。

第五 無名の大剛學士の話。これは宇治拾遺に出てゐるが、金太郎の御伽話のやうな武勇談である。後一條天皇の御世、相撲節會を前にして、諸國の力士が京洛に集まり上つてゐる中に、奥州の角力、業村等數人、つれ立つて、大學の東門を過ぎて南門の方に行かんとして、大學生たちと衝突して、學生たちは、そこを通さぬといふ。その中に一人、いでたち他より聊かすぐれたの

が、仁王立ちになつて、通さぬといふ。田舎上りの連中なれば、その日は一步譲つて歸り、明日は、あの學生の尻鼻、蹴破つて通つてやらうと言ひ合はせて行くと、學生たちも前日より多人數出て待ち受ける、例の學士、大路を真中に立ちただかつてゐる。業村それと目くばせすれば、一人の角力、丈高く大にして若いのが、躍りかゝつて蹴倒さんと、足を高く舉げたところを、學士は飛び違つて、空を蹴らせ、揚つた足を、細い杖でも持つたやうに、攫んで引つさげつつ、他の角方の群に、奔りかゝつて來る勢に、一同、恐れて逃げ出すを、學士は引つさげて來た角力をとつて二三段ばかり投げつけければ、角力は、つぶされた蛙のやうにへたばつた。學士は、なほも業村目がけて、追かける。業村、朱雀門の方へ奔り、脇の門から、式部省の築地を越えんとするを、學士、飛びかゝつて足の踵を杵ながらびしと捕へたれば、業村引放つて築地を越して逃げたが、杵の踵の皮を取り加へて、刀で切つたやうに引切られてゐた。

此の恐しき大剛學士は、業村等がその後、調べて見たが、たうとう其名が知れなかつた。

第六 後一條天皇の御代、左方の最手、眞髮業村。右方の最手、海野恆世。即ち東西兩大關の取組は、當代隨一の大勝負であつた。業村は陸奥の出身、丈高く力強し。恆世は丹後の角力、業村より丈は劣れども力は匹敵して、殊にすぐれた角力上手である。業村、腰を引き、頭を敵の胸につけて、強く押すを、恆世、引寄せて、仰げざまに投げつけ、業村の倒れた上に、恆世も折重

なつて倒れた、二人とも、身を強く打つたと見え、暫くは起上らず。やがて下なる業村の方が先に起きて、人に手を引かれて歸つた。勝つた恆世の方は、いつまでも起上らず、人々、介抱して、業村は如何と聞けば、「牛の如し」とばかり一言いつたきり、衣服金銀の纏頭、山の如くに積み上げたるを、恆世は苦しげに一目見た切り、歸國する途中、播州で歿した、業村の爲に、胸骨を折られたのだつた。

第七 これまた後一條天皇の御代、相撲節會に、大剛常世といふがあつた。久光といふは、敏捷で、爪を長くしてゐて敵を引かきて、惱ましてゐたのを、常世に合はせられた。引搔手といふは、平安時代にも極めて珍しいことで、此の久光よりほかには聞かない。常世、一二度、搔かれたがものともせず、引寄せて久光の頭を胸に押當てて攻め立てれば、久光堪へず、悶絶した。久光、生氣づいて後、引搔いたりして、大剛力士をからかふやうなことをしてはならぬと言つた。その後は、常世を恐るゝこと鬼神の如く、常世と取らなければ投獄するとおどかさされても、命あつてのもの種と遂に久光は二度と常世には合はなかつた。

第八 中納言伊實は、角力、競馬など好みて學問はせず、公卿には珍らしき角力巧者の剛力であつた。父の伊道大臣、何とかして其子の角力道樂を止めさせようと苦心して、「おまえ、腹挟ハラエクリと一勝負して、勝つたらば、以後、角力道樂、自由にせよ、とめはせじ、若し負けたらば、ふつ

つりと角力止めよ」と、嚴重に申渡したのであつた。腹抉といふは、その時、有名な業師で、敵の腹に頭をつけて抉ぐり轉ばすのが名人、よつてその實名は知らず、世に腹抉と呼ばれたものである。

伊實中納言、畏まつて候と申す。かくて腹抉を召合はするに、中納言は、相手の爲す儘に任せれば、腹抉つと潜り入つて、得たりとばかり頭を腹に押しつけ、まさに抉らんとするを、中納言、その四つ辻を取つて、力に任せて引つけければ、頭も折れるばかり、その痛みに堪へ得ずして、腹抉ぐりは俯つ伏しになつて倒れ伏した。伊道大臣は、ひたすら呆れて、腹抉は、面目無く、何處ともなく出奔。

第九 後三條天皇の御代に、豊後國日田郡に、日田鬼太夫大藏永季といふものがあつた。その由來を尋ねると、神武天皇の御宇に、善童鬼といふ者、紀州、大藏谷より鬼武、武内、武下、以下の家人を具して日田郡に下り、故郷の地名を取つて、大藏を以て氏とす。その末葉に、妙童鬼といふ者、日田鬼藏太夫永弘と改む。白鳳年中の人である。脊に一尺二寸の毛生え、強力無双であつた。それより更に數代を経て永季に到る。身長八尺に餘り、その強力のほど測り知られず。延久三年、年僅に十六歳にして、相撲の節會に召されて上洛す。節會角力の時代に、此のやうな少年大力士は、極めて稀である。此人の系圖、その武勇談、ともに神祕にして信じ難い。然れど

も堀川天皇の御代にかけて、すべて十度の節會角力に全勝して、名を天下に揚げたといへば、王朝に錚々たる力士であらう。長治元年七月十八日（紀元一七六四）四十九歳にして病歿した。後其所に寺を建て明量寺と名づく。

第十 鳥羽天皇の御代に、帥大納言長實の許に、尾張國の力士、小熊權頭伊遠といふ者、その子伊成を同伴して上洛した。その時、偶々弘光といふ角力が來てゐて、同じく酒など賜はり、酌酌の上、弘光、廣言を吐き、近頃は身體さへ大きくなれば、最手になれるなどといふを、伊遠、聞き答めてより事起り、弘光、伊成、力競べをすることになり、伊成、弘光がさし出した手をひき握る。弘光引抜かんとすれど能はず。弘光、此のやうなことのみに勝負がついたといふわけでないと言ひ捨て、二つの袖を引ちがへ、袴のくゞり高くからげて、庭に下り立つ。伊成も續いて下り立つ。兩雄の對場、さながら金剛力士の對場の如くであつた。伊成進んで弘光の手を取つて、つよく前に引けば、弘光、うつぶしに轉ぶ。弘光、立上り、今のはやりそこないだといひつつ、前に進み來るを、伊成、その手を取つて、うしろに刎ね飛ばせば、弘光、仰けざまに倒る。弘光、涙をハラ／＼と流し、もとどり押し切つて法師になつた。

第十一 これは強力女の話。さても節會に召されて越前より上る角力、佐伯氏長といふ者、近江國、高島郡の石橋を過ぎるとき、川の水を汲んで頭に載せて行く女の美しくしさに、心動いて、

女の腕の下へ手をさしやれば、女打笑ひ、氏長の手を脇に挟んで行く。いつまでもさうして行くから、引放さんとすれば、放すべくもなく、おめ／＼とついて、遂に女の家に行つた。問はれて、節會に參る角力と答へれば、女うちうなづき、「それはあぶないことである。王城は廣ければ、世に勝れたる大力もあるであらう。君も、無下に弱いといふではないが王城に名を揚げるほどの者とも思はれず、かく袖すりあふも多少の縁とやら、若し節會までに、まだ日數あるならば、茲に三七日、逗留なし給へ、力をつけて參らせん」と言ひ、氏長此に留り、女から教をうけて、世にも強力と唄はるゝほどになつた。この女、高島のおほろ子とて、田など多く持ち、「大井子の水口石」とて、百人ばかりもかゝつて動かすやうな大石を、一人して水口に持つて行つて塞いだといふ大力女である。

第十二 金剛力士兄弟は、節會角力には出なかつたが、稀世の剛力であつた。熊野に生立ち、兄は皆石といひ十八、弟は皆鶴といひ十五、兄弟ともに熊野に兒小姓として兒坊に住んでゐたが、南庭に池を掘り、大石を掘り出し、五十人で引捨てんとしたが動かさず、明日、多勢で引捨てようとして、人皆歸り去つた夜半に、皆石、一人して引いて或僧坊の門に引塞げておいた。夜が明けて、人々驚き騒いだが、よく見れば下駄の跡がある。それを尋ねて、皆石の兒坊に辿り着いた。妻戸を開いて兒を見れば、弟の皆鶴は、まだ眼覺めず。皆石は唯今起きた體で、寝亂れ髪ゆりかけて

琴を調べてゐた。文札には史記文選、歌双紙など並べて置いてある。容貌美しく、西施の顔色よりも、あでやかと思はれる。此の優しき美少年に、五十人以上の力量あらんとはと、人々、今更に驚きの目を見張つたのである。靜憲法師、熊野詣の砌、此の兄弟のことを聞き、懇ろに貰ひ受けて、京都に連れ歸つた。皆石は金剛左衛門、皆鶴は力士兵衛と改名して武士となり、ともに弓矢の達人で、兄の異名を養由左衛門、弟を洲濱兵衛といひ、洛中に知られた大力の勇士。法師に影の如くつき添ひて護衛するに、數十人の郎黨を引具したるよりも頼もしく見えた。

第十三 古今著聞集に見えた近江の大井子の亞流とも見るべき強力美女の事が、今昔物語にも見えてゐる。節會角力を勤めた甲斐國の力士、大井光遠の妹がそれである。人に逐はれて逃げる男が、それとも知らずして、離れ家にひとりゐる其娘のところへ飛込み、その娘を質に取り、抜刀を差しあて抱いてゐたが、女は其時、箭篠を荒造りしてゐたが、少しも騒がず、右の手で、男の刀持つ手を、やはら捕つたやうな風にして支へ、左の手で、箭篠の打散らされてゐるのを、手まさぐりに、節の程を、指で板敷に押しにじるに、恰も朽木などの軟かなるを碎くやうに、みしみしとなつた。見てゐる中に、男恐しくなり、女から放れて一散に逃げた。光遠が、あの女は、鹿の角の大なるを膝に當て、そこを細い腕を以て、枯木など折るやうに打碎くと言つた。その頃、女は二十七八であつた。

四 鎌倉時代の角力

(一)

古今著聞集に「安元より以來、絶えて其名を聞くのみ、惜しきことなり」とて、節會角力の廢絶を痛惜してゐる。しかしながら角力節會は、朝廷の儀式の廢絶したまでで、角力の衰を意味するものではなく、鎌倉時代となり、武家の手によつて、角力は却つて興隆の氣運に向つたといつてもよいのである。平安朝に於て角力、競馬の二つは、極めて愛好されたものであるが、鎌倉武士は、これに流鏑馬を加へて、流鏑馬、競馬、角力の三つを以て、武門の武戲として、心身鍛錬の要法とし、極めてこれを奨励したことは、吾妻鏡に明らかである。當代の戰爭は、箭戰に始まり、接近して刀を交へ、刀を捨てて搏撃となるので、最後の搏撃は、角力の手を用ひて決したものであるから角力は弓馬とともに武士必修の武藝でなければならぬ。頼朝が流鏑馬、競馬、角力の三つを、鼓舞、奨励した所以は此にあり、そして角力は士卒のみならず、大祿の士大夫及び諸侯もこれを實行した。平安時代以來、節會角力の遺風として、地方に武士以外の、角力を専門と

する力士もあつたけれども、鎌倉時代は、「武士の角力時代」といふを適當とする。節會角力が武士角力となつたのは、角力道の劃期的の大變遷である。

武士が戦場の組討に角力術を用ひたことに就ては、源平盛衰記卷廿一、小壺の戦の條、畠山重忠の部下、綴太郎と、三浦方の和田小次郎との組討の記事に、

「爰に武藏國の住人、綴黨の大將に、太郎五郎とて二人あり、ともに大力なりけるが太郎は八十人が力あり、東國無雙の角力の上手、四十八手の取手に暗からずと聞ゆ」

とありて「四十八手」の一語、始めて文學に現れてゐる。源平盛衰記は、源平の當時に出來たものではなく、時代や、後れて北條時代の終に出來たものとの説であるが、角力道の研究、既に進んで、一般に四十八手の言葉が行はれるやうになつたことが知られる。さて綴太郎が和田小次郎に近づき、弓矢投げ捨てて、馬を寄せて組討となり、

「引組んで馬より下へどうと落つ。綴は大力なれば、落ちたれども、ゆらりと立つ。小次郎も藤のまとへるが如く、寄り付てこそ立直れ。和田は細く早かりければ、下をくぐりて、綴を討倒して討んと思へり。脊の大小はありけれども、力はいづれも劣らず、角力はとも上手なり。綴は和田が甲の上帯引きよせて内がらみ懸けつめて、胃のしころを傾けて、十四五度ぞはねたりける。和田、綴に骨折らせて、其後勝負と思ひければ、腰に付てぞ廻りまる。綴、内搦をさしはづし、大渡に渡してはねけれども、小次郎働らかず、大渡を引直し、外搦にかけ、十四五度曳々と推せともくまるばざりけり。今は敵、骨は折れぬらんと思ひければ、和田は綴が上帯取つて引きよせ、内搦にかけ詰めて、胃のしころを地につけて、渚へむけて曳聲を出してはねたりけり。綴、骨は折れぬ。強はかけてはねたれば、岩の高きにはね懸けられてガバと倒る。」

はね返さん／＼としけれども、弓手のかいなを踏みつけて、胃のてつべんに手を入れ、亂髪を引き傾けて、頸を墮落す。」とある。此の組討、引組んで外掛け、内掛けて攻め争つてゐる。戰場組討に角力術を用ひた記事として、本邦角道史に記念すべきものであるから、茲に紹介したのである。

次に、武士が大名小名といはず、盛んに角力をとつたことについては、安元二年十二月（紀元一八三六）伊豆、相模の武士ども、柏峠の大角力、古今に有名な河津三郎と俣野五郎との取組、曾我物語の記事を左に挙げる。此の取組は、計らずも遺恨角力となり、俣野は、負けたのを根に持つて、河津の歸り途を、遠矢にかけて暗殺する。それが河津の遺子、曾我十郎、五郎の兄弟、十八年間の辛苦を経て富士の裾野の大仇討となり、不滅の國民的感激を生んだ、まことに我邦國民生活史上に一大記念となつた角力であり、人口に膾炙してゐるけれども、角力道には逸す可らざる記事である。

「安元二年十二月、伊豆、相模兩國の者ども、各々奥野に狩して、柏峠にのほり、酒宴をまうけ、興に乗じ、大なる石を擧げて、力をくらべ慰さみしが、海老名源八秀定申やう、某が取ざかりには、狩獵の歸りには、必らず角力を取り、或は力競べなどをして興としつれ。今も若き方々は争ひか苦しう候べき、各取玉はゞ、源八膝ふるふとも、出て行司をせんとひければ、老若皆狂して、然るべしと同じける。その時、實平、瀧口殿と藍澤殿、相頃にあるべし、出て始め玉へかしといはれければ、經俊聞いて東國に於て力あらん人は御出候へ。但し藍澤殿の御相手には餘ありとさして存せられ候ぞ。御望に於ては一番取るべきかといふ。重治聞いて、伊豆相模の人々に力強き人はなきか、出てあの廣言を止めよ。力



(藏氏一方尾中)

圖の撲相山澤赤

を自慢するは、凡卑の者のことなり。只侍は戰場に進みて敵を射取るに、敢へて力の有無にはよらず。憚なき力の自慢聞にくしと言ひければ、瀧口聞いて、實に／＼のたまふごとく、十郎殿と組んで首を取るか取らるか、只力業の勝負に於ては、誰にかは劣り候はんや、藍澤殿と角力こそ望なれとて、直垂を脱いで躍り出ける間、重治見てこらへず、腕の續かぬ程は命こそ涯なれ、海老名殿あはせ玉へといひながら、つと出んとしければ、秀貞押しとどめて、角力は只だ小人より取上たるこそ面白く候へ、先づ藍澤七郎殿と、瀧口四郎殿、年頃も相似たれば、出て始め候へ。海老名、行司仕らんとて合せければ、重實、家俊、たがひに腰せり合けるが、重實つひに負にけり。其時、舎兄六郎重光つと出で、家俊を突倒して入らんとするところを、經俊躍り出で、重光を片手に足らず投げける間、重光が舎兄重治、弟二人を投られ、やすからず思ひ、袴の紐解く間おそしと引切つて、奔り出で、近々より、拳をつよく握つて、瀧口が鬚のはづれを、したゝかに叩ける程に、經俊も左右の拳を握り、負じ劣らじと捻合ひければ、中々角力とは見えざりけり、其後、藍澤下手に入つて終に瀧口に勝ちてけり。此上はいか程負ても苦しからずとて、相手を嫌はず取ける程に、屈強の者ども續いて五番勝けるところに、八木下五郎、藍澤を始め續けざまに六番勝、本間五郎資俊、八木下を始めて九番打つて入らんとするところに、侯野五郎景久出で、本間を始め其名を呼ばるる力量の人つゞけて十番打ければ、出て取らんといふ人なし。景久いひけるは、早や角力は止みて候か、相手に嫌はなきぞ。誰にもおかせよ、我と思ふ人々は出られ候へやと、高聲に罵りける間、駿河の國の住人、高橋中六家成、小兵ながら、つと出て取付けければ、これを始めて若手の者進み、侯野に息をもつかせず、負れば出で、出れば入り、立替り入替り十人ばかり出れども、侯野は開ゆる大力の名人なれば、つづげざまに二十一人投たりける。其時、土肥次郎、扇を開き、景久をあふいで、あつばれ侯野殿は聞しよりも上手かな、實平十五年以前ならば、出で取るべきものをと、戲言ければ、景久聞て、御年のよられ候ても、何かは苦しく候べきぞ、御出候へ、一番取候はんといひける間、土肥は、とかくの返答にも及ばず、伊豆、相摸の人々、此の耻辱は、伊東三浦にこそ留まりたれど、驕きて誰か彼かといふにもあらず、河津三郎こそとつぶやきしかども、祐泰は智仁勇の徳ありとて、伊東よりは重んじ敬

鎌倉武士が盛んに角力をとつた實況が、目に見る如くであらう。古文學のうちで、角力の取口、即ち技術を書いたものとしては平安時代には、「腹抉り」のこと、今なら頭捻りであらう。次に前に掲げた綴太郎、和田小次郎の外掛け、内掛けと、續いて俣野が足をさしのばして河津のあしに纏ひつけた、後世所謂河津掛けの一手、此の三つの記事は、殊に注意すべきものだと思ふ。河津掛けといふと、河津が掛けたやうに聞えるが、實は河津に掛けたのである。河津掛は、斯道では足くせといひ、明治以來、谷の音が尤も得意で、此技は、谷の音と改稱されるだらうと思ふほどであつたが、依然として河津掛けと呼ばれてゐる。これは俣野五郎、平素、修練してゐた得意の一手であるか、此のやうな瞬間、咄嗟に働らきかけた一手で、窮餘の奇手といふべきものであるか。其邊のことは、曾我物語の記事だけでは決定するわけには往かぬ。しかし吊上げられた場合、かねて足業の無い者は、ヂタバタすることはあつても足癖には往き得ない。俣野が咄嗟に足癖を試みたのを見ると、第一の得意技でなくとも、俣野には、かねて足癖の業があつたことは推察せられる。猶ほ、此の取組は、我邦の遺恨、角力の古くて尤も有名なものであることを附記して、お

といひければ、河津打笑ひ、さればこそ最前も勝たる角力を論じ給へるほどに、此度は眞中に於て、然も片手投に仕たるが、未だ御負あらずや、實に木の根の無きにこそ、左は仰せつらめ、只今の勝負を、人々御覽候へつるかといひければ、列坐の面々、一度にとつと笑ひける。」

ひける間、諸人、心には思ひながら、出て取れといふ者なし。河津、此氣色を悟りて、土肥にささやきけるは、今日の御酒宴は興に乗じ、老若の附なく候へば、祐泰も出て一番取り候はんか、空しく歸るべきも、また無戯にや候ふべき、御指圖あれかしといひければ、實平聞て、今俣野が詞の笑止さにこそいふらん。若し此上に河津負れば、大なる耻辱なりとおもひければ、とかくの返答にも及ばず。只た赤面してぞ見えたりける。伊東これを聞て、神妙に申しけるかな。たとへ負ても耻ならぬぞ。出て俣野殿を御相手に死なれといはれければ、河津、かしこまり候とて、直垂を脱捨て、小袖一つの上を、手綱二重四重に廻はして強く締め、俣野殿の御手柄、申すも中々餘あり、河津が御相手に出ること、不足に候はんすれども、少しは仕り候べしとて出ければ、景久聞いて出向ひ、角力を取るに相手の名を呼ぶことやあるべき、されども相手に嫌は無し。只だ天が下に於いて、力のすぐれて強からん人は御出候へといふてぞ出たりける。河津近々と寄つて、俣野が力をはからんが爲に一押推しておもひけるは、兼て聞しには似ぬものかな。今日多くの人の負たるは、酒に酔たる故なるべし。されども此男は八ヶ國に名を呼ばれ、一年都に於て取りけれども、彼に勝たる者なしとて、角力無双の名を得たる者なれば、容易くは投がたしと思ひ、二三度もえひや／＼と押合ひけるが、河津なほも其手をはなさず、向へ強く押ければ、各々並居たる坐中へつと押入り、膝を突かせて入りにける。俣野は只も入らず。こゝなる木の根に跪いてこそ、不覺の負をしたるに、今一番取らんといひければ、兄の景親、奔り出で、傍を見まはし、實に是に木の根あり、俣野がまことの負に非ず、眞中にて尋常に勝負したまへ、河津殿といひければ伊東これを聞いて、いや／＼河津も膝が少しながれて見え候ぞ。只だ時の興なれば、互の遺恨もある可らず、今一番取つて負けよといはれる間、河津辭するには及ばずして出たりければ、俣野は手合もせずして、向さまにや當ん、横さまにやかけなんべきと、つと寄るところを、河津は前後、角力はこれが始なれば、何の手もなく、俣野が上帯、むづとつかんで前へひき寄せ、め手へまはして、目より高く差揚げれば、俣野、足をさし延ばし、河津が股に纏ひけるを、河津、事ともせず、一反して、なほ高々とさし揚げ、しばし保て、片手を放ち、眞中に進んで、横さまにぞ投たりければ、俣野早く起上り、角力の取やうこそ多きに、何ぞや御邊の片手業

い。

(二)

此外、鎌倉時代の角力に關する例話を擧げて見やう。大力無双と聞えたは、畠山次郎重忠で、理想的武士として人望並びなき人物、鶴越を攻め落すとき、馬が可愛いさうだといつて、體にしぱりつけて背負つて急坂を下つたのは、有名な話だが、その時、重忠廿一才であつた。東八ヶ國に並びなき大力、長居といふ力士が幕府に来て、當時、一人の敵手を發見せず、願はくは音に聞えた畠山殿と一勝負、御許しあらんことをと、願ひ出でたのを、頼朝、心憎しと思つた。武士の勇力を無視するものやうである。あはれ重忠、長居の鼻を打挫いでくれよかと思つた。此のやうな場合の角力、裸體ではなく、烏帽子までもかけてゐる。着物の上に帶なり袴の紐なりを固く結び、今の蒙古の角力に似てゐるやうに思ふ。さて長居が、犢鼻褌をかきて、ゆるぎ出たる有様、實にも金剛力士の現はれたるかと思つた。立合に、長居先づ畠山の小首を強く打つて、袴の前腰を取らうとすると、畠山、敵の左右の肩を確つかと抑へて寄せつけず。かくて時たてば、梶原景時、此儘、引分に致すべきかと、頼朝の意中を伺ふと、いかでか勝負をつけよと、頼朝の言の下より、畠山、力を籠めて長居を押据ゑたるに、めり／＼と音して、長居、尻居にどうと倒

されて、兩足を天に反らした。重忠は座に返りて何も言はず。長居は、介抱されて退いたが、肩骨砕けて、角力とすることはできなくなつた。畠山重忠の強力については、いろ／＼挿話がある。源家二代、頼家の時、梶原景時、誅せられ、その餘黨、角力の達人、豪勇の壯士と聞えた勝木七郎則宗を、殿中で生取らうとした。則宗、刀を抜いてあばれ、人々持て餘すとき、重忠、たまたま傍にあり、座をも立たずして、その儘、左の手を捧げて則宗の腕を握るに、則宗腕折れ心茫然としてたやすく捕はれた。

朝比奈三郎義秀は、當代の勇士で、後世、劇化された著名の人物、和田義盛の子で、和田の擧兵、戰敗れて、船を乗出して逃げた後の行衛分らず。あれほどの大勇、定めて海外異域を打捲つたであらうと想像され、後世、「朝比奈の島巡り」として、人口に膾炙してゐる。その朝比奈は、角力にも、水泳にも、ともに達人であつた。正治二年九月二日（紀元一八六〇）頼家將軍、小壺に遊覽、笠懸の競射の後、海上に酒宴を開き、朝比奈に水練の所望あり、朝比奈海底に沈み、しばらく見えす、人々、怪しみ思ふとき、朝比奈、御座船の側に浮び出づ、生きたる鮫三尾を手に提げてゐる。満場感動、頼家、乗用の名馬を朝比奈に賜ふ。朝比奈の兄常盛、羨ましくて堪へられず。水練は弟に及ばずとも、角力に至つては兄たる値あり、願はくは、此の名馬を兄弟の間にわかれ、角力一番、その上、改めて下されたと言上す。頼家、興に入り、諸人悉く舟を繋ぎ、

見物す。兄弟、裸體で立ち向ふ、雄々しき風情、大地を踏み轟かしてすまふに、勝負未だ決せず、満場喝采す。朝比奈、頻りに勝負を望むに、常盛、稍々雌伏の色あらはる。江間小四郎、感心の餘、中に割つて入り、引分にせんとする際、常盛、眞裸のまま、咄嗟にその名馬に打乗り、一鞭あてて遁走す。朝比奈大いに後悔地團太踏む。満場大笑拍手。實に角力史上の喜劇である。この馬は大江廣元の献上で奥州第一の名馬と稱せられ、常盛、日頃切に懇望すれども遂に下されなかつたものである。

後鳥羽天皇の御代に、伊豫國、大寺の島といふ所に、天竺冠者といひ、稀代の幻術者にして大力の名ある者があつた。其頃、都に加茂の神主能久、角力達人として聞えた。此の二人を召合はされたるに、能久、天竺冠者を取つて池の中へ投げ込んだ。此頃はまだ土俵とは無く庭上で取組んだのであつた。

仲恭天皇の承久三年六月十九日(紀元一八八一)、鎌倉の頼經將軍、六波羅に命を下して、錦織判官代を逮捕せしめたが、錦織は弓馬角力の達人、壯力人に越えたる勇士として知られた者である。

鎌倉時代の末期に、大剛の角力として天下に聞えたのは、もと武藏國の住人、畑六郎、左衛門時能、歳十六の時より角力を取りあるきて、關八州に無敵といはれた。腕の力瘤、隆々として、股

のむら肉厚く、音に聞えた薩摩の氏長もかくやありけんと思ふばかりであつた。その後、千山萬岳の信濃國に移住し、山水の間に漁獵を業として、馬に乗つて峻坂惡路を飛ばすこと、神變不思議の名手であつた。其後、新田義貞の勤皇軍に従つて大勇を現はし、建武中興の後、義貞に隨つて北陸に轉戦し、義貞の歿後には孤軍奮闘、その武威つねに賊方を壓したること、戰場にいつも愛犬を携へた風格とは太平記に詳述されてある。

以上、鎌倉時代、角力専門の力士無かつたのではないが、角力が武士必修の武術であつた爲め斯道の名士とその挿話とは概ね武士にかゝつてゐるのである。

(三)

鎌倉幕府の記録たる吾妻鏡によりて見ると、鶴岡八幡宮は源家の氏神であり、流鏑馬、競馬、角力の三つは、八幡宮祭典に於ける年中行事であつた。その時、源家の將軍、參拜し、これ等の年中行事は、將軍の御前に於て舉行された。祭典の他にも、八幡宮に於て、幕命を以て、時々、角力が行はれた。其外、將軍邸に於て、或は將軍が諸侯邸に御成りの時など、宴會の餘興として角力が行はれた。試みに、左に這般の事實を列舉して見る。

(一) 文治五年四月三日、鶴岡八幡宮の祭事に、將軍參拜し、流鏑馬、競馬、角力あり。次に

三崎社の祭を執行しまた流鎗馬、競馬、角力の催あり。

(二) 同年六月二十日、鶴岡八幡宮臨時祭に、流鎗馬、競馬、角力あること、例の如し。

(三) 同年九月十日、鶴岡八幡宮の末社、熱田社の祭に、流鎗馬、競馬、角力あり。

(四) 建久二年三月三日、鶴岡八幡宮の法會、次いで臨時祭執行、將軍(賴朝)參拜。流鎗馬、競馬、角力あり。

(五) 同三年八月十四日、鶴岡八幡宮、廻廊の外庭に於て放生會角力あり。その取組を見ると、武士以外の力士もまじつてゐるやうである。

一番 奈良 藤次 荒次郎

二番 鶴次郎 藤塚目

三番 犬武 五郎 白河黒法師

四番 佐賀良江六 廉仗 太郎

五番 所司 三郎 小熊 紀太

六番 鬼 童 荒瀬 五郎

七番 紀 六 王 鶴

八番 小中太 千手王

(六) 同六年三月十三日、鶴岡八幡宮臨時祭、將軍賴朝奉幣す流鎗馬、競馬、角力、例の如し。

(七) 同年九月九日、鶴岡神事、賴朝參拜、流鎗馬、競馬、角力あり。

(八) 正治二年九月二日、將軍賴朝、小壺海邊遊覽の序、小坂太郎の庭前に於て、朝比奈三郎兄弟の角力を觀る。

(九) 建永元年(紀元一八六六)六月廿一日、實朝將軍、邸内の南庭に於て武士の角力あり、勝者に扇、色華、砂金等の賞賜あり。敗者逐電すといへども、召返さる。

(十) 承元四年八月十六日(紀元一八七〇)、鶴岡八幡宮神事。將軍實朝夫妻及び(政子)二位尼、馬場の棧敷に於て、流鎗馬、競馬、角力を觀る。

(十一) 安貞二年二月十九日、(紀元一八八八)賴經將軍邸の南庭に於て、二十番の角力を召合す。

(十二) 同年八月十一日、賴經將軍の南殿に於て放生會について角力あり。

(十三) 嘉禎三年四月十九日(紀元一八九七)大倉の新御堂上棟の日、賴經將軍臨場し、歸途、足利義氏の邸に臨み、酒宴の間、駿河二郎泰村、壹岐守光村兄弟の角力を觀る。賴家將軍の時、朝比奈三郎兄弟の角力、勝負を決せざりし前例に倣ひ此の兄弟角力も引分となる。

(十四) 建長六年閏五月一日(紀元一九一四)執權北條時賴、下僚壯年の徒を率ゐて、將軍宗

尊親王の邸に伺候し、酒宴數刻、時頼進言するやう、近年武藝廢頽、尤も歎ずべし、弓馬の藝は追つて改むべきも、先づ今日は角力勝負を決し、感否の御沙汰あり度しと申上げ、將軍殊に機嫌麗はしく、六番許、取組あり。勝者は將軍の御前に召されて、御劍御衣等を賜はり、敗者には、上戸下戸を問はず、大器にて酒を賜はること三杯、即ち罰盃にして、御一門の諸太夫等自ら杓をして感興大に湧く。時にとつての壯觀であつた。

以上は、吾妻鏡の記事を抄録したものである。これに由つて見ると、鎌倉時代、武門武士の間に於て、角力が弓馬の道に準じて修練されたこと、及び將軍の上覽角力が年中行事になつたことが分る。

王朝時代の節會角力は廢絶に歸したが、武門の世となりて、節會角力に代はつて、上覽角力といふことが始まつたのである。上覽角力の嚆矢は源頼朝の文治五年（紀元一八四九）である。そして上覽角力の目的は、全く尙武の精神であつたことを、茲に特筆しなければならぬ。されば鎌倉時代に於ては、一方に力士もあつたけれども、角力は武士必修の科といふべく、あらゆる武士は固よりのこと、國持大名までも角力を取つたのである。

五 室町時代末期伏見桃山時代の力士と上覽角力

附、女力士

(一)

室町時代末期となりては、吾妻鏡の如き幕府の日記の徴すべきものなしといへども、此時代となりて、依然として上覽角力が續いて行はれたことと、職業力士らしきものが漸次増加して、次に來る江戸時代の勸進角力の前驅を爲したことが見られる。

室町時代に於ける力士に就いては太平記に、播磨國の住人妻鹿孫三郎長宗といふ者、十二歳の頃から角力を好み、諸國を巡るに、日本六十餘州の中に敵する者はなかつたと記してゐる。これは職業力士といつてもよいやうに思はれるが、妻鹿は唯だ一人行であつた。力士が數人、一つの組を作つて、諸國を巡つてあるいた者に就いては相撲史傳に引くところの「大友家記」の中に、「都より雷、稻妻、大嵐、辻風といふ角力取とも下向し、豊後府内に於て勸進角力を興行せしに、彼等四人に勝つ者無し」とある。これ等は、職業力士の巡業とも見られないことは無い。此の記

事と、武將威狀記に見えた「關白秀次の上覧角力」など對照すると、これ等の職業力士と、並びに力士名といふものが既に出てゐることが知られるのである。

武士の角力は、戦場の組討の爲め、練武の必修科目として、鎌倉時代以來、續いて行はれてゐるが、武將が角力を練習することは少なくなつた。賤ヶ嶽の七本槍などは、後には皆々出世して大名となつたけれども、その時は侍であつたのだ。尼子十勇士の隨一と唄はれた山中鹿之介幸盛は、偉丈夫にして、蓋世の剛勇と稱せられたが、十三四歳の頃より角力を好み、雲州一國に敵する者は無かつた。二十六歳までに、五十六度、槍を合せたと言ひ傳へるから、その間には、組討をしたこともあらうと思はれる。會津侯、蒲生飛騨守氏郷の家臣に、西村左馬之助といふは、大男の強力、角力の上手として知られた。氏郷と角力を二度とつて二度勝つた話が傳へられてゐる。なほ唐津侯、寺澤志摩守の家臣に、遠山六兵衛といふ近國までも聞えた強力な武士があつた。筑前から反橋といふ角力上手の力士がやつて來た。力も強く、手もよく取る。足輕水手などはいふに及ばず、若手の侍の中にも、此の一番も勝ちたる者なし。かくては筑前に歸つて、唐津には人も無いやうに言ふであらう唐津の名折である。是非に一番取られよと、所望された遠山立向ひ、反橋が潜ぐり入るところを、遠山、右の手を以て、反橋が下帯の三つ結を取つてさしのべて、二三べん振りまはして、引擧げて、えいと一聲、打ちつけると、踏みつぶされた蛙のやうになつて、

反橋は鼻血を出して氣絶した。蘇生したが、左の手が折れ骨くひちがひ、不具になつたといふ話。これで見れば、職業力士は強いが、それを赤ん坊を投げるやうに投げる超人的の強い武士が、極稀にあつたことが知られる。山中鹿之介や、此の遠山六兵衛などは、即ち其である。角力が上手なことが、戦場の組討に役立つことは、丹波の城主小野木縫殿助の家臣、井戸龜右衛門が角力の手で、敵將江見源三兵衛を斃した話がある。小野木と江見とは、連年の戦に、江見は次第につまつて、纔に孤城を守るばかり、小野木は、これを包圍して攻め、誰か江見の首を取つて來る者はなきかといふ。井戸龜右衛門、時に年十七。角力とつて丹波一國に敵なしと稱す、それに劍術も相當に出来る。自分、その大役に當らんことを請ひ、單身、夜にまぎれて城中に潜入し、江見の座敷の椽の下に伏して、機會を覘つてゐた。夜が、ほのくくと明けそむる頃、江見未だ鎧を着ず、小具足ばかりで椽に出でたところを、待ちに待つた井戸、折節あたりに人は無し、奔り出でて組みついた。江見、驚いたが、四つに引組んで、椽の上を、前後に一二返押合ふたその時、井戸、フツと角力の手を思ひ出し、投つけ、折重なつて首を取つた。後に井戸が言ふやう、生得剛強といふものは世に稀であらう。自分が江見と一二返押し合ふまでは、角力の手を忘れてゐたのは生得の剛強ではないと思はれると。

さて此の戦場の組討に用ひる角力の手といふもの、昔のやうに力の強い者が勝つと定まつてゐる

ては、組討術の發達といふものは無いわけだ。弱能く強を挫き、柔能く剛を制するの術が創生しなければならぬ。亂世の長かりし數百年間に、遂に組討の妙術が發見された。その事の研究は、主として柔道の歴史に屬することであるから、茲には省略することとして室町末期の角力はすでに柔術の或部分を含んでゐたことを特筆しておく。

(二)

平安時代に強力女の名聲、巴、板額、大井光遠の妹、近江の遊女かねの如き、一代の怪力と思はれるほどのものであるが、戦場の組討は別として、これ等の女が男を相手にして角力を取つたといふ話を聞かない。然るに、鎌倉を經、室町末となつて、素晴らしい女力士が現はれた。これなどは角道の空に突如として出現した一大慧星でなければならぬ。江戸時代になつて世に行はれた女角力とこれとは全く別の話である。

此の女力士のことは、文祿五年の刊本と傳ふる「義殘後覺」といふ書に出たとて、有名な嬉遊笑覽に載せてゐる。私どもは、未だ此の義殘後覺といふ書を実見してゐない。若し果して文祿年中の刊本であるならば、此話は、一層、研究の價値があると思ふ。いづれにしても素晴らしい話であるから、左に録す。京伏見繁昌した時代とあるから、秀吉の伏見城が築えた時代のことである。

る。

「京、伏見繁昌せしかば、諸國より名譽の角力ども到來しけるほどに、内野七本松にて勸進角力張行す。勸進元の取手に、立石、伏石、荒波、岩崎、反橋、藤齋、玉葛、黒雲、追風、筋金、貫木などを初として、都合三十人許ありけり。寄手には、五畿内さては諸國より集まり取れども、さすがに勸進角力を取るほどのものなれば、いづれも取勝けり。寄手の人々には、口惜しきかな、いかなる人もあらば、求めて取合はせたくこそ存ずれなど議してゐるところに、或日、立石關にて出る時、行司申しけるは、御芝居に角力は盡き申し候や、若し御望の方御座候はゞ、只今御出で候へ。左あらずば名乗申候と呼はりければ、出んといふ一人もなし。かゝるところに、鼠戸より暫らく角力を待ち玉へ、御望の方御座候と申す程に、行司、其儀ならば、早く御出候へと申ければ、出にけり。人々、何たるいかめしき男ならんと見るところに、年の頃二十ばかりなる比丘尼なり。行司、こは異なる人こそと申ければ、比丘尼申けるは、さん候、我は熊野邊の者にて候が、つねに若き殿原達の角力を取らせ玉ふを見及候ふによつて、人々取らせ玉ふが浦山さに參りて候(中略)立石申しけるは、かやうのへ弱なる者は、十人も二十人も一つまみ宛にすべきに、いかで某、おどけなくも取べきぞ、若き小角力の候はんには合せ玉へといひければ、比丘尼聞て、いや、取るほどならば、勸進元にて上角力を出し玉へ、左なくば取まじくと申す。見物の貴賤、これを聞て、誠に面白し、立石取れと、一同に所望しければ、力なく取にける。さて比丘尼は、帷子つちを脱いで出けるを見れば、鳥かゝるさんをぞ着たりける、行司、角力を合はする時、立石、大手をひろげて、やつと云つて構へければ、比丘尼つと入つて、仰けに突倒しける。芝居中、これを見て、呆れはててぞ褒めたりける。立石口惜しく思ひ、なめ過ぎて負けけると思へば、今度は小體に構へて掛るところに、比丘尼つと寄ければ、立石、弓手のかひなを取りて、三振りばかり振りければ、比丘尼は、後脇うしろを追とりて俯しさまにぞ投たりける。芝居中は、時の聲を作りて笑ひけるほどに、少時は鳴りも止まざりけり。それよりも伏石、貫木、荒波など出で取れども、後は次第に、比丘尼が投口は電光の如くに、如何に取るやらん、目にも見えず、手にも留めず取たりける。かくて角力は、此の比丘尼に關を取

られければ、芝居は則ち退散す。それより又た伏見にて勸進角力ありけるに、また此の比丘尼出て取ふせけり。醍醐、大阪などでも行て、世に勝れたる大角力といへば、ひろひけるほどに、世の人、これは唯ものに有まじと、恐れおののき、希代のことと沙汰したり。」

とある。此の恐るべき女角力の取口を、仔細に考ふるに、尋常、角力の手ではあるまじきやう思はれるところがある。此外に、室町時代に、女力士のことを聞かず。これが唯一の女力士である。しかも、それが比丘尼であるといふことが、支那の拳法の話にある尼僧のこととも思ひ合はされ、一層、神秘的な感を催うすのである。なほ此の勸進角力の光景、勸進元の取手どもは、一團となつて片屋の方に控へ、寄手は、それ／＼芝生の上に居る。寄手は、固より烏合の勢なり、申合はせて行くもあり、期せずして寄手に加はるもあり。芝生で見物してゐる群集の中から、雄心勃勃、我こそ一番と、着物を脱いで飛出す。此場の光景、今も田舎の宮角力で見られるのを思ひ浮べて、ひとり微笑する。但し、此頃は、所謂勸進角力で、取手、寄手と判然分れてゐる。近代の宮角力では、東西に力士がゐて唯飛入勝手といふまでである。

(三)

上覧角力は、室町時代から、その末期を通じて、織田信長、豊臣秀吉と續いて、ます／＼盛ん

になつたやうである。文學に現れたものを見ると、

(一) 大内義興の家老、陶光和の家臣に、若杉四郎三郎といふ角力の名手あり。中國には敵する者は無かつた。義興上洛の時、山名が童坊、某とて、此の若杉と相並んで、天下二人の角力の上手と評判された。將軍義植の上覧で、此の二人の取組あり。若杉、軽く勝つたが、童坊ひみきの人々、只今の勝負、紛らはしきところありと、物言ひをつけたるに、若杉大いに憤り、こんどは目より高くさし上げ、えいやつと言つて投げつけ、童坊は黒血を吐いて死んだ。此事は陰徳太平記に見えてゐる。陰徳太平記は、室町末期に於ける中國の歴史を書いたものである。

(二) 「信長記」によつて見れば、信長は頗る角力好きであつた。それに見えたる第一回の上覧角力は、信長、元龜元年二月廿五日(紀元二二三〇) 岐阜を出發して、翌日、江州、常樂寺に着き、暫く滞在中、角力を見た。「御游の興を催されんとて、暫らく爰に御逗留あつて、國中の角力取どもを召集め、角力をぞ始められける。皆勝れたる上手にてはあり、今日を晴と取るほどに、鴨の入頸、水車、そり、捻り、なげなどいふ手を、われ劣らじと取しかば、何の道にてもすぐれ居れば、奇異にこそ覺ゆれとて、興せさせ玉ふ」

かくて勝角力には、それ／＼賞賜あり。此時、宮居眼左衛門といふ者、第一人たれば、祕藏の重籐弓を賜はり、其弦を圓淨寺源七に、矢を百濟寺大鹿に賜はりしともいひ傳へ、これが後世、

弓取式の起源になつたと稱してゐる。

其次、天正六年二月廿九日と、同年八月十五日、及び八年六月廿四日と、信長は屢々角力を集めて取らせ、殊に八月十五日、安土に於ける上覧角力は、前代未聞の大掛りのもので、近江一國、京都の角力取を始として、千五百人呼び集め、安土城中に於て、辰刻(午前八時頃)から酉刻(午後六時頃)まで終日、取らせて見たといふのであるから、その壯觀は想像するに餘あるものがある。當日、五番打、三番打とあるは、五人抜、三人抜のことであらう。

頼朝以來、上覧角力は武將の特權でもあり、殊に角力好きの人もあつたやうだが、斯道を鼓舞作興したことに於ては、恐らくは信長を推して第一とすべきであらう。信長の趣意、練武に志あることは疑なけれども、頼朝が見るのと、信長が見るのとは、決して同じではなく、頼朝は武士必修の練武の一科として見たるに、信長は、練武趣味の娛樂として見てゐた。頼朝の上覧角力は、武士に取らせ、信長は角力取りに取らせてゐる。本邦の角力がこの時代を旋轉期として、變遷してゐる事實が茲に現れてゐるのである。

(三) 秀吉もまた角力好きであつた。伊豫の徳猪之亟といふ天下無双の大力、十四五の頃から角力を取つて四國の中に並ぶ者なしといふ力士と、毛利輝元の家臣に、入江大藏之亟といひ、これもまた「日本一の大力」と唄はれた勇士、徳猪之亟は六尺七寸、入江は六尺八寸。此の二人を、秀

吉、聚樂の邸に召出して、角力を取らせた。行司が構へてゐる。「兩人一禮して、力足を踏んだる氣色は、つくりつけたる仁王に、ちつとも違はざりけり」と記してある。誠に當代の活金剛であつたらう。然るに、秀吉、此の二人に、それ〴〵力を出させ、力競べばかりにして、角力の勝負を見なかつた。諸大名一同、秀吉の心持を感心したと傳へてゐる。此話は義殘後覺にあるといつて、蜀山人の「一話一言」に載せてゐる。

(四) 次は關白、豊臣秀次の上覧角力。秀次が關白になつたのは、天正十九年で、その自殺は文祿四年で、前後五年間のことであり、此の上覧角力は、年月明らかならず、其間のことと見るべきであらう。秀次は、死んだ時が廿八だから、若い關白で元氣であつた。此の上覧角力は、夜角力であつた。「武將感狀記」の記事は、この時代に於ける角力の發達を見るべき絶妙の資料たるのみならず、角力道に、取口を記述した最初の記録といふべきものであり、遠く現代の角力記事の淵源を爲すものであるから、長文に渉るけれども、左に紹介することとする。なほ又此の記事はこれを現代文に譯述するよりも、これを原文で讀む方、頗る感興の潑刺たるものがある。讀者請ふ、看過すること莫かれ。

「關白豊臣秀次公、角力見物すべき間、その用意いたすべき由のたまひければ、相撲奉行丹後守を召して申付られ、諸方を觸れけるほどに、洛中、洛外、淀、鳥羽、桂、嵯峨、鞍馬、白河、山科、醍醐邊より我も〴〵と集りける。秀次公の取

手ども百人ばかり出て、東のかたやに控ゆれば、西には寄の角力、二三百人並び居たり。すでに日暮れて、月、山の端に出れば、秀次公の御前の幕をしぼりあげ、蠟燭あまた立てさせ、大名、小名、右の方に伺候せらる。とかくと時刻うつりて後ち、角力すでに始りぬ、關白殿の角力ども、いづれ名を得し取手なり。寄角力も、世のつねならぬ者どもなれば、三十番も過ぎけれども、取分にてぞ見えたりける。爰に關白殿の角力の中に立石、伏石、關がね、井關、岩根などいふ上手どもも一番、二番つづつて入りにけり。中にも岩根は防なるが、よき相手がなと思へる體にて立出たり行司、誰にても望の方あらば出玉へと、ふれけるに、こゝに西國の住人に、「突春」といふ角力あり、かくれなき上手なれども、然るべき相手なき故、宵より一番も取らざりしを、かたはらの者ども出て、關を取れとぞ勧めける。行司聞て、急ぎ出でられさふらへ、遅參は御前への恐あらんと言ひければ、畏り候とて立出でけり。此は僅に四尺ばかりなれども、脇の大きさは、六尺ばかりもあらんと見ゆ、左右の腕は、つねの人の太腕にまさりたり。年廿四五にて、つら大きく、眼すさまじかりけるが、白布を三重に巻いて強く締めたり。岩根之介は、たけ六尺ゆたかにして、骨太く肉厚く、仁王をつくり損ぜしがごとくなり。茜の下帯、二重にまはして引しめたり。秀次公、いそぎ合せよとのたまへば、行司やがて取らせける。一方は丈高く、一方はひくかりければ、そこばくにちがひて見ゆ。岩根おもひけるは、彼は下手の角力なれば、うちに入れじと立廻るにや、つき春は下手に入て、そりてうんとあひしらふ。互に劣らぬ上手なれば、くんづ離れつ、もつれつ、手を碎き、半時ばかりねぢ合ける。いかゞしけん突春つと入て、岩根を場中にて反たりける。秀次公御覽じて、扱も取つたり、心のききたる角力かなと感じ玉へば、御前伺候の面々も、あつと感じあはれける。暫らく双方、いきをつぎて、また合はするに、こんどは岩根之介、つき春を懸投か、おひ投か、二つのうちを取べしと立まはれば、突春は、丈なければ反を望んで外づしける。暫くあつて、岩根之介、突春がそくびを引よせて、かけ投にせんとしけるを、突春、岩根が馬ばかりの股をとつて、曳と押しあげ、つと入つて、一間ばかりかたやに押込み、とどまるどころを引かつぎ、反りにけり

如何にもおもしろい角力記ではないか。丈高く逞まじき岩根と、低くて白のやうな突春との取組、

目に見るやうな。作者も中々、角力の心得があると思える。

(四)

この時代の角力、武門武士の武戯たることを失はぬが、鎌倉時代より時を経て吉野時代、應仁の亂、それより元龜天正となる間に、我邦の戦術は、大いに變遷發達して、鎌倉時代のやうに、戦場に名だたる者の、名乗りかけての一騎打の風は無くなり、武將は、その勇氣、智略、人徳等を第一とし、簡人的の勇力を重しとせぬやうになり、鎌倉のやうに、國持大名に至るまで、上覧角力に出るやうな風潮は無くなつて、角力は武士では嗜みとなり別に角力を専門とする力士の輩出を見るに至つた。

劍客が武者修行をするやうに、力士が角力修行といふことが始まつた。諸國を巡ぐつて、角力を取つてあるく力士は即ちそれである。武者修行は、維新前まで、すつと江戸時代を通じて行はれたが、角力修行は、この時代だけで終りを告げたのである。角力修行は、一人の場合もあり、數人團體の場合もありて、角力修行は修行にもなれば、生活にもなつたやうである。これに就いて好適の一例を擧げて見よう。

土佐の長曾我部元親は、角力好きで、毎年國分、十七夜の會などに、近郷の角力取りを集めて、

取らせて見物した。土佐の夜角力といふは、此頃から明治まで續いてゐる。土佐人は一般に角力好きで青年は此の夜角力で鍛え上げるのである。それはさておき、

當時、泉州小島に、源藏とて、「天下一の角力取といはれた強者がゐた。諸國を角力修行してゐるに、敵する者無しといはれたが、元親角力好きと聞いて、土佐に下向し、先づ前濱に宿を取る。元親召し出して見るに、源藏の體格、六尺二三寸もあらう。普通の袴では足も入らぬといふほどの凄さ。二十八九許といふが、荒れて四十許にも見ゆ。其日は、御馳走を頂戴して引下がる。君臣ともに、聞きしにまさると驚嘆す。元親、これまで見かけて遙々來た者を、相手が無いからと、ただ返しては土佐一國の耻であると、角力評定を開いて相談するが、取らうといふ者が無い。久萬兵庫が一人進み出て、取つて見たしと申す。何として取るかと問へば、兵庫答へて、あのやうな大力の角力は、力を頼みにして、細かに手を取らぬものであるから、大手をひろげ廻はるところを、つまどりをして見ませう、首尾能く取り得るときは、決して負けまじくと申す。果して、元親始め家中一統、總見物の大角力に於て、久萬兵庫、見事に、源藏を投げた。満場どつと喊聲。元親、喜び斜ならず、先づ當座の褒美として、兵庫に持長刀を賜はり、源藏には帷子五、鳥目拾貫とらせて歸した。源藏、始め元親に見參の時、卷櫓二、ひふぐ百本を献上してゐる。それに對しての元親の挨拶でもあるが、「日本一」といはれるやうな角力になれば、その武者修行も

堂々たる態度であることが知られる。

その翌日、御悅として侍一同出仕す。その時、元親、兵庫を召出し、此度の手柄、比類なき高名也、角力といふものは、邪狂事のやうなれども、勝負を決する上は、これまた武邊に異ならず。日本一といはれた源藏に打勝つた兵庫の角力は、日本一といふべしと莫大な加増にあづかり兵庫は大いに面目を施した。

六 寛政の上覽角力

(一)

武家の上覽角力は、源頼朝の時に淵源し、爾來、室町時代を経て、連綿として江戸時代に及んでゐることは、すでに敘述した通りであるが、將軍の上覽角力といへば、(寛政三年、六月十一日、「紀元二四五」)、江戸、吹上苑中に於て、十一代將軍家齊の上覽角力)を指すほどになつてゐる。それほど、寛政の上覽は古今に有名であり、また近世、角力道勃興の契機になつてゐるから、此處に其の大體を記すことにする。

寛政年度の頃は、江戸幕府全盛、百度興隆、文化各方面悉く向上發展の時であり、角力道も亦此の機運の浪に乗つて、未曾有の繁榮を來たし、谷風、小野川、雷電等の大力士、一時に輩出した。上覽角力は、此際、斯道鼓舞獎勵の爲で、またこれ等の稀世の大力士、殊に谷風、小野川、兩雄取組の壯觀を鑑賞せんが爲であることは、角力上覽記に記した通りである。而して此の上覽角力以來、角力道の氣勢大いに揚がり、社會人心も亦頓に斯道に注目するに至りて、斯道勃興の

端が茲に啓かれたのである。抑、數百年來、上覽角力ありと雖この時の上覽角力ほど大規模のものはなく、江戸角力の全部を展列し、世間所謂角通といへども、朝から晩まで見通すものではないのに、寛政の將軍は終日、徹底的に見たので、いはゞ江戸角力の本場所を取寄せて、しかもこれを出來得る限りの、内容と形式とを整へて、最大の豪華版にして上覽したものであるから、見る者も、角力ふ者も、ともに斯道の陶醉境に入つたわけである。此のやうな上覽角力は、當時、空前のものだつたので、その評判が一代を震動せずにはゐなかつたのである。

谷風、小野川が角力道の大英雄となり了うせたのも、此の未曾有の豪華版の土俵に於ける大立者であつたからである。

(二)

寛政の上覽角力の始末を略述しよう。

先づ此の年四月、本所、回向院に於て、大角力興行中、同月廿三日、

「町奉行池田筑後守、勸進元鍛山喜平治及び差添、伊勢ノ海村右衛門の兩人を呼出し、近々、將軍の上覽あるべきに由り、角力を散らすまじき旨、内意に達し、土俵繪圖及び力士名簿二枚宛、翌廿四日、筑後守役宅に持參せしめ、土俵並に四本柱、引幕等、伊勢ノ海に請負を命ず。同廿六

日、筑後守役宅に於て、右兩人に對し、上覽角力決定の旨申渡し、兩人より御請を申上る。五月二日、實地場所見分致し、角力惣人別書を提出す。尙ほ上覽につき、力士取締を年寄一同に嚴達す。同五日、またく、鍛山、伊勢海兩人、筑後守役宅に召出され、來る六月十一日、上覽角力の旨を達せられ、節會角力の祭事相勤めし相撲司、吉田追風の末流、熊本の吉田善右衛門を召出されて行司相勤めしめ、上覽角力は勸進角力とは、格式も違ふことを申渡さる。六月十一日の當日に至り、曉六ツ時（午前六時）竹橋門外、御春屋にて、惣年寄、行司、力士等、残らず染帷子、上下、帶刀にて相揃ひ場所休息所溜に入り差控へてゐる。

さて上覽土俵は、四本柱の間、三間四方、柱より柱までのうち土俵七俵づつ、合はせて總數二十八俵は、天の廿八宿に象る。内丸土俵數十五。東西の入口は陰陽和順に象どり、外の角を儒道とし、内の丸を佛道とし、中の幣束を神道として、土俵に神儒佛の三道をあらはす。中央に幣束を七本立て、神酒、熨斗、供物を三方の上に飾り、おき先づ吉田追風出て、天長地久風雨順時の祭事を勤む。土俵の原理は易にかたどつて中々むつかしいもので此時の説明によれば、

「すべて土俵四本柱は易にかたどる、土俵のうちを太極と定め、左右の入口を陰陽にかたどり、四本柱は四時五常に象どる。中央の土を加へ、木火土金水、または仁義禮智信の五常にかたどるなり。水引は、黒赤黄三色の絹を以て、北の柱より巻はじめ、北の柱へ巻納むるは、出る人と入る人とを清むるの心なり。北を極陰といふ。勸進角力にては、これを役柱

と名づく。俵を以て形をなすは、五穀成就の祭事なり。

とある。そして此回の上覽角力は、勸進角力とは格式は違ふけれども易の一理に於ては違ふことあるまじくと特筆してある。

さて右、祭事終つて、土俵の上に飾りおきたる品々を、行司四人、東西より出で、持ち出づる後、行司先に立ち、角力二十人づつ、だん／＼に出で、禮儀を正し、土俵の上に平伏する。残らず揃ひし時、行司、相圖をなす。その時、一統土俵入すみてまた平伏し、然して一人づつ溜り入る。かくの如くして、東西の角力、六度に禮式すむ東西の關取、横綱を帯びて土俵入をする。それより名乗言上ありて、行司、東西より一人づつ出で、また角力引合せの行司一人、土俵の内に入つて、次に東西より角力人出でて平伏す。言上の行事、土俵へ出で、東の方誰れ、西の方誰れと、高聲に呼あげて入る。そのうち白張着たる者、水と紙とをやる角力人、土俵真中にて立合ふ行司、聲をかけて中に立ち、古法の如く、待つたなしに取組み、行司、勝角力誰と言上す。尤も行司はかはる／＼に出るなり。いづれも侍烏帽子素袍を着用す。合はせ行事は、素袍の肩を絞りに出づる。また四本柱の下に、行司四人平伏して控へ居る。されば勝負依怙無く見分ることをつかさどる。右代る／＼行司十四人にて相勤む。

年寄三十六人、染帷子麻上下着用にて、土俵場へ代り／＼に相詰め、行司十四人、素袍にて侍

鳴	○清		○荒	○利	櫻	○千	龍	森	若	尾	桂		東
見	川	行司	灘	根	野	年	ケ	ケ		上	山	行司	
川	川	木	ダヒ	川	オヤ	川	崎	崎	松	松	山	式	
ダヨ	キチ	村	ネ	ソフ	トグ	ナコ	キチ	ナコ	オマ	コフ	コワ	守	
シリ	リン	庄	シリ	ミコ	シラ	ゲン	リシ	グシ	ト	シ	タ	見	
○鳴	角	太	角	今	○安	荒	○金	○岩	○與	○錦	○吉	藏	西
澤	田	郎	ノ	出	宅	見	ケ	ケ	佐	野	野		
	川		森	川	山	崎	碓	崎	海	山			

○荒	○咲	○熊	○時	雲		○鳴	初	○入	○和	○紫	○鷹	○都	○由
澤	川	川	津	林	行司	戸	瀬	間	田	ノ	ノ	山	良
ツ	ダナ	オヒ	風	カ	岩	カウ	島	野	崎	森	川	山	戸
キ	シゲ	ト	ハ	ツ	井	カチ	キチ	ソウ	ダ	ハ	ダ	キフ	ナシ
テ	シゲ	シキ	ネ	グ	喜	ケチ	リシ	リキ	シ	ネ	シキ	リミ	タ
綾	濱	杜	黒	○淀	七	和	○御	片	牛	○華	上	朝	堅
		戸	雲	渡		歌	所	男	間	ノ	總	日	川
川	風	崎	雲	渡		潮	島	浪	ケ	山	野	野	

○岩 根 コワタ 嚴 島
 ○奈 良 山 オホトシキ 伊 勢 濱
 ○浪 分 キヲ 柳 川
 ○曙 キヲ 江 刺 川
 ○摩 羽 ヒネリ 金 ヶ 崎
 ○名 取 川 ヒネリ 紅 葉 山
 ○讚 岐 川 キヲ 三 百 崎
 ○湊 川 ダハシネ 須 磨 崎
 ○鶴 濱 ツメ 増 水 川

行司 木村庄太郎

○加 茂 川 スカカシタ 荒 鷲
 ○飛 鳥 川 ナカヲ 八 雲 山
 ○神 樂 岡 ナウハ 亂 獅 子
 ○住 江 カウ 外 海

袖 ヶ 浦 キナ 高 尾 山
 ○桐 ヶ 崎 カブツケリ 廣 田 川
 ○更 科 越 浪
 ○和 田 海 崎 秋 田 川
 ○和 田 崎 ヒカホリナ 牛 間 ヶ 關

行司 式守秀五郎

○琴 浦 ヲハシキリネ 室 ヶ 關
 ○通 矢 ヲツトシキ 三 浦 潟
 ○宮 川 ツメ 鬼 ヶ 岳
 ○黃 金 山 ナヨツグテ 山 分
 ○梅 尾 ヲヒトシキ 荒 沙
 ○甲 斐 ヶ 關 モチダシ 富 田 川
 ○島 ヶ 崎 キヲ 不 破 關

龍 ヶ 鼻 マカハシナ 香 取 山
 漣 ツメ 荒 海

行司 式守秀五郎

常 磐 川 ダナ 綠 川
 ○千 渡 ヶ 濱 ダナ 雪 浦
 ○諏 訪 森 キヲ 袖 浦
 ○楠 キヲ 荒 馬
 ○杉 尾 ツメ 阿 蘇 森
 ○關 川 キヲ 荒 瀧
 ○玉 井 シナキヲ 荒 熊

行司 式守伊之助

○伊 吹 山 ヒカホリナ 鷲 ヶ 嶽
 ○鈴 鹿 山 ナウワ 岩 ヶ 關

○伊 勢 濱 ツナ 獅 子 ヶ 洞
 ○箕 島 マカハシナ 眞 鶴
 ○出 水 川 ナカケワダシ 戸 田 川
 ○友 千 鳥 オツトシキ 關 戸

行司 木村庄之助

○梶 ヶ 濱 ツメ 出 羽 海
 ○雷 電 ツリキ 錦 木
 ○鷲 ヶ 濱 ナリツナワツ 宮 城 野

中 入 後

(中入の間、角力人
に赤飯を下さる)

行司 式守見藏

○綠 山 ナシタ 荒 瀬 川
 八 汐 島 ツメ 越 柳

行司 岩井喜七

虎 渡ハネ象ケ鼻

○岩ケ洞キヲリシ立浪

○温海岳ハネ○神撫山

○松島ヨフシ秀ノ山

浪の音キヲリシ瀧ノ音

鬼 勝ヲシキリケ○蘆 渡

名草山ハネ○越ノ戸

○和田原キヲリシ増見山

岩井川ヒヨネツリ○達ケ關

行司 木村庄之助

九紋龍ツヨツメ○柏 戸

○陣 幕ヅノマ雷 電

行司 式守伊之助

○浪 渡マカハシナ熊ケ岳

○岩ケ根カワタケシ殿 島

稻 川キヲリシ○鳴 瀧

行司 吉田追風

小野川キガチ○谷 風

弓弦、扇子、三役、古法の通り、勝方に相渡す、

角力、九ツ時(正午)始まり、七ツ時(午後四時)頃滞りなく終了。

さて此の上覧角力、これ程の數多の取組、こればかりの時間で終了したるは、行司の制度たる、

行司、双方の氣合を察し、颯と軍配を引けば、その途端に角力は始まる。谷風、小野川の角力に

見るやうに、追風、まだ軍配を引かぬうちに、小野川がはやつてとりかけると、追風、まだと
と制止する。追風、軍配を引いた途端、谷風競ひかゝるに、小野川タヂ／＼となつて負けと宣告
さる。行司、軍配を引いた瞬間、双方待ツタ無し、これでこそ驚くべき多數の取組も短時間に終
了したのであつた。

(四)

寛政上覧角力の勝負の記事は、幕府の編修官、成島峰雄が、當日、棧敷で陪覽して、詳細に記
録したものがあつた。一々行司の説明を聽いて執筆したもので、我邦の觀角記のうち、角力の手を
一々詳かに書入れた最初のものとして記念すべきものである。

すまゐる御覽の記

寛政三年六月十一日、吹上に於て角力御覽のことあり。かねて同じつらなる者ども、おほやけごといとまに見侍るべ
きよし、御ゆるし蒙りて、朝の程より御もの見の方にまゐりつどふ。そも久方の雲井の庭にして、年毎に角力の節會
行はれしも、保安に中絶え、保元に再び興されしが、その後は、また絶えて聞えず、たけく勇める武士の上にたよりあれ
ばにや、鎌倉右大將殿の頃もつばら、司位あるもなきも、高き賤しきわいたためなく、力をたくらべ、明暮の戲草とせし
より、室町家の時なども、御覽のことありしとぞ。しかはあれど、星移り物換りて、ことり使ひなどいふことも聞えず、
葵、夕顔のかざしも絶えしより、今様は四本の柱、土俵などいへるものさへいできたり、その初、最手といへるも、今は

に仕ふ。此度、御覽の式つとむべきよしおほせごと下り、面目限無きものならし。追風こと終りて後に設けたる筈につく。これは交名に勝負のつましるしせん爲とぞ。年寄といひて、此道に年久しき翁ども、淺黄の上下着て、七八人宛隨ひゐたり。いける世のかひつくりたるもことわりとぞ見えし。さて東の方より行司みちびきに從ひ、若く勇める角力ども廿一人、四本の柱の中に入り、ひし／＼とうづくまり拜し、立上り、力足どどと踏みすえて返り入る。西の方よりも同じ定めにして返り入りぬれば、東より又かはりて出づ。西も亦然り。三たびにあまる時は十人づつ出づ。これを土俵入といふ。いづれもの錦纏のたうさきかきたり。東の大關小野川、たうさきの上に横綱といふものかけたなり。これはあるが中にもすぐれたる者の許さるゝとぞ。弟子の角力二人前後にひきつれてねり出づ。まづ埒のもとにて拜し、土俵の内に入りたるさま、さき／＼いかめしう見えつものにも遙にうち越えしなり。黒きおももむづかしげに、すさまじき毛生えたるが、さすがにおそみながら、此道にしては我はとおもひ上がりたるさましたり。土俵をはりて退く。立かはり西の大關谷風といへるは、これも横綱をかけ、達ヶ關、秀の山といへる大に逞ましき者どもを二人したがへ出て、おなじことふるまふさま、山も動き出たらんやうにて、腰のかこみなどは、げに牛をも隠くしつべき樹がらほどのさましたり。まなじり細う引て鬚に入る。おももちにこやかにつつしみいやまひたる、聊か驕慢の氣無、めやすく入りぬ。さて残れる七十四人の角力どもは、やがて立合ふべき用意に、土俵入つかまつらんとぞ。しばしありて、名のりあげに行司二人、水桶のほとりにあり。これが外に行司一人、土俵のうちにあり。四方柱の下に引わけしきおきつるむしろの上ごとに一人づつあり。すべて行司七人にこそ。かくて角力始まりぬれば、左右より行司進みよりて、東の方や桂山と呼び、西の方や吉野山と高らかに呼ぶ。此の角力二人、埒のうちを通りて、水桶の下により、水たうべ土俵に入り、各々つまとりより合たれば、行司、團扇を入れ、聲をかくるとひとしく、吉野山四ツ手に組み、桂山が下の手にて廻しをつかみ、投ぐべきと引寄するを、内のかたより足をかけ、身を敵の方へ押しかけしかば、桂山仰けに倒れ伏す。吉野山のかたへ團扇をかざし、勝角力吉野山と高らかに呼ぶ。わたし込みといへる手なるよし。東の方より尾上松、西の方より錦野をめし合はず。尾上松、錦野を腹

大關と名をかへ、すけ手は關脇と唱へ、小結と稱するを合せて三の役とし、それより前頭、幕の内、幕下、三段、四段、五段、本中、相中、前角力と、その品を分ち、たうさきはまはしと呼び、角力の長は行司といひ、弓、ゆつる、あぶきの三種を四本の柱に結ひつくる。皆ありふる定めとなれり。その名どもは、見聞くままにしるし付たるなるべし。けふなん空くものなく、常磐の松が枝見渡し遠くしけりたるに、ひらばり遙々と打ちわたり、その前に四本の柱を構へ、その柱を紅と、紫とのきぬにて包み、元をば紅の氈にて包みそへ、柱の上つかたには、はなだのまんを四方に引きめぐらしたり土俵の中央には青幣アヲヒしらにきて七ツ、神酒瓶子二ツ、ほし櫃、ほし栗、のしこんぶをそへ、あはせて三種を敷き、二ツものにもりて、そなたに蘭のむしろ四ひら敷きたり。御三卿のかた／＼執柄の人々よりして、萬づの司の布衣以上なるも以下なるも、御前許りたるかぎりは、皆棧敷賜はり、御傍近く侍らふかぎりは、幼き者までも引つれ、聊かの隙ありとも見えず、巳の時すぐる頃にやあらんならせ給ふ。めし合せの名など奉り、しばしありて白張着たる男二人出で、左右の水桶のほとりにいやまひたり。東の帳の屋より追風と名のれる吉田善左衛門、團扇を執り、さて行司木村庄之助吉田幸吉外人を召具して、埒のうちを通りて來れり。皆烏帽子素袍をきたり。追風、土俵のうちに入り、むしろに着きにき。天にむかひ柏手うちならし、祈禱し、方屋祭終りて、幣を執り、二人の行司に授けて、庄之助、幸吉、左右より進み、瓶子を取り、神酒を四本の柱の根にそぎつつ退く。やがてむしろを白張きたる男左右よりとりて、四本の柱のもとに同じつらにたてさまに一ひらづつ引分く。追風うづくまり居て、袖かきあはせ、方屋開きといふことを唱ふ。其言に曰く、「天地開けはじまりてより陰陽わかり、きよく明らかなるものは陽にして上にあり、これを勝と名く。おもくにござるものは陰にして下にあり、これを負と名づけ、勝負の道理は天地自然の理にして、これを爲すものは人なり。清くいさぎよき處に柱を構へ、五穀成就のまつりのわざなれば、俵を以て關所を構へ、そのうちにて勝負を決する家なれば、今はじめて方屋と名づくるなり」と、聊か臆したるさまにもあらず、聲おかしく聞ゆ。彼は野見宿禰が裔にして、古の志賀清林といへる高名の角力の流をつぎ、遠つおや吉田豊後守家次、内裏より追風といふ名を賜はり、世々角力の有職たるよし、いま細川家

へり。東の咲の川、濱風と四ツ手に組みぬ。濱風、上手にて廻しを取んと引寄せを、却りて咲の川、足をかけ身をおしかけて打倒す。その様いとゆゝし。投げ渡しといへる手なり。綾川、東の荒澤が左右の手をふとらへて、前へ引倒さんとせしが、かへり行違ひ、向へ手をつき負となる。これは我が里近く生立ちし角力なれば本意なき心地す。龍が鼻と西の香取山、互に二の腕を取合ひ、頭を肩につけ押し合ひたるが、龍の鼻の強く押しけるかたの身をはづし、腕を取り前へ引倒し、香取山かひなまはしの勝と定む。漣波を西の荒海、土俵のかぎり押しつめ、いささかも働らかせずして、我體を固め守りたれば、詰めとも押詰めともいふ勝なり。實にさざ波は荒海に番ふべき名のりかな。行司式守秀五郎かはりて、常磐川に西の緑川、ひしくと取つめ、土俵の外へ押出す。東の千渡が濱立かはり、雪の浦を同じさまに押し出せり、かうやうの手は、いさゝか目とまるためらひもなし。東の諏訪の森に袖の浦、ふみきり負したり。東の楠、押切りて荒馬に勝つ。東の杉の尾、阿蘇の森を土俵のもとまでおしつめて勝ぬ。東の關野川に荒瀧、ふみきりの負しつ。東の玉の井、荒熊とつがへり。此の荒熊は色くろく、大の男のおほちからなるが、己が名にあひてやかまへけん。ひた黒の廻しに白がしねて熊の月の輪をつけたり。いかめしくきら／＼と見えしが、玉の井さし寄て、四ツ手に組み投んとせしに、猶ほ足の残りけるを、そのまゝ突出しぬ。投残しきりの勝となれり。さしもゆゝしく出たちしが、いかに本意なからんと覺ゆめり。式守伊之助行司す。これよりは上の品なり。東の伊吹山、鷲が岳、いづれも劣らぬ大力なるが、鷲が岳片手をさし、おし来るを、其さしたる二の腕をきと取へて、身をひねりながら、はたと投倒せり。かひなひねりといふ手なり。東の鈴鹿山、岩が關の四ツ手組まん／＼と働くを、下手にて其腕をとめ、上の手にて廻しの結目を取り、腰へ釣つけ、身をひねりながら打倒す。上手投といへるよし。東の伊勢の濱、獅子が洞をおしつめ、簀嶋は西の眞鶴にかひな廻しに投げらる。東の出水川、四ツ手に組み、戸田川が下の手にて廻しを取り、投んと引よするところを、足をかけむかひへおしかけ、土俵の外へおし出す。かけわたしといへり。東の友千鳥は關の戸が片手さして押すところを、上の手して關の戸が脇を押し、やゝ久しく押し合ひて、いづれ勝負つくべうも見えざりしも、友千鳥、身を開くと見えしが、關の戸たまらず突出さる。行司

の上に抱きて押出さんとせしが、かへりて己が足土俵を踏出しければ踏越しの負とす。續きて若松の脇腹に、西の與謝の海、右の手をさし入れんとするを、若松はきとこらへたれば、與謝の海、身をひねりさまに捲落して勝ちぬ。西の岩が崎は、森が崎と四ツ手に組み、上下の手にて森が崎の禰を取り、腰へつり上げ、身をひねりながら腰投に投ぐ。龍が瀧つまとりしてかゝらんとするを、西の金碓、かたきの足を踏みとめ、させず。ひた押しに押し出し、此手を押切りといへり。東の千年川、荒見崎を、これも腰投に投出しぬ。櫻野を西なる安宅山、四ツ手に組み、まわしを取り、引上げて土俵の外へ擡出しに釣出す。東の利根川と今出川、立合ぬるが、今出川踏越しの足まけしつ。東の荒灘、角の森が二の腕をかいつかみ、左の方へひねり倒す。角の森ふみ留らんとするを、その儘に押出せしかば、ひねり出しの勝と定む。行司木村庄太郎立かはれり。東の清川に隅田川をつがふ。清川押し切りて勝。鳴見川を西の鳴澤、四ツ手に組み、上の手もて、かたきの横まはしを取り、片足をあとの方へ開きながら投倒す。だし投の手といへり。東の由良の戸、立川を四ツ手に組み、下の手にかたきのまわしを取り、腰へ引寄せ、上の手にて二の腕を取り、身を捻りながらどうとたふす。つゞきて東の都山に朝日野つがひしが、ふみきりとて、かたきより押しかけられ踏とどまりしが、身の固めまだしきを隙間なく突かれて土俵より足を踏出す。東の鷹の川、上總野を四ツ手に組みしが、双の手にて廻しを取り、後へ持上げ、土俵の外へ出しぬ。これを持出しとて、四ツ手持出しともいへり。これより中の品なり。芝の森は、西の葦の山と組みしが、浮足とて、あまりにとりくひられて、體の力なく足つき立ち負けぬ。東の入間川、片男浪と四ツ手に組み、上の手にてかたきのまはしを確と取り、下の手を抜き、二の腕をかい込み、身を開きながら足とく蹴たふせり。初瀬島を西の御所島押切りて勝。東の鳴戸、若の浦を四ツ手に組み、若の浦が首を抱へ、足をかけまはしをしてうち倒す。行司岩井喜七立かはり、雲林に西の淀の渡をあはす。淀の渡より合ふよりいち早く、左右の手を持ちて雲林が胸を突きければ、疾く土俵の外につき出せり。東の時津風、黒雲を腰に引つけ、下の手にてかたきの二の腕をひねりながら投倒す。四ツ手投といふ。東の熊の川、杜戸崎が左右の手をしたたかに捕へて、前へ引倒さんとするに、倒れざれば、その儘引かへし突出せり。此手をば引落しとい

岳を、西の神授山はね、東の松島つがひて秀の山ふみこしの負となる。これ等のことも、今すこしくり返しくはしく書まほしけれど、あまりくだくしからぬれば漏らしつ。東の浪の音、瀧の音、いづれ勝ちけんと思はるほどに、浪の音おし切にて負ぬ。式守伊之助かはりて召あはす。東の浪渡り、熊が岳をかひな廻しにて投出す。東の岩が根、巖島をわたしかけにて投ぐ。これより上の品なり。稻川を西の鳴瀧、四ツ手に組み押切り、鬼勝が胸へ西の蕪渡り、肩をおしあて腰を入れ、かたきの腰を引よせ、外より足をかけ、身をおしかけて、挫きといへる手にて投倒す。名草山を、西の越の戸はね出す。東の和田原、増見山をおし切り、岩井川に西の達が關立あふ。いづれも増上多門の化粧せる如く、おぞましき力士也。達が關は谷風が弟にて、殊に若くたくましくければ、皆人心にて汗をにぎり、あからめもせず、たれもほとくおどり出まほしき心地するも物くるほしきや。四ツ手に組みしが、岩井が腰引よせ、身をひねりながら、おしかりて押倒す。四ツ手ひねりといへり。やと賞でくつかへりたるを、御坐近ければなり、高しと制す。これより三役と稱せり。行司木村庄之助、小結九紋龍、西の柏戸をあはせ、九紋龍まだわらはのさまながら、すぐれて丈高く、少し心ぬるきやうなる。柏戸は姿、形とのひ愛嬌ありて心きたりと見ゆ。つまとりさし密て四ツ手に組み、土俵際へおしつめたり。庄之助、柏の方へ團扇をさ上げ、小結の職にたへたりと賞して扇を授く。かのおせたるわらはの、鼻白めるうしろ手木意なげなり。關脇、東の陣幕に、雷電とて、この頃鳴神よりも響きわたれるをあはす。立あふさまに陣幕、早や雷電がどへ手をかけ、咽喉つめといふ手して、たゞ一度に土俵へおしつめたり。このほどのうちどりに、いづれも角力に立合ひぬるも、滞なく勝ぬるは、思の外にあるかなと人いふ。今日の關脇にかなへりとして、弦を陣幕に與ふ。しばしたためらひて、追風善右衛門、遠つ親の内裏よりし唐衣、四幅の袴といへるものを着し、獅子王といふ團扇の世々傳へたるを持ち、ねり出づるおもち、まづ故ありと見ゆ。土俵の中央ばかり少し後ろによりて立つ。左右より小野川、谷風ゆたかにあゆみ出づ。御物見を拜し、土俵に入り、左右に立ならぶ。今日の御覽は、これをむねと上中下さぎめき立つ。左りにかたふとし、右に心引くもあり。六十餘州に許されたる手合なれば、これに越たる拜見あるべくとも覺えず、ゆすりみちなるに、行司さしかま

木村庄之助かはれり。東の梶が濱、出羽の海をつめて勝ちぬ。雷電うき足にて、西の錦木に負たり。鷲が濱はことに、丈たかく、太く逞ましく色黒きを、西の宮城野の色白く若く麗はしきに召しあはせけるが、互に力や劣らざりけん、しばし押合ひしが、鷲が濱、土俵へ押つけられ、わきへ廻らんとて、左右の足、土俵の上をわたりければ、土俵わたりのそく負とす。始めおしあひし時、一とあし土俵をわたりしは、自づからゆるせる定なれど、これは左右の足ともわたりなれば、宮城野の方へ團扇をあぐ。中入とて一庭の者みな各々幄の屋のうちに入れり。上中下まで尾花飯、やかれ飯など賜はる。漸くありて先のごと、行司、年寄、白丁など、ひし／＼と坐につきおはる、行司式守見藏立いづ。東の緑山、荒瀬川を合はす。みどり山、下手に荒せ川を投ぐ。さしかはりて下の品より上の品へとりあぐべきなりと聞ゆ。八汐島を、西の越柳、おし詰めて勝。東の奈良山、伊勢が濱の二の腕をきとらへて、前の方へうつぶしに引たふす。東の浪分、柳川を押切る。東の曙、江刺川に勝るも前に同じ。餘りに速かなるは見どころなき心地す。鷹の羽、西の金が崎に四ツ手投に投げらる。つゞきて名取川が左右の手に、西の紅葉山とらへて、力つよき手の方へひねりたふせり。讃岐川を西の三保が崎おしきり、東の湊川、須磨の關を刎ね出し、東の鶴が濱、増見川をつむ。行司木村庄太郎かはれり。東の加茂川、荒鷲が脇に片手をさし、前に引き、片手をば荒鷲が首にかけ引おとす肩透しといへる手なりとぞ。飛鳥川がさしたる手を、西の八雲山は上の手にて、外の方より強く抱へ、足を内より掛け、抱へたる手にて前へ投たり。神樂岡を西の亂獅子、上の手にて投、住の江を西の外の海うちかけ、袖が浦を西の高尾山おし切る。東の桐が崎、廣田川と四ツ手に組み、廣田川を引よせ、かたきの右の足をふみよすると、やがて己が右の足をふみ込み、外よりあふりかけて、地響くばかり投出す。更科は西の越の波に足きれにて負たり。和田海を西の秋田川、だしにて勝、東の和田崎、手間が關をかひなひねりにて勝てり。式守秀五郎立かはり行司す。琴の浦を西の室が關、刎ね落しの手にて勝ち、通し矢を西の三浦瀧つき落し、東の宮の川、鬼が岳をつむ。黄金山を西の山分、四ツ手にて投げ、梅の尾を西の荒汐引落し、東の甲斐が關、富田川をもち出し、東の島が崎、不破の關を押しきり勝つ。行司岩井喜七めしあはす。虎渡りを西の象が鼻刎ねだし、東の岩が洞、立浪をおし切る。温海

ひたる團扇の下より、小野川、谷風にとりかゝる。追風、左右をとり放つて、團扇を未だ引かず聲もかけざるに、取りかゝりたることわりなしとて、しきりにさへぎりにさへぎりにさへぎりにさへぎりに合はす。しばしためらひて、團扇ひく聲とともに、西の谷風、ふと寄せて刃ねれば、小野川取あふに及ばず、二足三足たじろく。追風善右衛門、谷風に團扇をあげ、今日の手關にかなへりとして、弓をさづく。谷風先の強味、小野川後の弱味とて、勝負決せるなりとぞ。あはれ谷風が、をさめの手出したらんには、山をも抜くべきを、かくてはことゆかぬ心地したれど、野見の宿禰が蹴速をうしなひ、畠山庄司次郎が長居を絶入しせしやうなるよりは、事がらうるはしく、さてあるべきにやあらん。谷風、弓を受け、うやまひささげ、四方にふりまわしなどして、うちかたげ拜して入りぬ。この弓を賜はることは、織田内府、近江の國常樂寺に於て、宮地といへる強力を關にて角力見たまひし時、勝たるに賞として賜へるより今にかくなんといへり。

かちかたに けふたまはれる 梓弓

もとのまゝなる ためしをやひく

角力ども祿の白かね、多く賜はりしとぞ。

君が代に あふひの花も 夕顔も

めぐみの露の ひかりそふらし

佐野肥前守義行ぬしのかくよめる。

めしあはせ 勝しすまゐの 心をも

思ひとりつゝ 見るはいさまし

父和鼎も、めづらかなる拜見に、翁さびたる腰のべて、われも廿だに若くばなど、さるがふこといひつゝ唐歌つくれり。

翠幔新開撲場、横綱意氣最虎揚。雙々分得英名遠、兩々帶將奇骨香。錦綉禪迎千里秀、弓弦賞見一時光。拔山餘勇

姑休買、別省神州稽古裝。

まことに夏草の花なく、男鹿の角の束みじかき業にかきつくへうもあらねど、武藏野のひろき御めぐみに、かゝる小さきも見侍ることゝかしこさのかぎりになむ。

成 島 峰 雄

(五)

江戸時代の將軍上覽角力は、此後、文政六年四月三日、嘉永二年四月十八日、またその外にも、數度、いつも吹上に於て舉行されたが、大規模の設備といひ、大力士の輩出といひ、寛政三年に及ぶものはなく、將軍上覽角力といへば、世人は直ちに谷風、小野川を聯想し、その餘の上覽角力は、殆んど皆忘れられてゐる。寛政三年以後の上覽角力は、大體、寛政の時を標準として行つたものであるから、いづれも大同小異である。その少しづつ違ふことを言へば、文政六年の時は、三役の勝負が終つて後に、地取り即ち片屋の稽古角力と、及び五人掛等の餘興が加へられた。それから此時の三役は、大關は番附面の大關同士であつたが、關脇、小結は、番附面とは違つた。寛政のときには、東西の三役同士が、正しく取組んだのであつた。

嘉永二年の時には、百四十番の取組の外に地取十五番、お好み十八番あつた。上覽も度を重ねるに隨つて、そのプログラムに變化を與へて、新趣味を注入するに力めたやうである。

七 谷風、小野川、雷電

(一)

「相撲起願」には、安永三年、甲午（紀元二四三四）の年の番附から筆を起してゐる。江戸の勸進角力は、此頃から完成期に入るとともに、全盛時代を出現せしめたのである。此の全盛時代を代表する大力士は、谷風、小野川で、此の二大力士の對立は、角力道の全盛を來たしたのである。續いて崛起した雷電は、その強剛、谷風、小野川を凌ぐやうであつたが、對峙すべき強力士なく、十六年間も大關を續けて、全くの獨舞臺であつた。川中島が天下の人の血を湧かしたのは、信玄、謙信の對立によるので、此の兩雄の力に懸隔があつたら、川中島が、それほど感激的のものではなかつたであらう。谷風が獨舞臺であつたとしたら、必ずやあれほどの人氣はなかりしなべく、谷風、小野川の對立が、角力道の勃興を來たしたのである。角力道のファンとしては、東西に非常の偉器對立して、その勝負の逆睹す可らざる好取組に對して、極度の期待と感激とを持つものであり、これが所謂角力熱となるのである、谷風、小野川が對立したのは、千載の一遇

といふべく、雷電が好敵手を得なかつたのは、惜しみて餘あることであつた。

前に谷風なく後に谷風なしと稱さるるほどの谷風であるが、實は谷風の直ぐ前に谷風、梶之助と名前まで同じく、讃州生れの強力士があつた。大坂の大角力に九年續けて全勝し、もう一年勝てば日下開山と稱すべしといはれたが、十年目に對峙したのは、大阪の強力士八角といひ、茶船を鐵砲ダマにするほどの脅力があるが、種々工夫を凝らしてみても、所詮、谷風に勝つべき見込がなく、此上は谷風をデラス外なしと思ひ、行司が團扇を引くと均しく、谷風が競ひかゝるを、八角は「待ツタ」といひ、かくすること度重なり、極めて肥満した谷風は、仕切りの間に脚はくたびれ、氣は苛立つてのぼせ切つたところを、八角、巧みに立つて押し勝つたのが、近世、「待ツタ」の起源として喧傳されてゐるが、此の谷風の名は傳はらない。昔、太閤といひ、黄門といふも多人數あるが、太閤といへば秀吉、黄門といへば光圀といふやうに、谷風といへば仙臺の谷風と定まつてしまつたのである。

谷風は、何故、その名前までも、先輩、讃州の谷風と同じに、谷風、梶之助と名乗つたのであらうか。彼が達ヶ關と名乗つて小結に進んだのは、安永四年十月であり、翌安永五年十月（紀元二四三六）に谷風、梶之助と改名した。これが記念すべき大力士谷風の出現の年である。關西の強力士谷風は享保、元文の頃を盛んに送つた力士であるといふから、試みに元文元年（紀元二四九六）

を取つて見ると、仙臺の谷風は讃州の谷風よりも四十年許後れてゐる。四五十年も経てば、世間から忘れられて歴史上の人物になつてしまふ。大衆的には忘れられたとしても、斯道の人には、讃州谷風の雷名は記念されてゐたに違ひない。雄心勃勃たる達ヶ關は、昔、秀吉が先輩柴田勝家及び丹羽長秀の雷名を敬慕して、自ら羽柴と名乗つたと同じやうな心境を以て、古豪谷風梶之助の名を襲つたのではなからうか。

達ヶ關が改めて谷風梶之助と名乗つた由來に就いては、從來、未だこれを明らかにしたのを見ない。私は思ふに、江戸大角力の番附に、達ヶ關以前に、達ヶ關が憧憬に値するほどの大力士を見ない。讃岐の谷風は、日下開山と稱せんとしたほどであるから、達ヶ關の心頭に映する名譽の先進者は、斯人でなくてはならなかつたと思ふ。

今は忘れられた讃州の谷風、當時の世評はといふと、角力道に有名な「翁草」の一書には、當代の大力士として稱揚してゐる。そして仙臺の谷風、今四十七八貫あり、角力も骨柄相應によく取り、今では肩を並べる者はないが、釋迦ヶ岳以後、稻川、千田川、小野川など、すべて三十年來、次第に角力が小さくなつてゐるといひ、暗に今の谷風強しと雖、昔の谷風の時よりも、角力のレヴェルが下つてゐるといふ意味をほめかしてゐる。

此の「翁草」の著者は、幼少の頃よりずつと續けて角力を見、元の谷風、今の谷風をも、皆見

谷風梶之助畫像



(中尾方一氏藏)

て來た大の角通であるが、今の角力は當年の角力の中頃にも及ぶまいといひ、谷風、小野川に對して、「さしてもなき兩人」ときき下ろしてゐる。其文に、

「寛政二年の頃、角力取谷風、小野川といふ兩人の者へ、禁中の御沙汰として、紫を賜ひぬるよしにて、此兩人は紫天鵝絨の禪にて出るとかや。委はしき譯は聞かず、追つて校正すべし。元の谷風、其外、世に名高き角力取共にさへ、かゝる例證を聞かざるに、今、さしてもなき兩人に免許あるも時節とやらん。唯だ一通り聞いては、禪にまで、ゆるしの色の有にやとおかしげなれども、角力の由來聞けば、さも有なまし」

といひ、元の谷風ほどの者にさへ、それほどの榮典の無かつたものを、今の谷風等が其の光榮に浴するの、時世の移りかはりであらうといひ、翁草の著者は世に名高き谷風を古今獨歩などと思はぬことを明らかに言ひきつてゐる。

横綱常陸山の名を以て世に出た「相撲大鑑」に於ては、谷風、小野川に對して、「小野川は勿論、谷風といへども、後世から想像するやうな大力士ではなかつたらう。またその前代の白山新三郎、丸山權太左衛門以上の巨人でもなかつたであらうし、初代谷風を抜くほどの大力量者でもなかつたであらう。寛政時代、百度更張の日に生れ、角力道興隆の代表者として、後世より驚くべきほどの推獎を受けるは、幸運兒である」といふ批評を下してゐる。續いて更に、「谷風は其の力量技倆のみならず、人物の優秀なる點に於て、一層その名聲を大ならしめたのであらう」と言ひ、

「後世、角力を語る者、先づ第一指を谷風に屈するは、定論といふべく、自分は此定論に異議を挟むものではないが、この定論には、明石志賀之助と同じく、小説講談の鼓吹興かつて力あると思はずんばあらず」と結んでゐる。想ふに常陸山は、あれ程の大名を博した大力士であり、前に古人無しと思ふくらゐの抱負もあつたであらうが、右の谷風評のよつて來る根據は、翁草の一書であることを附言しておきたい。

また「相撲大全」の一書には、明和九年六月（安永元年）仙臺、躑躅岡にて勸進角力興行したときの番附を載せ、本方は南部角力で、石見瀉丈右衛門が大關である。寄方は達ヶ關、關四郎、即ち後の谷風が大關である。初日、達ヶ關、石見瀉とあぶない預りを取り、二日目、達ヶ關、石見瀉に破られ、三日目、續いて達ヶ關、三たび石見瀉に破られ、達ヶ關三番負けたから、此の角力四日限りでやめとなつたとある。「相撲大鑑」に此事を評して、「當時は、彼の力量技倆とも、未だ成熟期に入らざりし時ならんも、續けざま三度、相手方に負けしといへば、谷風の力量技倆といふも、大概推測せられざるに非ず」と言ひ、谷風が大したものでないといふ一つの言分にしてゐるやうであるけれども、これは私どもとしては、一考を要すべきであらうと思ふ。何となれば、此時、仙臺躑躅岡の角力には、谷風まだ二十三歳の若年、その三年前、明和六年四月より深川八幡社地に於て晴天八日の勸進角力番附に、西方大關、仙臺、達ヶ關森右衛門として名を著はし、

若い強力士として諸方押し廻はしてゐたやうだが、何といつても未だ若角力、まだ一成熟期には餘程遠く、相手の石見瀉は、相當に出來上つた角力であつたかも知れぬ。いづれにしても、廿三歳の谷風が不成績だつたとしても、谷風の評價を上下するには足りない。如何なる大力士も、その未成熟期に於ては、屢々巧者な角力にしてやられるのである。谷風は、何といつても、古今第一、高名の大力士であるから、角力道からは十分にこれを研究する必要がある。

(11)

谷風が角力生涯の勝率は、古今にすぐれてゐるといはれてゐるが、谷風の經歷を見ると、相當に上り下りがある。左に安永三年、彼が始めて江戸大角力の番附に現はれてから、寛政六年、最後の土俵までの番附に現はれた谷風の地位を見よう。

○安永三年四月（紀元二四三四）

達ヶ關……西。前頭筆頭。

○安永五年十月

谷風……西。關脇。

○安永四年十月

達ヶ關……西。小結。

○安永六年初冬

谷風……西。小結。

○寛政九年十月
 (雷電) ……西。大關。(小野川、東大關)
 谷風は寛政七年正月病歿し、此年の番附には、小野川、雷電の名ともに見えず、翌年より小野川、雷電の對立となつたが、それも九年限にて、小野川引退し、此後は雷電の獨舞臺となり、相手變はれど主變らず、東大關は轉々として小野川、木幡山、廣原海、押尾川、市野上、大見崎、平石、吹掃、大木戸、柏戸の十人を更迭せしめたるに、雷電は、文化八年二月(紀元二四七一)に至るまで、十六年間西方大關を獨占し、これこそ長期大關として、古今獨歩の名聲を博してゐるのである。

如上番附に現はれた三大力士の成績を見ると、一番上り下りのあるのが谷風であることが發見せられる。關脇から小結に下り、關脇を取戻して大關に進むと、間もなく關脇に下つて、躍進し來つた小野川と關脇に對峙すること三年の久しきに及び、寛政三年上覽角力の前年を以て、小野川と相並んで大關に繰上げ、茲に谷風は大關を取戻し、これより五年間、兩雄、東西大關として對峙して、谷風の病歿に至るのである。かうして見ると、その經歷の上に於ては、谷風は、甚しく小野川に勝つてゐるのではないが、その聲名は大いに勝つてゐる。谷風の人氣が一代を壓したのは、その風格と人徳とに由ること少からざるはこれでも思はれるのである。

- 安永七年三月
 谷 風…西。關脇。 谷 風…西。關脇。(小野川、東關脇)
- 安永八年春
 谷 風…西。關脇。 谷 風…西。關脇。(小野川、東關脇)
- 安永九年初冬
 谷 風…西。關脇。 谷 風…西。關脇。(小野川、東大關)
- 天明元年十月
 谷 風…西。關脇。 谷 風…西。關脇。(小野川、東大關)
- 天明二年二月(紀元二四四二)
 谷 風…西。大關。(小野川、東大關)
- 天明三年十月
 谷 風…西。大關。(小野川、東大關)
- 天明六年十一月
 谷 風…西。大關。(小野川、東關脇)
- 天明七年四月
 (雷電) ……西。大關。(小野川、東大關)
- 寛政元年三月
 谷 風…西。關脇。(小野川、東關脇)
- 寛政二年三月
 谷 風…西。大關。(小野川、東大關)
- 寛政三年霜月
 谷 風…西。大關。(小野川、東大關)
- 寛政五年十月
 谷 風…西。大關。(小野川、東大關)
- 寛政六年三月
 谷 風…西。大關。(小野川、東大關)
- 寛政七年十一月
 (雷電) ……西。大關。(小野川、東大關)

に廿四歳、幕下十兩の筆頭、貧乏神に進んだ時であつた。其頃は、今と違ひ幕内が七八枚しかないから貧乏神は大關に見參することになるのである。

谷風一代の好敵手は、小野川であるが、此の兩雄の戦歴及びその勝負は精確には分らない。安永八年、初めての對峙には、谷風、突出して勝、翌年、二度目には、小野川押出して勝。けれどこれは大坂での花角力。次が淺草藏前の本場所小野川勝。その次は、上覽角力で谷風の氣勝ち。その次に、その年、大坂では兩體に倒れて預りになつてゐる。何といつても、如何に強勇無双の谷風も年齢の差で、若い小野川に對しては苦戦を免れなかつたであらう。しかし兩雄の對峙は、右に記しただけではなく、其外に幾度もあつて、兩雄旗鼓堂々相當るの概があつたのであらう。さもなくては如何に谷風の人徳を以てしても、最後まであの位地と人氣とを維持することはできなかつたであらう。

小野川は、若いだけに、谷風に對しては歩の善いところもあつたらうが、谷風の後繼者雷電に對しては、却つて五六歳の年長であるだけに、その爲に歩が悪く、結局、小野川は谷風よりも雷電に苦しめられた。大關として對峙すること、僅に二年にして引退し、去つて大阪に往つたのである。

小野川が大名を成したのは、天下無敵の評のある谷風を破つた爲であり、評判記には安永九年、大坂でのこととしてゐるがそれは花角力であり天下の評判にならなかつた。恰も太刀山が常陸山を、本場所始めて破つて大名を成す前に花角力では幾度も勝つてゐたのと同じであらう。小野川が本場所に於て、始めて谷風に勝つたのは、天明二年二月（紀元二四四二）である。小野川の勝利は、江戸中の大評判であつた。それほど谷風の勇名が轟き渡つてゐたのである。谷風のフアの一人、蜀山人の「俗耳鼓吹」に、

「力つよくして、一度も負くることなく、淺草、藏前、八幡の社内にて、すまひありし時、小野川榮藏にはじめて負けたり。天明二年二月二十八日の日なり。

手練せし 手を蟻螂が 小野川や

かつと車の わつといふ聲

朱良菅江

谷風は まけたりと 小野川が

かつをよりねの 高いとり沙汰

四方赤良

當代、狂歌の二大家が、淺草藏前の大角力で、谷風が初めて負けたとして詠んでゐる。これ以前のは花角力として重きを置かないのである。

此時、谷風は年卅三。大關に昇進した初場所である。小野川は谷風より九歳若いといふから正

小説狂歌その他、一般文藝に現れた谷風の人気は素晴らしいもので、それがまた天下後世の角力熱を煽ることに、與かつて力があつたらう。此點に於ては、小野川は匹敵に非ざるのみならず、古今何人も谷風に及ぶ者はない。茲にその一斑を擧げて見よう。

天明四年、谷風が初めて小野川に負けた評判がまだ高く残つてゐた頃の輕口咄に、

角力といへば飯より好きな人。今日は、谷風と小野川の取組とて、早速行き見物。小野川を大のひるき。何の苦もなく、谷風を押し出すと、どつと大聲の中より、着物も羽織も帯も投げ出し、丸裸になつて、歸りがけに友達に逢ひ、

「これはどつだ、きつい負け様だ」

といへば

「いや、勝つたから裸になつたよ」

角力ファンが勝負力に花祝儀として、羽織や其他の相當のものを投げたことは、當代の風習であつた。

川柳に、「雷電、谷風、鳴り響く、耳の底」といふのがある。谷風、小野川の上覽角力の時、雷電の名は既に鳴り渡つてゐた。

寛政四年、「富貴樽」といふ御伽噺に、谷風のことを鬼風として書いてゐる。

「鬼風といふ角力取り、つい負けたことが無いといふ咄の所へ一人來、

「イヤ鬼風も、昨日ひどく投げられたといふ沙汰だ」

「それは誰に負けたのだ」

「揚卷に、ひどく投げられたさうさ」

「ハアそれはつい聞かぬ角力取たの、何處の抱角力だの」

「ナニサ三浦屋の抱への女郎さ」

此のやうに、谷風を桃色に扱つた黄表紙などはいろ／＼あり、谷風の似顔を描いてゐるから、それと直ぐに分るが、茲には省略せざるを得ない。唯一つ松浦靜山公の隨筆「甲子夜話」に見えた谷風の若い妾のことを紹介する。

「谷風、或時、何事か、その弟子のことに就いて立腹し、其者をつれ來れ、搏ち殺すべしとて怒りける時、樓上にゐたれば、多くの弟子ども、交る／＼樓に出て、詫をいへども承引せず。後は、誰にても取扱ふ者を打殺すべしとて、いよ／＼怒りければ、寄りつく者なかりける。一人才覚ある弟子、工夫して、谷風が妾の年十七なる者ありしを頼みて、「あの如く怒られては致しかたなし、何とぞして機嫌を直し、樓より連れ來れ」と言へば、妾心得て樓に上り、谷風の手を執り、弟子中一同御詫申候、下におり玉はれとて、手を引き下りたれば、谷風、應々といひながら、少女に引かれて、樓より下り、事濟みけるとぞ。後に弟子ども言ひしは、かく多き角力の力も、少婦一人には敵せられずと、皆々彼の才覚に服しけるとなり云々」

とある。此の若き妾があつたことは事實であらう。強き谷風は白哲にして柔和、女にも大へん人

氣のあつたことはいろ／＼の書物に見えてゐる。

寛政十二年、「木の葉猿」、これは谷風歿後の刊行であるが、谷風の非常に肥満したやうすを描いたおもしろい話がある。

「谷風槌之助、女房に向ひ、くよくくと、

「これかゝアどん、俺も此のやうに大きな身體に生れつくといふも、誠に片輪者じゃ。つひに俺は、俺が臍見た事がな

い」

といへば、女房、

「覗いて見なさい。私を手傳ひやせう」

とたすけがけになれば、谷風せつなさうに腰をこぎめる。女房、

「もつとだから、こどもなさい」

と谷風が頭を押しければ、谷風、

「どうも、せつなくて／＼ならぬから、よしにしやせう」

女房、

「ハテもうちつとこどもなさい」

と頭を押せば、谷風こども過ぎて、くるりと引くり返ると、女房、手をひろげて、

「ハアよんやトナア」

ユ一モアたつぶりのものだ。元文五年（紀元二四〇〇）の「輕口福おかし」に、京都、眞葛ヶ原の角力のが出て、「それでも、谷風が初めて上つた時は、お前方は毎日見に行んした」とある

が、元文五年は、上覧角力より五十年も以前のことだから、此の谷風は、横綱谷風ではなくて、初代谷風である。初代谷風も當時は中々有名だった。

蜀山人のことは既に述べた。谷風を描いた黄表紙では、私は山東京傳の「吾妻鏡、太平記、玉磨青砥錢」を尤も傑作だと思ふ。これは當代の賢人といはれた白河樂翁の肅清政治を諷刺したもので、此種の名作の中には、喜三二の「文武二道萬石通」戀川春町の「鸚鵡返文武二道」の如く、世に知られたものがあるが、京傳の如く、露骨に樂翁公を扶つた感のあるのは、他には無い。京傳の此の黄表紙のことは、茲に詳説せず。谷風のバックをした、そのバトロンとして知られた樂翁公、樂翁公は畫家の谷文晁、力士の谷風を特にひびきした。随つて文晁と谷風との間に親密な連絡があつた。此の二人のことも話題になるものがある。谷風が上覧角力の光榮を得たのは、その名聲にもよるが、樂翁公の推輓が尤も力があつたと思はれ、谷風が樂翁公のひびき角力であることは、江戸中に知れ渡つてゐた。玉磨青砥錢は寛政二年の作で、谷風が大關を取戻して、いよいよ名聲隆々たるときであつた。此の表題だけでも、樂翁政治を諷刺するに足るものであるが、書中に、秋田城之介とあるのが、樂翁公に擬してある。谷風の似顔を描いた偉大なる立派な角力が、裸かで、伊達禪、土俵入の姿だ。右の肩に秋田城之介を駕籠に乗せて引擔つぎ、左手には、槍印その他行列の備道具を一手に攫んでゐる。その記事が痛快だ。

「秋田城介どの、百人の行列、御儉約で、百人力の民風一人を召しつれ玉ふ」とあつて、民風が

「下におらうく」

と警蹕の聲をかけてゐる。そこは大名屋敷の門前で、或は秋田城之介、出門のところであらう。御殿女中の濟ました姿がチラホラあるいてゐる。民風が谷風たることは言ふまでもない。此挿圖は、日本角力史に掲載しなければならぬ。

谷風の似顔が、錦繪その他の繪になつて世間にひろまつたことは我邦に力士あつて以來、固より無双のものであり、若し單行本の谷風傳を作るとすれば、その趣味ある挿圖は、随分、豊富を致すであらう。谷風、小野川の風格は、成島峰雄の「すまゐ上覽記」を第一とすべく、それは別に全文を掲載すべきを以て茲には略し、小野川を

「黒きおもむづかしげに、すさまじき毛はへたるが、さすがにおそみながら、此道にしては、われはとおもひあがりたるさましたり」

といひ、谷風には、

「山もうごき出たらんやうにて、腰のかこみなどは、實に牛をもかくしつべき樹がらほどのさましたり。まなじり細う引いて鬢に入る。おももちにこやかに、つつしみいやまひたる、聊か驕慢の氣なく、めやすくて入りぬ。」

とある。小野川を抑へて谷風を揚げてゐる。これは公評と見てもよからうと思はれる。然れども、

大坂で出版された角力の書には、殆んどこれと反對に、谷風を抑へて小野川を揚げたのがある。小野川が西國の出身、谷風が東國の出身なるに由り、東西、その人氣を異にするといふこともあつたらう。しかし谷風よりも小野川を好男子と書いたものもあり、畫家の春英、春章、春好等の谷風、小野川兩雄の寫生畫を見ると、見た目の印象は知らぬこと、如何にも小野川の方が男振りは好かつたかと思はれる。但し小野川は色黒く、谷風は白哲であつたことも疑ない。

講談師の張扇で叩き出した谷風、小野川、雷電の話は、一々、茲には記さない。小野川の怪猫退治も固より小説で、講談によく出る越ノ海勇藏、谷風の弟子、小さくて頭突をもつて來るので、谷風が持て餘して、雷電が稽古をつけるといふ講談でおなじみの力士だが、これは弟子どころか、谷風よりも寧ろ先輩くらゐで、早く番附に出てゐるが、どうして谷風の弟子とするか、そのいはれは分らない。谷風より少し先輩で、歌舞伎劇に有名な「關取千兩幟」、稻川に鐵ヶ岳、鐵ヶ岳のモデルは千田川である。それに續いて此の越ノ海が名高い。

谷風に關する傳説のうちで、出所不明のものを除き、「假名世説」の一節を左に紹介する。

「關取谷風楯之助、小角力を供につれ、日本橋、本船町を通りける時、鯉を買はんとしけるに、價いと高かりければ、供の者にいひつけて、まげよと言はせて行き過ぎしを、魚うるおのこ呼びとどめて、關取の負けるといふは忌むべきことなりといひければ、谷風立ち返へり、買へくといひて買はせたるもおかしかりき。これは谷風の負くるにあらず、魚うる

おのこの方をまけさせることなれば、さのみ思むべきことあらざるを、かへくといひしは、ちとせきこみしと見えた
り。これは予が若かりしとき、まのあたり見たることなりき。

谷風が初めて小野川に負けた日は、角力場に行く途中で、両手で米俵を以て三十邊も拍子木を打つやうにして、くたびれた爲であるなどと書いたものもあるが、當てにはならぬ。此の假名世説は、自分が實見したことを書いてあるから、茲に採録した。谷風のことといへば、些細なことでも、世間の話題になつたのを思ふと彼の人氣の妻さは想ひやられるのである。

尙ほ谷風の強味を物語るものとしては、「攝陽落穂集」に、

「天明元年、大坂難波新地の角力興行中、終りの日に、五人掛といふことを始む、……大關は谷風、鷲ヶ濱也」

とある。これは江戸、本場所で谷風鷲ヶ濱が東西の關脇を勤めてゐる時で、此翌年揃つて大關に進んだ。かういふ記事で、谷風が五人掛の起源になつてゐる。五人掛は、一同、土俵下に控へてゐて順次取掛るのであり、今、前角力とする五人扱とは違ふ。相對の一人では興味が足らぬといふところで、五人にした興行政策から割出したものではあるが、それだけ谷風の強剛は、角力興味の焦點だつたのである。

(四)

雷電爲右衛門といふ名は、聞いただけでも、滅法強さうに響く。雷電と名乗る角力は、その前後に數人あり、雷電灘之助、雷電爲五郎、雷電源八と併せて四人、その中、爲五郎が一番古く、安永三年の番附に、雲州として出てゐる。爲右衛門より遙に先輩である。爲右衛門が雷電と名乗るのは、松江侯に仕へた爲に、てうど阿武松が長州侯の抱力士となつた爲に阿武松となつたやうに、爲右衛門も雲州侯に仕へた爲に、雷電といふ雲州因縁の名をついだのではないかとも思はれる。灘之助の雷電は、爲右衛門が始めて番附に現はれる前年、即ち寛政二年、東の幕尻に唯だ一場所出てゐるだけである。此の灘之助も相當に人氣があつたものと見えて、春英、春好等の描いた似顔が數種残つてゐる。見たところ、年齢がずつと爲右衛門以上なので、これが後の爲右衛門になつたのではない。もう一人の源八は、「翁草」に書かれてゐるが、これは後に石山與右衛門と改名してゐる。雷電同名の詮索はこれ位にしておいて、雷電爲右衛門が一人、斷然有名になつた爲に、いろ／＼の雷電に關した話が皆此の一人にまとまつてしまつたやうである。

雷電爲右衛門は、年廿五にして、寛政三年の春場所、即ち上覽角力の直前に、始めて番附に名を現はして、しかも突如として關脇に附出されてゐるのである。しかも角力上覽記には、近來、勇名が雷よりも鳴り轟いてゐると書いてあるのを見ると、もし前から斯界に知れ渡つてゐる。何しろ附出關脇といふは大したことだ。彼は十八九歳の頃から、浦風の弟子になつて稽古したと

いふから、廿五歳の關脇以前に番附に出ないことはなからうと思はれる。しかしそれ以前、雷電爲右衛門の名は、番附には無いから、土俵を勤めてゐたとすれば、別の名であつたといふことになる。然らば雷電の前名は果して何であつたかを明らかにせねばならぬが、それに關しては、未だ何等の確たる材料が得られない。その強味が測り知られぬから、寛政三年まで番附外で取らせられておいて、見當をつけて、一躍關脇に付け出したといふ特別の事情があつたかも知れぬと思ふ。けれどそれは想像にとどまることである。

雷電の強味は、實に古今無双といふも不可なる可く、これほどの大剛力士が、どうして横綱にならなかつたかに付ては、種々の想像説がある。谷風小野川は、禁廷から紫の化粧廻しの御許しをうけて、それについて横綱を張つたかとも考へられるが、雷電はその事無きが故、随つて横綱免許のことも無いのだらうかといふ説は、一番道理らしく思はれるけれども、それと斷定するわけにはゆかない。政治上ならば、第一流の大政治家は悉く總理大臣になるとは定まつてゐないが、それとは事變はり、角力は土俵の上で明らかに相手を倒すのだから、雷電のやうに、十六年間も大關を維持して、その間、負けたのは僅々數回に過ぎないといふやうな絶對に強いのを、横綱にせずにはおかないから、尙ほ此の強い雷電を飛び越して、次に阿武松が横綱になつてゐるのを見ても、雷電が横綱にならなかつたのは、紫の化粧廻しの問題ではなくて、他に事情があつ



(藏氏一方尾中)

像畫門衛右爲電雷

たのだらう。

雷電の強味を語るものとして、張手、鐵砲、門との三つを禁せられてゐたことは遍ねく傳へられて、その記念碑の碑文にも書かれてゐる。鐵砲を禁じられたとも思はれぬが、或は事實であつたかも知れぬ。張手に至つては、雷電の手形は、太刀山の手形よりも、一寸許も長いから、その巨大な手で張倒されてはたまつたものではない。これは禁じられたのは間違ふなからう。

雷電が大關を引退した後までも強かつたといふ話が傳はつてゐる。これは横綱阿武松が、閑居中の雷電を訪ひ、「今なら爺に負けまい」といふと、雷電笑つて、「わしから見れば、お前さんは子供だ」といふ。さらばと、庭に下りたちて、三番取つたが、三番とも、阿武松が投げ出されたといふのだ。雷電は、いつまでも強かつたかも知れぬ。けれども此話に修正を要するのは、阿武松が大關となつたのは、雷電の歿した翌年だから、横綱になつたときは、雷電は生きてはゐなかつた。この話は事實とすれば、雷電引退後、間もない時のことで、四十前後のことではなからうか。

強い雷電も女には弱かつた。松浦静山公は角力好で、その隨筆には、力士のことを度々書かれた。「甲子夜話」には、

「雷電といひし長七尺にして大剛力の大關、予も曾て識れり。面は馬の如く、長は鴨居を越したり。信に多力者なりき。

或時、歌妓の爲め頬を打たれ、あいたと言つて目を瞑りたり。傍人笑はざるは無かりしと。また或時、少婦に戯れたるに、この少婦、雷電の胸を衝きたれば、雷電後ろへ倒れたりと、玉垣勘三郎語りき。云々」

これで見れば、雷電の優しい半面があつた人間味が知られる。雷電歿後二十七年にして、その記念碑が郷里に建てられ、佐久間象山の撰文である。此文は、日本角力史上に必傳の名文であるから、左に載せる。原文は漢文、便宜上、假名交り文に譯す。

力士雷電は信州小縣郡大石村の人なり。性は關氏、父を半右衛門といひ、母は後藤氏。雷電生れて甚だ驍力あり。其兒戲、人の爲す所に類せず。睹る者皆驚く。年十八九にして身長六尺五寸、肢幹鐵の如し。面貌温厚、自然に親しむべし。江戸に來り、力士浦風に從ひ相撲を學ぶ。幾何もなくして、其技を以て天下に冠たり。雷電の號、都鄙藉々として稱して置かず。上大將軍公より以て列侯に洎び、屢召して、技を闘はしめて觀る。亦た其狀を偉とし、其貌を愛し、其魄力の能く偕に抗する無きを嗜嘆せざるなし。初め雷電の相撲の群に入るや、其對敵するところ、動もすれば殘傷するものあり、闘極し難きを苦む。是に於て其技の老、相議とて、其手勢の尤も當り難きもの三つを禁す。人始めて安んじて、之と相角することを得たり。然れども卒ひに之に能く勝つもの莫し。力士の徒を歴選して、蓋し健盜以來一人のみ。嘗て技を以て松江侯に仕ふ。後辭して歸り、文政八年を以て家に卒る。壽五十九。雷電世を去つて二十七年、孫義行、其祖の蹟を述べて無窮に傳へんと欲し、乃ち石を其村の道旁に製し、我に來つて辭を請ふ。昔、越前秀康卿、伏見に在りて、名妓國兒を召し、其舞を見て泣く。人怪んで之を問へば、曰く、今天下の女子千萬人、此女第一たり。吾丈夫に生れ、天下第一流たる能はず、大に此女に愧ることあり、故に泣くと。今、予、雷電の爲に斯碑を識す、亦た殆んど將さに泣かんとする也。系けて曰く、

信山崇峻、信水清駛、神氣の鍾まるところ、戦ち魁偉を生ず。吁嗟雷電、力武比無し、間世一出、固より天翳を惠む、

我士となり、魁琦なること能はず。爾の爲に銘を勒す、心篤く性悒たり。

此碑は、初めは象山の自筆を刻したもので、象山の書は、「日本の顔真卿」といはれるほどの名筆であり、雷電、象山及び其の文、其書といふわけで、天下に稀有の三絶の名碑であつたが、雷電崇拜は盛んなもので、遠近の人々、來つて碑石の一片を打ち抜き、兒女の健全成育の護符とする爲め、遂に悉く打ち抜き去つて、最初の碑は全く形を留めざるに至り、明治年間に、巖谷一六の揮毫を請ふて再建したが、これまた追々に抜き去つて、今やまた第三回の建碑をせねばならぬやうになつてゐる。雷電の威力、偉いではないか。されば此の碑の拓本は、往々にして世に存するが、建碑後、間もなく作つたもので、いづれも珍重すべきものである。私も雷電の縁者なる、畫家關晴風氏から一本を贈られて愛藏してゐる。同氏の話によれば、雷電の家には、その刀、下駄等、猶ほ若干の遺物を保存し、その家の鴨居は、普通よりも大ぶん高くなつてゐるといふことだ。さうすると、その家は、雷電、角力を止め、郷里に隱居してから作つた家のやうであるが、さうではなく、自分の身に合はせて、高くしたに過ぎない。雷電の家は、信越線、田中驛から下り列車ならば、右手に山に登つて行くのである。抑、象山の所謂、信州の高山大河、秀靈の氣、鍾まつて偉人を生ずるもの、小縣郡オヒサガケンとしては、萬葉集の作家、

大君の みことかしこみ 青雲の

たなびく山を 越えて來しかも

の作者、次には源頼政に頼まれて平家追討の檄文を書き、後に木曾義仲の軍師となつた太夫坊
覺明、その次は雷電爲右衛門、これ等は天下第一流である。

雷電には猶ほ記すべきことがある。雷電が押した手形は、世間には有名だが、その大きさは皇國
度制考の測定には、長七寸四分、横四寸二分と記す。その手形の扇面に題した蜀山人の贊には

萬里をも とどろかすべき 雷電の

手形を以て 通る關取

雷電を詠じた川柳の句には、

雷の出るを太鼓で觸れあるき

觸れ太鼓で雷電の登場を報ずるのを、雷公の太鼓に振つてゐる。

西の關日本中へ鳴りひびき

雷電は西大關である。鳴りひびきで雷電を利かせてゐる。

雷電と稻妻雲の抱へなり

雷電と稻妻咲右衛門は、ともに雲州、松江侯の抱力士であつた。



扇面

雷電
右衛門
手形
扇面

形手門衛右爲電雷
(寸 實)

(中尾方一氏藏)

稻妻はもう雷電になる下地
この稻妻は、第五代横綱になつた稻妻雷五郎だ。此句は文政末年の句である。その頃、稻妻、頭角を抜いて、關脇から大關に進み、横綱阿武松の壘を摩してゐる。雷電になるといふは、素敵に強くなることを言つたのだ。

また降るだらう雷電に九紋龍

雷電が出たり龍が出たりすれば、大雨になるだらうといふこと、此句は寛政の句で、西の關脇雷電に對して、東の小結に九紋龍清吉があつた。「相撲私記」には、九紋龍は、まだ童の様ながら、すぐれて丈高く、少し心ぬるきやうなりと評してゐる。

雷電谷風鳴りひびく耳の底

これは寛政の句、説明するまでもない。

小野川にならぬ譯が有馬山

小野川は久留米の有馬侯の抱力士である。有馬山は、有馬侯を利かせたこと勿論だが、此の句意、不明である。

名力士の傳記としては、陣幕久五郎の自敘傳の外には、從來、殆んど稀であつたが、昭和十三年、信州人の藤原銀次郎氏が、同國出身の巨豪として崇敬する雷電の傳記を著したのは珍づらしい。これは佐久間象山が雷電の碑文を書いたのと、同じやうな心境であるらしい。實に雷電の魁雄振りは、後世、幾多の有爲青年を鼓舞するものがある。藤原氏の「力士雷電」は非賣品である。此書に、雷電の郷里に残された挿話等を蒐集し、及び、何故に大剛雷電が横綱とならざりしやの問題を解決すべく力めてゐる。

「力士雷電」に據れば、雷電の生れた小縣郡滋野村の大石區、この邊一帶は大きな傾斜地で、その底は千曲川である、對岸は屏風のやうに立つ布引山、城山の岸壁、それを前景として佐久平が廣々と展げ、立科山脈から遠く八ヶ岳の峻峰が双眸の下に展開する、實に雄大な自然の景觀である。雷電が改築した生家は現存してゐるが、雷電卅二歳の時、金子五十兩を投じて改築したもので、今は此邊の農家としても大きいといふほどではないが、百四五十年前の當時は、相當立派なものであつたらう。彼は此の落成祝に、酒代として建築費と同額の五十兩を使つて村人を喜ばしたといふことだ。雷電の遺物としては、諸國相撲控帳、扇面に押した手形、黒塗朱皮緒の足袋、華緒の雪駄、朱塗金蒔繪の盃、雷電一枚摺の錦繪、黒鞘の大刀、將軍家拜領の中朱黒縁緋總の軍配等々である。雷電の手形は左手で、指紋まではつきりしてゐる。手形全體の大きさとしては、

後世の力士大砲だけが、これに劣らなかつたが、指の太いことに於ては遙に及ばず、つまり古今第一の手形といふことになる。金蒔繪の盃は、むしろ椀といふべきで、雷電が酒豪だつたことが想像されるが、雷電の父も、よほどの酒好きだつたと思はれるのは、雷電一家の墓地の中にある父半右衛門の墓は大きくはないが頗る奇抜だ。臺石は盃臺、墓身は酒樽に象どり、その上に大盃を笠に被せてゐる。これは雷電が自ら考案して作らせたものだといふ。

雷電の父は、そのやうに酒好きの元氣者だつたが、母もまた剛氣な女であつた。この村から近い田中宿の瑠璃殿に、雷電の母けんが奉納した仁王の石像がある。傳説によれば、昔、田中宿に大洪水があつた時、瑠璃殿前の左右仁王像の中の一體が押流されてしまつた。雷電の父半右衛門に嫁いだばかりのけんは、此に參詣して、「もし私に剛健な男の子をお授け下さるならば、仁王尊の一體は、私が必らずお納めいたします」と熱心に祈願をこめた甲斐あつて、間もなく生れた男の子は太郎吉と命名し、十五六歳にして六尺にも達し、見るからに逞ましい仁王尊のやうな骨格で底知れぬ大力があつた。これが即ち古今無敵の雷電爲右衛門の由來であり、今、茲に仁王尊が左右二體揃つてゐるのは、雷電が大關になつた寛政八年に、母が仁王尊一體を奉納したのだ。

雷電は廿二歳で雲州侯の抱力士になつた。雲州侯は茶道に名高い不昧公であつた。世人は、とかく不昧公を茶道などの方面からのみ見ようとするが、實は文武、藝術、産業、治水等あらゆる

方面に治績を挙げた近世名君の一人なので、雷電の大成も、斯公に負ふところ少なくないだらうと思はれるが、不昧公と雷電との關係は、くはしく調べて發表したいものである。角力名の雷電は、親方浦風がつけたものであると、藤原氏は記してゐるが、雷電の二字は、雲州の雲に縁のあるもので、私是不昧公の命名ではないかと思ふ。爲右衛門の通稱は、雷電少壯時代、郷里の恩人、源五右衛門爲久の爲の字を貰つて頭につけたものだといふ。

藤原氏の「力士雷電」には、雷電年譜の次に大島伯鶴の講談を載せて、雷電が其の愛弟子越の海勇藏を暗殺した四海波を、見事、土俵の上で投げ殺して、弟子の仇を討つた。けれども、その代りに横綱問題が消えてしまつたとして、強い雷電が横綱にならなかつた事情を説明しようと思つてゐる。越ノ海は谷風よりも先輩にして、勿論、雷電の弟子に非ず、右は一場の講談に過ぎざることと言ふまでもない。

(六)

古の大力士の生活を知る参考にもなるから、雷電の一代を略記して見よう。雷電は、抱主松平不昧公が藩主になられた明和四年（丁亥、紀元二四二七）に、信州小縣郡大石村（現在、滋野村大石區）に生れたのである。幼名太郎吉、父半右衛門二十八歳、母けん十九歳の時の子である。

瓜の蔓に茄子がなつたのではなく、父も宮角力の雄なる者であつた。天明四年（紀元二四四四）、江戸に出て、年寄浦風の弟子になり、二十二歳、松江侯に召抱へられ、翌廿三歳の時、松江に往く、御切米八石三人扶持を賜はる。此時より始めて雷電と稱す。寛政二年（紀元二四五〇）三月廿八日、江戸勤番を命せられて江戸に歸り、秋、大角力に出場、小野川を破つたこと、諸國角力控帳に見ゆれども、此年の番附に雷電の名見えず、番附外で登場したのであらうか。翌年、寛政三年、有名なる將軍上覽角力に出場、年廿五、關脇に附出され、雷名、天下に轟く。翌年二月、不昧公に召されて松江に歸參し、江戸春場所に出でず。翌年、雷電年廿七、角力出精の廉により加増米二石下さる。此年十二月、江戸を發して信州に歸り、所々を興行、始めて錦を故郷に飾つた。翌春、江戸に歸る。翌年廿八歳の春、また上覽角力あり、その爲め春場所休止、不昧公より龍紋ノ袷、麻上下、白緞子下帶とを賜はる。地方巡業は、廿五歳始めて番附にのつた年より始まり、藤澤、遠州見付、大坂、堺、伊勢の雲津等まわり、廿六歳の時は、名古屋、桑名、岡崎、大坂、堺、京都、再び大坂、大津行、廿七歳には關東地方、大鷲、銚子、熊谷、秋には甲府、吉原、掛川、大坂、京都、松江、津山、加古川、堺等行、此年廿八歳の春二月、信州巡業、岩村田、諏訪、及び出生地の大石行、秋には大坂、一ノ宮、丸龜、伏見等廿九歳の秋、京都、大坂、松江、多度津、岡山、それから雲州の今市及び大社、國造北島家では稽古角力を見せ、再び松江行。寛

政八年、三十歳、前年谷風逝去のあとを受け、西大關として初登場、東大關の小野川に對立す。此年、奈良、倭平、木津、大坂、京都、伊賀はい原、伊勢の川はた、松坂、桑名及び岐阜を巡業、三十一歳の五月、不昧公國元にて病氣につき、御見舞の爲松江行、たびん、稽古角力を上覽に供す。不昧公が非常に角力好、雷電好きだつたことが知られる。公の輕快後、江戸勤番を命ぜられ、八月、松江發、木曾道中より郷里に四日逗留し、板鼻、山野、富岡に巡業、翌年三十二歳、東北地方、八幡山、湯澤、横手、秋田、久保田、大館、停代、入市、鶴ヶ岡、天童、山形等巡業。父半右衛門五十九歳で病歿。翌年三十三歳、春は京都、大坂、松坂、名古屋巡業。寛政十二年（紀元二四六〇）年卅四、正月江戸發、松江行、此年廣く巡業、山市場（伯耆）勝山、大津、八幡、長濱、敦賀、福井、くし（加賀）富山、糸魚川、番町、高田、善光寺、坂木等、信州路を巡業して、郷里大石に歸り、四日逗留、亡父の法要を營み、且つ先年住宅改築の時の費用を完済す、それより板鼻、新町、銚子、佐原、東金等を経て江戸に歸る。

享和元年（紀元二四六一）雷電年卅五、春は白井、江戸崎、杉崎新田等關東地方を巡業し、六月より九月にかけて、名古屋、桑名、大坂、京都、松江を巡業し、その儘、松江に居残る。十月、江戸大角力につき、勸進元より年寄東關を松江に遣はし、雲州角力拜借方を願つたが、不昧公許されず、東關空しく江戸に歸つた。雷電の人氣の盛んだつたことと、此のやうな人氣大力士を抱

力士にもつた大名の鼻息の強さが想ひやられる。十一月、雷電大社詣、千家北島兩國造家に至り、土俵入を爲す、享和二年、年三十六。廣島、小倉、佐賀、島原、諫早、長崎に巡業。長崎滞在中、五島近江守に謁し、酒肴及び白銀二枚を賜はる、大酒豪と聞えし支那人陳景山と酒戦して彼を酔倒せしめ大勝す。景山、後ち書畫を贈りて、謝意を表した、その書畫、雷電の菩提寺、赤坂の報土寺に藏す。六月より長崎を發して大村行、大村侯の御前角力、唐津にては唐津侯の御前角力、吉井、有田、伊萬里、博多、博多にては福岡侯の御前角力、久留米、直方、下ノ關、國島、丸龜、丸龜侯の御前角力、大坂を経て江戸に歸る。翌年三十七歳、閏正月、妻八重を伴ひ信州行の途中、上州板鼻逗留、七日市村より疫病退治のまじないとして招待せらる。鎮西八郎爲朝以來の武威といふべし、江戸に歸りて、前橋、深谷、銚子巡業、江戸春場所は、麻疹大流行の爲七日目限り休止。秋、大坂、京都、草津、高島、多賀、笠松巡業、此頃、雷電、麴町十丁目に住したが、四ツ谷、傳馬町一丁目鈴木庄司貸家に移轉した、翌文化元年甲子（紀元二四六四）雷電年卅八、春、藤岡、板鼻、川越、秩父大宮等巡業、春場所休場、雷電は、かねて丸龜侯の眷顧をうけてゐたが、此度、若殿様初節句につき、六日、御庭にて角力御覽、酒肴を賜はる。秋、白石、山形、柴橋、秋田、久保田、鶴岡、佐沼、岩手山城下、田尻、松山、仙臺、白川、黒羽、宇都宮等巡業、仙臺にては、谷風の展墓をなし、香典を遺族に贈る。翌年三十九、二月、芝神明境内春場所興行、七

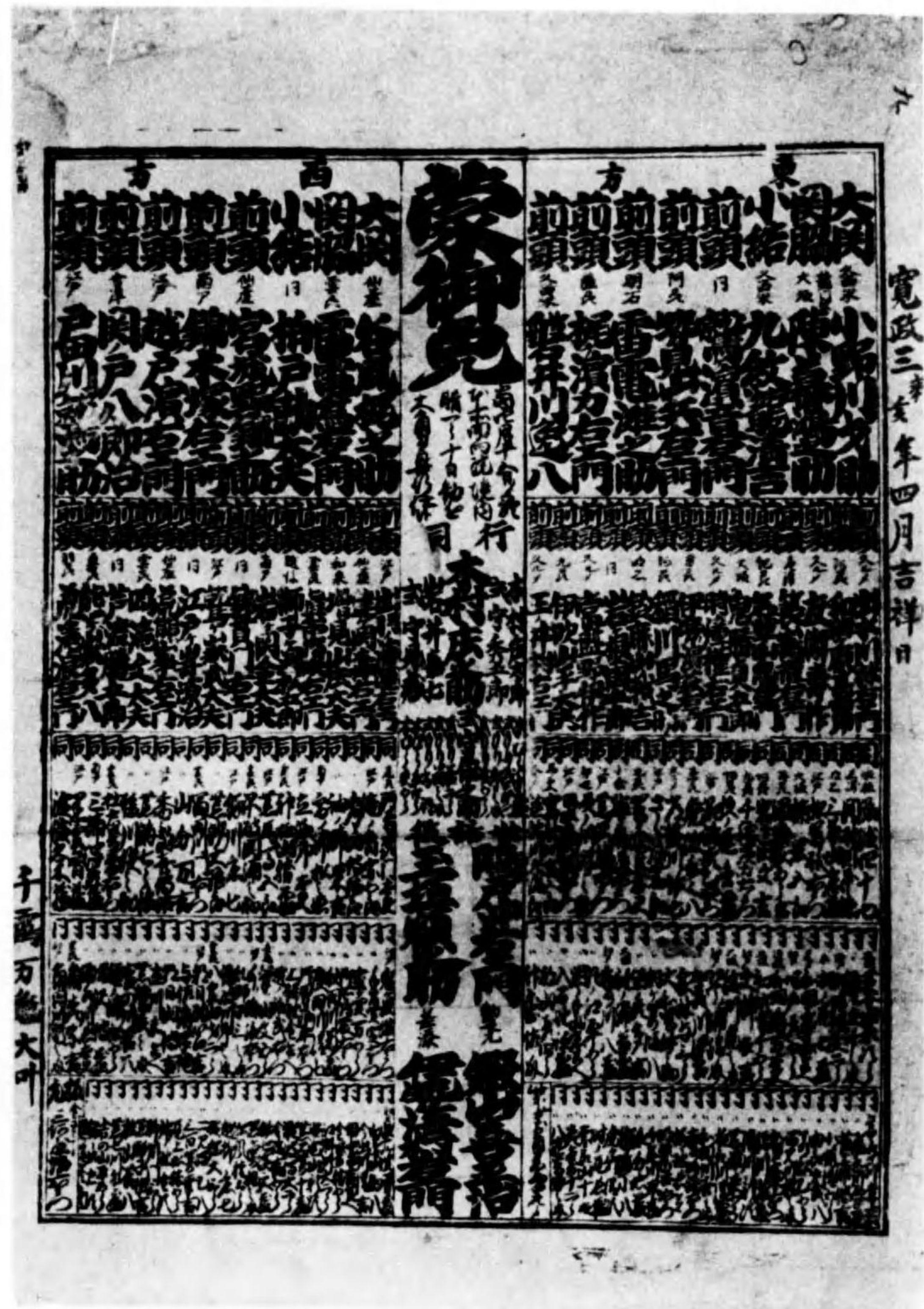
日目打出後、有名なるめ組の喧嘩突發、四月に至つて残りの三日を興行す。五月より十月にかけて、大坂、京都、千田川の兄の追善角力をなし、木曾街道より信州に歸り、郷里大石に滞在、七月十二日、小諸侯に謁見す、其日、妻八重、江戸より若者十數名を同伴し來り、善光寺にて十七日より廿二日まで角力、中之條、上田、松本、岩岳、飯田巡業、閏八月一日、小諸八幡宮大幡奉納、五日より八日まで郷里滞在、八幡、松井田、館林、植木野、北原、天王、壬生、今市、栗橋、久米川及び下野の府中巡業、十二月、湯島天神社内稽古角力の収入を以て、恩師浦風の負債を辨償す。文化三年、雷電年四十、勇力衰へず相手の東大關、屢々交代す。此春、眞壁、結城、土浦、小名濱、湯本、壁谷、松川、棚倉、郡山、三春、米澤、黒澤、福島、作山、木幡、銚子、井藤、八口市場等巡業、七月九日、三春にて三春侯御覽あり。

文化四年、雷電四十一歳、六月松江行、七月廿二日足駄御免、八月に松江にて角力十日間興行、此度松江長滞在、九月に津山、京都を経て江戸に歸る。翌五年、年四十二、正月より三月にかけて行徳、銚子、此にて恩師浦風の追善興行をなし、佐原、笹川、網島、四ヶ村新田等巡業。六月十五日山王祭の節、田安、清水、一ッ橋の御三卿、子供角力御覽、續いて十九日、松江侯も子供角力御覽あり、閏六月より九月にかけて、水當、十日町、長岡、新潟、新津、下島新田、神のふ寺、片貝、柏崎、飯山、中野、海野、須坂、小森、甲府等巡業。文化六年四十三歳、四月より六

月にかけて、打身療養の爲、相州の東澤温泉に行く。六月より九月にかけて、相州の南郷、二ノ宮より始めて、浦賀、六間、十日市、道仙田、藤代、麻生、柏崎新田、高橋、宇都宮、鹿沼、長畑等巡業。文化七年四十四歳、四月より九月にかけて、甲府、島田、濱松、名古屋、山田、松坂、京都、和歌山等巡業、江戸に歸りて直ぐに佐原、鷺の橋等に行く。續いて文化八年（紀元二四七一）四十五歳。二月の春場所を勤めず、閏二月十四日附を以て土俵を退き、相撲頭取仰付けられ、四月より十月にかけて、仙臺、石ノ巻、控淵、氣仙、中新田、庄内、大野、坂田、松ヶ崎、久保田、ほら澤、大館、津輕、小づくり、鞍石、青森、盛岡、一ノ關、佐沼、高清水、土生、稻毛、芝山、古河、粕壁等、奥羽及關東地方巡業、一ノ關で一ノ關侯の御前角力あり。文化九年四十六歳。春は銚子、行徳、淺草、青山善光寺。秋には甲州の谷村を始め、飯田、和子、寺尾、善光寺、上田、小諸、羽生、館林、木崎、鹿沼等巡業。文化十年四十七歳、六月より十一月にかけて、檢見川、曾我、一ッ松、松ヶ谷、東金、八日市場、羽斗、水戸、祝岡、太田、杉崎、島山、大胡、大田原、白川、鷺宿、栃木、赤間、萩原、佐原等巡業、大田原侯の御前角力あり。文化十一年四十八歳。文化十二年四十九歳。七月廿八日江戸發信州行、八月廿三日迄郷里滞在。その月十二日、海野の白鳥大明神元四本柱土俵奉納。續いて九月より十一月にかけて信州地方、大町、松本より始めて新町、山野、沼田、ぬら犬、一ノ宮、下仁田、小川、本庄等關東地方巡業す。文

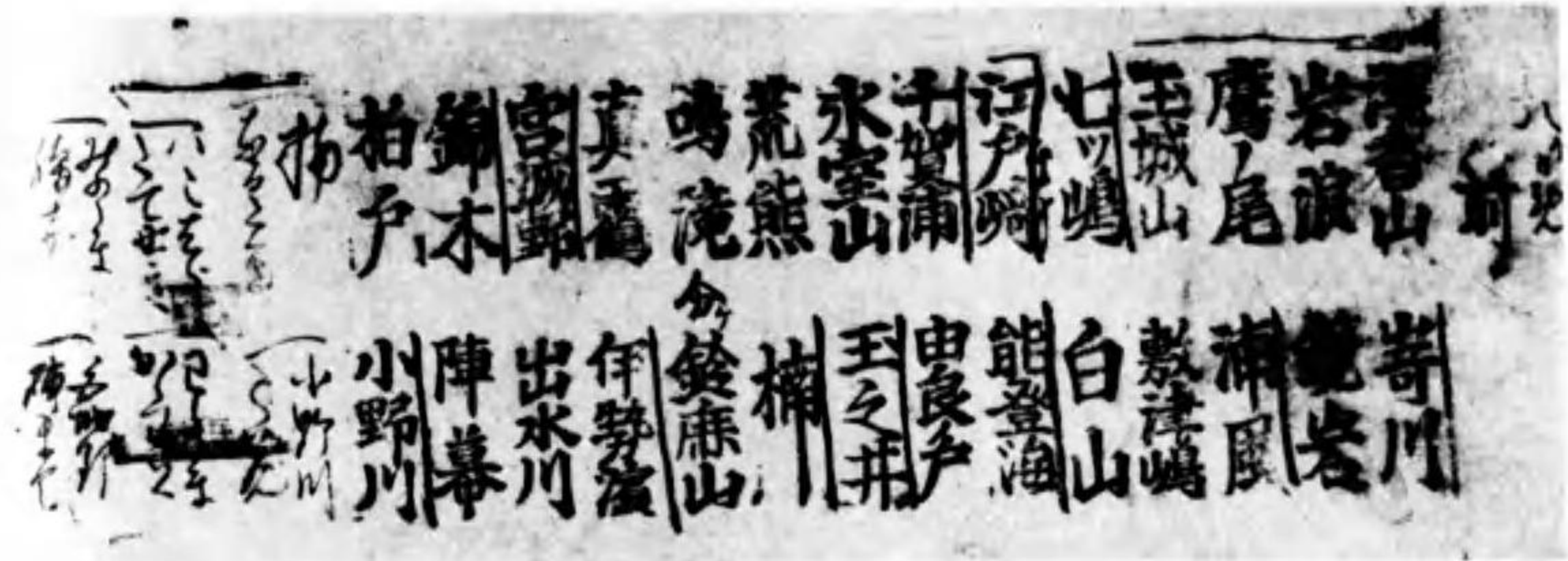
化十三年五十歳、正月に房州八満村、四月に佐倉に行つたのみで、此年より隠居生活に入り、巡業に行かず、文政四年五十五歳にして、六月廿四日、母けん病歿七十三、それより文政八年（紀元二四八五）に至るまで、事蹟の記すべきものなく、その二月十一日、五十九歳にして江戸に病歿、法號を雷聲院釋關高爲輪居士といふ。法號は角力名と本姓を一字織込んであるが、むしろ率直に、雷電院とすべきであつた。墓は、赤坂、三分坂、眞宗報土寺にあり、後に遺髪を信州大石村の墓地及び雲州松江の西光寺に分葬した。かくて一世を震動せしめた大剛力士雷電爲右衛門の生涯は終はつた。

茲に附記すべき二つの事がある。其一は、文化十一年三月、雷電四十一歳にして、赤坂の報土寺に寄進したと傳へられる「角力の釣鐘」にして、その當時の見取圖を版木に遺したものが、同寺に傳へられてゐる。釣鐘は、角力を意匠したもので、大體、土俵に象どり、上に幕を張り、鐘の裾は土俵を運らし、天下云々雷電と彫つた下に雷電の像を刻み、てうど其臍を撞くやうになつてゐる、紐は兩力士相四つの取組になつてゐる、誠におもしろいもので、古今無二の角力の釣鐘である。定めてドシヨイ／＼と鳴つたであらう。此の釣鐘といひ、父親の酒樽の墓といひ、雷電には大剛の半面に、此のやうなユーモアの趣味があつたことに、その風格が偲ばれる。然るに、これに就き、同寺にては、時の住持は非常に喜んで、早速、鐘樓を建て、盛大な撞初式を催はし



たりしたが、はからずもその鐘銘の字句が幕府の忌諱に觸れたため、釣鐘は鑄潰されてしまひ、寄進者の雷電は追放、住持は江戸構、寺社奉行は、お役御免といふ大變な問題を惹起したと傳へてゐるが、それほどの事件に、他には記事見えず、雷電も此年は巡業に出なかつたが、翌年は盛んに巡業してゐるから、若し何か問題があつたとしても、同寺に傳へるやうな大したことはなかつた。

其二は、雷電の強味についてであるが、十六年間も無敵で大關を勤めたといふ古今の大剛、その強味の永續性がまた未曾有である。土俵を退いたのは四十五歳であるが、その後も續いて時々、土俵に出て稽古をつけてゐたであらう。隠退後になつてからも、阿武松を續けて投げたといふのも、如何に雷電と雖も、全然稽古をやめてゐては出来ないことと思ふ。



表圖は寛政三年四月發行の夏場所東西力士番附で、「當四月十五日より於本所回向院内晴天十日勸進大角力興行仕候」と有る。現在の如く鐵傘の下で晴雨を物ともせず興行せられるのと思ひ比べて興味有る文句である。丈永紙木板刷である。上圖は年次と場所はわからないが、八日目の取組番附で、丈永紙半切木板刷で現今の更紙活版刷と比べてみて隔世の感がある。

(中尾方一氏藏)

八 傳説及び劇化された名力士

(一)

演劇では第一に「關取千兩幟」の稻川、鐵ヶ岳、次に「め組の喧嘩」で名高い四ッ車大八を始め、講談に出て来る雷電、及び越ノ海勇藏等、淨瑠璃、講談、小説等によつて、人口に膾炙する名力士は非常に多い。そのうち殊に著名なるものに就いて略説することにしよう。

(一) 明石志賀之助

明石志賀之助といへば、近世、角力道の祖神のやうに喧傳せられて知らぬ者はない。川柳に、

峠までのぼりつめたるしかの助

文政年中の句である。しかと鹿とを振り、しかの助が角力道の絶頂、日下開山になつたといふ意味、

角力にも昔なれにし志賀之助

同じく文政の句。こゝでは志賀を志賀の都に振つて、平忠度の名歌「さゞ波や 志賀の都は荒れ

にしを 昔ながらの山櫻かな」にとつて、古の名力士明石志賀之助を讃嘆したものである。

これほど有名な明石志賀之助の傳記は、極めて茫漠として、果して實在の人物なりしやも疑はしくなる位である。志賀之助のことを書いたものとしては、「近世奇跡考」が、尤も知られてゐるが、その記事に、志賀之助の敵手を仁王仁太夫として居り、その仁王仁太夫の事蹟が曖昧なる爲に、一層、志賀之助の影を薄くしてゐる。奇跡考の記事を引くるめて言へば、志賀之助と仁王仁太夫とは、天下の兩雄と聞えたるにより、京都の禁裏の御催にあつて、兩力士を召さる。志賀之助に年來、莫逆の友だち夢の市郎兵衛といつて、勇猛義氣の逞ましき者があり、志賀之助の介添として、江戸から上洛した。此度の角力は一大事である。君が負ければ、君を殺して俺も死ぬと、市郎兵衛が言つた。志賀之助は必死の覺悟で對場したが、仁王は志賀之助を目よりも高くさし上げて、あはや大地に投げつけたかと思はれた一刹那、志賀之助は早業の名人、宙に身を翻へして、仁王の胸を蹴つて、蹴倒した。これによつて、志賀之助は、日下開山の稱號を賜はつた。

また此事によつて志賀之助を横綱第一代であると傳へるのである。

志賀之助の傳記は、大體此のやうなことで、四谷で興行した勸進角力は、寛永と傳へるが、寛文の誤であらうといふ説もあるからゐで、結局、明石志賀之助は實在の人物としても、その傳記は、はつきりしないのである。志賀之助については、身長八尺六寸などと、殆んど超人間のやう

に祭り上げた傳説があるかと思ふと、「相撲鬼拳」といふ古書には、松平出羽守抱力士、箕の島權太左衛門、改めて鎌倉十七と名乗り、六十歳以上までも土俵を勤めたといはれる老剛無比の角力に、明石志賀之助が年を隔てて前後二度對場して、二度とも志賀之助の負になつたことを書いてゐる。

「其節、明石志賀之助と申す關取、高名ありし日下開山とはこれなり、勝人なし。或時、太守様、被仰出候は、明石、鎌倉と勝負、御覽遊ばさるべき由にて、兩人、土俵にて勝負これあり、六十五歳になる鎌倉勝候。皆々驚くこと限なし」

如何に鎌倉十七老剛なりとも、六十五歳の角力に負けるやうでは、明石志賀之助、角力道の祖神とはいはれまい。感嘆した人々、鎌倉十七に向つて明石の評を聞く。鎌倉は、「よき前角力也」と答へてゐる。これで見れば、明石が天下第一人とは言はれないやうである。なほ同書、大男の部に「鎌倉十七、相州鎌倉生、丈六尺二寸、掛目三十一貫目なり」とある。體格も立派なものであつた。

(二) 仁王 仁太夫

仁王仁太夫は頗る疑問の人物。明石志賀之助の對敵と傳へられてゐるが、古番附には、仁王仁太郎と書いたり、丸山仁太夫とあつたりして、氏名一致せず、しかも「相撲鬼拳」及び「相撲大

全等、斯道に著名なる古書中に、明石の名はあれども、仁王の名は無し。「相撲鬼拳」の大男の部に「丸山仁太夫、仙臺出生、長六尺二寸、掛目三十六貫目也」とあり、また根岸治右衛門所藏の、明和八年三月の古番附には、「東大關、九州仁王堂門太夫」とあり、仁王仁太夫といふは、この丸山仁太夫と仁王堂門太夫とを合併して假想した名ではなからうかとの説もある。仁王堂門太夫は、正しく實在の人物にして、しかも大々的人氣のあつた力士である。安永元年（紀元二四三二）刊行の「鹿の子餅」といふ有名なお伽話の本に、「角力場」といふ題で、仁王堂の評判が出てゐる。最近の國伎館の繁盛を思はせるやうな、おもしろい咄だ。「尻から入る」といふのは傑作といつてよからう。

角力場

「釋迦ヶ岳に仁王堂と來ては、近年にない大入、札を買つても遣入られぬ木戸の込合、仕方なければ、裏へまわり、圍を破り、犬のやうに這つて入りかゝつたところ、内に居る世話やき見つけ、「こりや／＼そこから遣入る所ぢやない」と頭を取つて押戻され、得遣入らず、暫らく工夫して、こんどは尻から遣入りかゝつたところ、また内の世話やき見つけ、「こりや、そこから出るところぢやない」と帶をつかんで引ずり込んだ。」

これは角力に關する小咄中の傑中である。

(三) 丸山 仁太夫

丸山仁太夫と同じ仙臺生れで、有名な巨人丸山權太左衛門の墓が長崎にあるが、これは權太左衛門ではなくて、丸山仁太夫の墓ではないかといふ説もある。

近世奇跡考には、丸山といふ角力名の由來について、丸山の頂きに丸き瘤あり、山の如くなりしゆえに、丸山の墓の頭も、その形に造つて、瘤のやうな石を置いたと記して、丸山權太左衛門の頭は、如何にも支那の聖人孔子の頭のやうであつたやうなことを書いてゐる。こんな頭だから丸山と名乗つたといふことも、どんなものかと思ふ。權太左衛門は同郷の先輩丸山仁太夫の丸山を襲名したといふ説がいゝやうである。

(四) 綾川、兩國

明石志賀之助以後、谷風以前の横綱として傳説される綾川五郎次、及び兩國梶之助、ともにそのことに關する確たる文獻は、まだ見つからない。

(五) 成瀬川 土左衛門

成瀬川の力士名は全く忘れられて、唯土左衛門ばかりが有名である。

享保九年、深川八幡、勸進角力の番附、東大關、蝦夷ヶ島赤右衛門で、その前頭に成瀬川土左衛門である。成瀬川は奥州生、寛延元年、戊辰、六月六日（紀元二四〇八）病歿、法名、勇猛院力譽泰山居士といひ、その墓は深川靈岸寺にある。近世奇跡考に、成瀬川は肥大のものゆえ、水

死して、渾身膨れふとりたるを土左衛門の如しと戯れ言ひしが、遂に方言となりしなりとある。水死人にたとへられたのが根本で、土左衛門といへば水死人のことになつたので、土左衛門自身は水死したのではなかつた。

(六) 白藤 源太

白藤源太は、元祿頃の田舎角力だといはれてゐるが、力士としては有名ではなく、源太節などの俚謡で有名になつた。それに由ると、東上總の夷隅郡のものである。

(七) 稻川、鐵ヶ岳、秋津島

歌舞伎劇の角力では、「關取千兩幟」の稻川と鐵ヶ岳とが有名である。稻川は本名、鐵ヶ岳のモデルは千田川吉五郎である。稻川と千田川とは、ともに明和、安永間の大坂角力で、此の二人の取組は大した人氣であつたが、二人とも後に江戸に来て、幕尻に出され、千田川はそれまでだつたが、稻川は前頭筆頭まで上つた。大阪にゐた頃は、千田川に歩があつたやうに言はれたが、江戸に来てからは、稻川が大成したやうである。

「關取千兩幟」は「關取二代鏡」といふ淨瑠璃を焼直したもので、「關取二代鏡」の主人公は、秋津島といふ大坂角力だが、秋津島は力士としては有名でなく、傳記は分らない。

(八) 谷風、小野川、雷電、越の海勇藏

これは角力講談によく出て来る顔觸れであるが、事實の眞偽を、今更かれこれ言ふ必要は無い。越の海勇藏を極小男としたのも、別に據りどころがあるわけではなく、話をおもしろくする爲であらう。講談では、越の海が小さくて強くて、石のやうな頭突きを、臍の邊に打付けるので、さすがの谷風もたち／＼の體、雷電が出て、親方とても駄目ですが、私がやります、野郎やつて來いと、越の海の稽古臺を引うけたのはいゝが、雷電も亦越の海の頭突きには惱まされたといふ、お可笑味たつぷりの話である。

小野川は雷電に負けたので、有馬侯から勘氣を蒙つてゐたが、増上寺の大火に、有馬侯が消防に當つてゐるとき、小野川飛び込んで、將軍家の靈龜をかつき出し、その功によつて勘氣を免るされたといふのは講談だが、てうどその時、芝に火事はあつたが、増上寺からは遠かつた。

(九) 桂川 力藏

成田の不動尊に願をかけて、父の仇を討つたといふ「成田利生記」といふ演劇の主人公である。父が土俵の上で、逆手で殺されたから、その仇を土俵で討つといふ筋書であるが、此の桂川力藏は、實在の人物ではない。

(十) 四ッ車 大八

淨瑠璃、芝居、講談、小説等に、各方面に尤も廣く脚色されて、今に至るまで、人口に膾炙し

てゐる名力士は、四ッ車大八であるといつてよい。殊に四ッ車に對する江戸兒の人氣は大したもので、菊人形を始め、いろ／＼の人形に造られるのも四ッ車が一番多い。四ッ車は、問題の「め組の喧嘩」のあつた文化二年二月（紀元二四六五）始めて入幕して、大童山と並んで、幕尻に名をあらはし、爾來、同六年の二月まで、前頭四五枚のところを上下してゐて、その後の番附には四ッ車の名は見えない。今ならば幕内、中堅の錚々たる力士といふところだから、當代でも、かねて人氣のある角力だつたことは疑なく、それで彼の人氣が、「め組の喧嘩」の評判に拍車をかけて、遂に天下後世に一大角力劇を造り出すに至つたのであると思ふ。またかう劇化されて見ると、四ッ車大八といふは、如何にも劇的の好い名である。

「め組の喧嘩」一件の記録は、角力に關する諸種の書物に掲載され、遍ねく世間に知られてゐる、且つ甚だ長文に渉るから、茲には省略することとして、簡単に、事件の要領をお話することにとどめたい。一體、四ッ車大八といふ力士名の起源は頗る古く、「相撲大全」によれば、京にも江戸にもあり、安永年中、江戸角力に一度入幕したが、その後、成績捗々しからずして陥落を重ねし四ッ車伊之助といふ者があり、「め組」一件の四ッ車と同郷であるから、或は其の師匠であつたかも知れぬと思はれる。其後、寛政八年三月の江戸番附、西方二段目の五枚目に、四ッ車大八といふがある。これが即ち問題の四ッ車である。「め組」の一件の時、四ッ車は三十四歳だ

から、寛政八年はそれより九年前で、四ッ車が廿五歳の時である。當時の二段目の五枚目は、今ならば、立派な幕内であつた。そして中々角力上手であつたらしい。その出生は、出羽國、秋田郡五十目村（現時、秋田縣羽後國、南秋田郡五城目町）にして、文化六年、卅八歳にして病歿した。「め組の喧嘩」に活躍する水引清五郎、實は九龍山扉平は、當時、東二段目の六枚目で、藤の戸濱藏は、西二段目の五枚目であつた。四ッ車とも三人は、東關脇柏戸宗五郎の合弟子であり、柏戸は、南本所、元町、茂兵衛差配の借家であつた。柏戸は其後、文化五年春場所から東大關に進み、大剛雷電の西大關に對峙すること七場所、雷電引退の後、なほ二場所大關を續けた名譽の力士である。

「め組の喧嘩」或は「神明の喧嘩」ともいふ。その事實の真相は、大略かうである。文化二年二月五日から、芝、神明の境内で勸進角力春場所の興行があり、その七日目に、宇田川町の鳶人足辰五郎が同じ人足の長次郎を伴ふて角力見物に來たが、角力棧敷ではよくある習、飲みながら見物するし、角力話から始まつたことであらう、辰五郎等は、隣席の職人たちと喧嘩を始めた。通りかゝつた九龍山が、見かねて仲裁をしたが、聽き入れざるのみか、いよゝゝ亂暴が募るので、九龍山とうゝ腹を立てて、辰五郎、長次郎の兩人を、木戸口から外につまみ出した。辰五郎は、後に大喧嘩をおつ始めるやうに、この時の喧嘩も、責任は辰五郎にあつたらしい。さて辰五郎等

は、角力場から逃げ出しての歸途、江戸喜三郎の宮芝居に入つて見物してゐると、運の悪いときは、しかたの無いもので、角力を終はつた九龍山は、兄弟子の四ッ車と同伴して、此の芝居を見に來た。此時、双方が此所で再會しなかつたら、或は「め組の喧嘩」も起らず、四ッ車大八が英雄になる機会がなかつたかも知れぬが、何分、角力場で、いきさつのあつた直後のことで、氣の立つてゐる辰五郎が逸早く見つけて、同じ鳶人足の助力を頼んで、仕返し喧嘩を始めたのを、當時、賣出しの俠客、焚出しの喜三郎、豆腐屋熊藏、糠屋市五郎の三人が駈けつけて、双方の間に割つて入り、喧嘩は一先づ鎮まつたが、まだ和解式が濟まないのを機會として、いきり立つたる鳶人足等は、相撲小屋を打壞すべき相談一決したと聞き、四ッ車と九龍山は、かくては打捨て置かれぬと、急いで角力場に引返す途中で、とうど角力場に襲來する鳶人足等と衝突して、遂に大喧嘩となつたのである。此時、鳶人足の義松といふ者、火の見梯子にかけ登り、半鐘を亂打して、仲間を集めた。市中の鳶の者ども、喧嘩とは知らず、眞の火事と思つて、諸方から神明へゝと押出して來たから、喧嘩はいやが上にも大きくなつた。角力側からも、急を聞いて駈けつけた者があるのは勿論だが、多勢に無勢何としても角力は少人數、鳶の人足は雲霞の如くで、屋根の上から瓦を投げつけたりして、四ッ車、九龍山を始め、四五名傷ついた者がある。角力は孤軍奮闘で、四ッ車が三間梯子を揮つて、屋根の上の人足を薙ぎ拂つたなど、勇ましい働きを見せた、此

の大喧嘩に於ける四ツ車は、全く英雄であつた。かくて角力場から柏戸宗五郎が駆けつけ、鳶の方でも、若者清五郎、頭取善太郎、又右衛門相謀つて、柏戸に示談を申込み、角力會所では筆頭年寄雷權太夫を以て、逸早く社奉行松平右京亮へ駈込訴訟をし、鳶人足の方は、同じく町奉行根岸肥前守へ訴へ出た。その結果、取調中は關係人一同入牢、同年九月廿一日、北町奉行小田切土佐守その他列席の上、裁判言渡しあり、此の喧嘩の發頭人、辰五郎及び柴井町の富士松、富士松は傷の爲め入牢中に死去したるに由り、辰五郎のみ叩きの上、追放申付られ、め組一同百六十五人、過料五十貫、その他、關係人一同、町役人、辰五郎の父又右衛門を始め、濱松町家主、神明門前家主一同に到るまで、それ〴〵過料また急度お叱を仰付けられ、角力側にては、當事者、九龍山扉平、正當防衛とはいひながら、喧嘩の際、何者とも知れず、刃ものを以てその右腕に切付し者あり、その刃物を奪取り、揮りまはしてゐるうちに、辰五郎に痛所出來、富士松はその疵が元で相果てたといふのを以て、江戸拂を仰付けられ、四ツ車と藤の戸とは、合弟子の義にて現場に駆けつけ、火消人足ともより棒、鳶口等にて打掛られ、九龍山も自分たちも、ともに危ふしと、棒、鳶口等、刎ね除け、或は奪ひ取り、人足どもの中に怪我人もできたも、その爲、四ツ車は前齒三本打折られ、他に疵も受け、藤の戸は脇差を抜いて揮りまはしたるも、いづれも據無き次第につき、無罪放免。かくの如き次第で、鳶の者の非理が認められ、裁判は角力側の勝利になつたわけである。

なほ此の喧嘩の起りについては、前述のとほり、辰五郎、富士松等が棧敷で、酔拂つて隣の職人と喧嘩を始めたのが本だと傳へてゐるが、「喧嘩一件の記録」によれば、富士松、辰五郎が、無錢で角力場に入つて見せるといつて、人をつれ出し木戸で入れてくれなかつたのが喧嘩の起源となつてゐる。

それから此の裁判の決定については、鳶人足の側では、火事の半鐘を亂打して人足を集めたことが、取返しつかぬ失敗であつた。それに反し、角力側では、喧嘩の様子を聞くとひとしく、五代目根岸治右衛門は、逸早く太鼓櫓にかけ上り、御免の看板を打破り、幕府の御免の文字に對して、鳶人足が暴行を加へたるにより、已むなく防衛をしたのであるといふ申立をした、此の機敏な處置が此の裁判を有利に導いたことは疑無い。

此の喧嘩は、勸進角力、二月五月初日、七日目十六日とあるが、當時は晴天八日の角力だから、その間に、雨天の日があつたのだらう。喧嘩は午後四時頃、角力がはねてからのことであつた。四ツ車は年三十四、九龍山は卅六、藤の戸は三十二歳で、相手の辰五郎、富士松の年齢は未詳である。

喧嘩の翌日、二月十七日、勸進元藤島甚助、差添久米川初五郎、柏戸宗五郎の三名より、寺社

奉行の取調に對し、提出したる「差上申一札之事」のうちに、四ッ車、九龍山、藤の戸三力士の口供書がある。「右三人の申口」と題して、事實の真相を、正當防衛、止むなき抗爭であつたとを、明瞭に、且つ上手に書いてある。當時の角力會所には、中々、頭の好い筆者があつたと見える。右、寺社奉行より檢使出張、見届の上の取調に對する三力士の口供を左に載す。

(一) (前略) 扉平(九龍山) 申上候。私儀角力相濟候に付境内香具芝居に罷越し、棧敷に上り、見物仕る可くと存じ候處、いづれの者に候や、私を足蹴にいたし候より事起り、口論に及候故、芝居より逃出し候へば、境内に於て、何者とも知れず、後より大勢にて突倒し、蒿口並に棒にて打擲仕候に付、取上ばせ、疵受け候始末、一向存じ奉らず候、且つ相手の者に疵付け候儀、有體に申上べき儀、再應御尋ねに御座候得共、相手は大勢、私儀は一人、殊に無刀にて御座候間、一向疵付候覺、御座なく候。

(二) 大八申上候。私儀取組、中入前に相濟み候間、直ちに宿所に引取り罷在り候所、師匠柏戸宗五郎、申聞候は、相弟子扉平儀境内にて打擲に會ひ候間、召連れ參り候様、申付候に付、早速、境内に罷越し候處、私を目がけ、大勢にて取懸り候間、境内町屋に逃げ込候得ば、右町屋家脇打ちこはし候故、氣の毒に存じ候間、着類脱ぎ置、門口に出候得ば、何者とも知れず、大勢、蒿口並に突棒等にて打擲仕候間、疵受け逆上仕候につき、始末一向存じ奉らず候旨申上候得ば、相手のうち疵人多く有之候間、疵付け候儀は無之哉、再應御尋ねに御座候得とも、右様夫れ〳〵道具等所持仕る大勢にて打掛り、私儀は一人之儀につき、中々、疵付け候覺は御座なく候。

(三) 濱藏(藤の戸) 申上候。私儀角力相濟候につき、小屋より出候ところ、何者とも知れず、木戸口にて、私額に切付け候手にて請け留め候故、血流れ出で候を、仲間ども見つけ、また〳〵小屋のうちに引入れ置候故、何者に疵付けられ候や、一向存じ申さず候。然るところ、相手の中、疵人多くこれ有り候間、疵付け候儀これ無きや、有體に申上べき旨、再應御

尋に御座候得とも、右、疵請け候より小屋に罷在り候間、一向、疵付け候覺御座なく候。

如上、大評判の「め組の喧嘩」の真相の大略である。江戸拂を仰渡された九龍山は、その翌文化三年からの番附に名を消してゐるのは當然だが、當時の事だから、江戸拂には身代りを出したであらうといはれてゐるが、しかし九龍山として續けて角力をとるわけには往かない。

(十一) 稻妻雷五郎と藝者小花

強い第四代横綱稻妻雷五郎と柳橋藝者の小花との情話は講談に仕組まれ、幾多の波瀾ある話が作られてゐる。小花は稻妻を旦那にして、稻妻の弟子の朝風を情夫とし、隠れん坊をして楽しんでゐるが、二人は遂に年寄玉垣額之助に頼んで、稻妻の諒解を得て、夫婦になられるやうと話し込んでゐるところに、折あしく稻妻が來合はせ、大いに立腹して二人を打殺すといつて立上り、留める玉垣を突倒したが、その時、胸にうけた傷が元になつて玉垣は病死したので、玉垣の弟子の鰐石が、師匠の仇を土俵で討たんとして、稻妻と鰐石との遺恨角力になつたといふ筋書なのだ、如何にも稻妻が西大關の晩年、東の前頭から小結に躍進して驍名を唄はれた鰐石といふ角力があり、稻妻引退後四年して、大關に登つてゐるが、此の遺恨角力の話は疑はしい。それは稻妻引退後までも、玉垣は健在だつたからである。しかし稻妻と小花との情話は、事實あつたことで、尾に鰐がついて張扇で遺恨角力を叩き出したのかも知れない。

稻妻は、強いばかりでなく、修養の心掛けが篤かつたもので、讀書を好み、俳諧に親しみ、家道を治め、古來、力士としては模範的人物、その角力道あつて以來の八十八といふ長壽第一を保つたのも、天稟の體質もあるが、一つには其の修養の效に歸すべきであると信ずる。世に「稻妻の相撲訓」と稱するものがあり、角力道修行の要諦を盡してゐる。これによつて見ると、稻妻が力士としての、人格、造詣、誠に古來稀なものであることが知られる。常陸山著の「相撲大鑑」に東兩國、豊田屋所藏の稻妻自筆の相撲訓といふものを載せてゐるから、茲にこれを紹介したい。その全文、

「それ角力は正直を宗とし、智仁勇の三を志ざし、酒色奕の悪しき徑に遊ばず、朝夕、起臥とも、心にゆるみなく、精神を勵まし虚偽の心を禁ちぬべし。なほ勝負の懸引に臨んでは、相手に容赦の心なく、侮らず、恐れず、氣を丹田におさめ、少しも他の謀を思はず、押手、さす手、ぬき手の早き業を胸中に察して、呼吸に隨ひ、其の虚實を知る時は、勝を決するものなり。

青柳の風に倒れぬ力かな

右、

雲州 稻妻雷五郎則親卅一才記之

とある。稻妻三十一歳といへば、まだ大關になる前、文政八年、小結で鳴してゐたときのことである。彼は、老後、専ら俳諧にいそしんでゐたが、角力盛んなりし若い時から、斯道に入つてゐ

たものと見える。現役力士の俳人は珍づらしい。稻妻は常陸の生れだが、雲州と署してゐるのは、松江侯の抱力士であつたからだ。

此の相撲訓の終に記した俳句は、角力道よりも、寧ろ柔道の妙諦を詠じてゐるやうにも見えるが、これは稻妻がその剛力を恃まず、無理強引をせず、敵の鋭鋒をかはし、自然の理詰めに隨つて勝つといふ心持をあらはしたものと見るべきであらう。

此のやうな人格者、稻妻といへども、色は思案の外といふから、小花情話には、何か噂になるほどのことがあつたかも知れぬが、講談の遺恨角力は、稻妻の風格を現はすには不適當だと思ふ。しかし空下戸の赤穂義士赤垣源藏が、張扇では「赤垣源藏徳利の別れ」で、大の酒豪として叩き出されるのだから、講談の話と史實とを一々對照説明するにも當らぬことであらう。

稻妻が阿武松と對峙して、勇名を競つてゐた時、稻妻大關の關脇を前後十一場所も續けて、中間二場所ほど大關を占めた緋威力彌といふ強力士がゐた。彼は不幸にして、稻妻の後輩たりしが爲に、稻妻を抜いて大關となるを得ず、恰も小錦の下に朝夕が久しく關脇を守つてゐたのと、古今その嘆を同じくするものであつたが、阿武松、稻妻、緋威の三雄、鼎立して土俵上に角逐し、漢の劉備、關羽、張飛の三人、桃園の三傑に擬して、此の三力士を錦繪に描いたものがあり、緋威も亦古今の大力、その鐵砲は防ぎ得る者なしとて、此手を封じられたと傳へられ、敵方には、

阿武松の外一人の好敵手はなかつた。太刀山の鐵砲さへ封じられなかつたのに、緋威が果して封じられたとすれば、緋威の鐵砲といふのは凄いものであつたらう。

(十二) 小柳襲撃一件

これは美男横綱として有名な不知火光右衛門に、直接の關係は無いが、因縁のある話である。不知火と同じ肥後の抱力士に小柳平助といふのがゐて、これが成績がよろしく増長して先輩の不知火を凌ぐやうな振舞があり、不知火の愛弟子にして、その前名を繼いだ殿シガりと不動山との二人が、いつかは小柳を取挫いで師匠の爲に鬱憤を晴らさんと心がけてゐたところ、本場所中、肥後の抱力士一同は本所一ツ目の肥後部屋に宿泊してゐた一夜、計らずも、その機會が突發して、二人で小柳を襲撃して、遂に死に至らしめた事件は大いに角界に知られてゐる。此事に就いては詳細な記録などはなく、その年代も判然と分らず、維新直前のことであるのに、これに關する記述は、皆精確を欠いてゐる。角通の三木愛花氏は、此事を「不知火の晩年、即ち江戸幕府も瓦解に近き慶應年間の事であつた。」と言つてゐるが、此事實は、それよりも數年前、恐らくは文久元年の頃のことであつたと思ふ。三木氏は、安政元年から明治直前までの番附は、關東大震災に燒失し、角力協會にも保存して無いから、調べることができなかつたと言つてゐるが、他に保存されてゐるものに就いて見ると、文久元年春二月の番附は、幕内十一枚で、東大關、雲龍、小

結に鬼面山、前頭二枚目に陣幕久五郎がゐる。西大關は境川、その關脇が不知火で、前頭六枚目にも小柳平助がゐる。文久二年十一月に、不知火が大關になり、その後の番附には、もう小柳の名は見えない。さうして見ると小柳襲撃は、文久元年の中であつたかと思はれる。そして不知火の晩年ではなくて、不知火がまだ大關にならぬ前、小柳が拔手を切つて進んで來て、動もすれば不知火に追付かんとする勢があつた爲に、増長してゐたと解釋すべきである。

さて事件の概略はかうである。肥後部屋といふのは、本場所中、熊本藩の方で、本場所に近い所に、宿屋を一軒借切つて、抱力士をそこにまとめて、場所に通はせるのである。或日、不知火は引分、小柳は大勝、ひゐき客に招かれて、夜おそく大酔して踰躑として歸つて來たところ、殿りと不動山とは、兄弟子の歸りを待つまで、膳の上で殘酒でも酌みかはしてゐると、それを見た小柳、自分を待つてくれたとは思はず、貴様たち今までも夜ふかしをして酒とは生意氣だ、そんなことで出世ができるかと、いきなり足を揚げて、膳を蹴飛ばし、二階に上がつて寐て仕舞つた。此處に於て二人は、平生の憤氣勃發し、期せずして、小柳襲殺に一致して、訣別の杯を擧げ、裏梯子、表梯子と別れて斬り込んだ。先づ裏から登つた殿り、唐紙押し開き「小柳覺悟」と切り付けるを、もの音に目を覺ました小柳「何をツ」と刎ね起きざま、蒲團を取つて打ちつけ、おつ被ぶせて殿りを組み伏せ、刀をもぎ取らんと争ふところに、表から上つた不動山が、やにはに小柳

の肩先に一刀切りつけたので、小柳、覺えず手をゆるめて、不動山の方に取つて掛らうとする途端、殿り刃ね起きざまに、小柳の腋の下に一刀突き立てたので、小柳、バツタリ倒れて「人殺し人殺し」と悲鳴を上げた。かくては相弟子など起きて來ては事面倒と、二人は一目散に二階を駆け下り、何處とも知れず、分れ／＼に姿を晦まして仕舞つた。あとは大騒動、醫者を呼ぶやら、追手を出すやらだつたが、時經つてゐるから二人の行衛は雲を霞、小柳の傷は肩の方は大したことはなく、脇腹を突かれた出血多量の爲に衰へて、二日許して死んだ。不動山は、其後、自首して出たが、入牢中に病歿し、殿りは蝦夷松前まで逃げおほせて、明治になつても、彼地に生活してゐたことである。

勸進角力あつて以來、土俵の上での遺恨角力として話に残り、張扇で叩かれるものは幾つもあるが、味方同士の競り合ひから、遺恨の刃傷事件を惹起したのは、全くこれ一つのやうである。しかも、事は美男横綱に關係してゐるから、随分おもしろい話が叩き出せないこともなからう。

(十三) 横綱不知火光右衛門の疑獄女天一坊綺譚

これは小説ではなく、全く真正正銘の眞事實であり、非常におもしろい裁判奇談であり、「明治の大岡裁判」ともいふべき物語にして、横綱不知火の義侠によつて、始めて公明な判決に到達するを得たといふ力士美談である。これは、修飾を加へずしてその儘、演劇に上場することができ

よう。このやうな物語であるから、稍々長文に渉るけれど左に其の顛末をお話する。

世界的大火山、阿蘇山の麓、大津郷、今は大津町になつてゐて、熊本から阿蘇山を貫いて豊後に通ずる街道、加藤清正が造つたと傳へられる日本一の杉並木の大道路に沿ふた此の街道一の賑うた町、その郷中、字平川に住む飯田甚八夫婦に喜野と呼ぶ小さい娘があつた。五六歳の頃誤つて胸腹から右股にかけて大火傷をして、あはや命も危なかつたのを、漸く助かつて、一入、ふびんをかけて育ててゐると、ふらりと來た雲水僧、縁ができて此家に滞在してゐるうち、無上に喜野を可愛がり、いつも抱きかゝへしてゐたが、或日、抱いて出た儘、夜に入つても歸つて來ず、そのまま、何處へ行つたか、夫婦は狂氣のやうになつて、町の人々もろともに、諸方へも廣く探し求めたが、皆目知れなくなり、一日も忘れるひまがないが、いつの間にか十餘年の月日が経過した。

その時、突然、耳寄りの噂が、風の便りに傳はつて來た。熊本城下の魚町、吉田勝平といふ女郎屋の遊女八重といふ者、自分は平川の甚八の娘で、幼少の頃、雲水僧につれられて、親元を離れたものだといふ身上話を、いつも客座敷で話しては泣くといふ話、甚八夫婦、驚喜の餘り、とりあへず女房は飛んで往つて、八重に逢つて見ると、小さい時に別れたのではあるが、何となく顔が變はつてゐるやうな。そこで火傷はと問ふと、正しく腹から股にかけて、あり／＼とあるの

で、それではやはり我子であつたかと、急ぎ歸つて、相談の上、甚八は訴狀を認めて、白川縣に訴へ出た。誘拐された娘の八重を、實の親に、無事に返して貰ふやうとの願である。當時は熊本縣ではなく、その邊地方は白川縣が置かれてあつた。此の訴願どほりに運んだら、御話はなかつたのである。

ところで、八重の抱主、吉田勝平は賣主があることを申立てて承知しなかつた。取調の結果、此の八重といふは、阿蘇山に鎮座します阿蘇大明神の御社のある宮地町の瀧藏といふ者の娘で、瀧藏が貧乏して、喜平次といふ者に賣り、瀧藏の死後、喜平次から更に大分縣の後藤七郎といふ者に賣られ、七郎から勝平に賣つたもので、轉々として賣られて來た筋道が分つてゐるといふので、後藤七郎から反對の訴訟を大分縣に願ひ出たから、大分縣は一應取調べた上、白川縣に移牒した。

そこで白川縣では、原告甚八夫婦と、喜平次、七郎、勝平等を突合はせて調べると、どうも双方の申分が合はない。白川縣では、すつかり八重の火傷を信じたから、これはてつきり喜平次の詐欺が根本になつてゐると認めて、喜平次を、これでも言はぬかゝと幾回と拷問にかけた、喜平次は苦しさに堪らず、八重、實は瀧藏の娘に非ず、甚八の娘に相違ありませんと、恐入つてしまつた、縣では更に宮地町から幾人かの證人を呼出したが、證人たち、喜平次が拷問にかゝるの

を可哀さうに思つて、一同、喜平次の申す通りと證言した。此に於て取調終了し、喜平次は懲役三年、證人は三十管とちといふ判決が下り、裁判は決定した。證人たちが歸郷して話をする、宮地町では、一同此の判決に反對だが、裁判が既に決定した後なので、どうすることもできず、不服たら／＼の風説で持ち切つてゐた。

話變はつて、茲に東京角力の噂に高い美男横綱不知火光右衛門、土俵を引退して大坂に下り、大坂の角力組に入り、年寄となつて世話してゐたが、巡業の旅で、大分縣、國東郡、岐阜港に泊り、料亭で酒酌みかはしてゐると、お酌に出た其家の娘が、不知火を頼もしさうに思つたか、不知火に向ひ、「旦那の御言葉は肥後のお國と見えますが、どちらでせうか」と尋ねると、大津だと答へたので、娘は忽ちせき込んで、「それでは、其地の飯田甚八といふ者を御存じではありませんか。實は、私は甚八の娘喜野と申す者であります、これ／＼しか／＼で雲水僧につれられて、家を離れて、佐賀の關に來ましたが、僧は同所の良助といふ者に、博奕で大負けをして、私を抵當に置いて、何處かへ行つてしまひ、間もなく良助は病死、残つた女房が私をつれて流浪してゐましたが、また私を捨てて、再嫁してしまつたので、私は難儀して死ぬばかりになつてゐたのを、此家の慈悲深い主人茂平が見かねて、引取り、養育してくれまして早や十餘年、何不自由なく暮らしてゐますが、實父母のことを思ひ出さぬ日はありません」とし／＼語つて、涙を流した。

そして、くれぐれも故郷の實父母の方の消息を頼むのであつた。義侠な不知火は大いに驚き、早速、調べてやらうと約束して歸郷すると、とうとう八重の裁判事件が大評判なので、不知火は、ますます驚ろき、急に喜平次の家を尋ねて話をすると、喜平次の方では、地獄で佛と驚き喜び、直ぐにそれ／＼調査して見るに、喜野の物語は眞實と確信されるので、遂に大分縣に控訴の申立をした。大分縣でも驚いて、調べて見ると、八重が僞で、喜野の方が眞物らしいので、直ちに白川縣に移牒して、再吟味を要求した。白川縣では捨て置れず、甚八夫妻と八重とを呼出し、兩縣の役人立合で法廷を開いたのは明治七年二月十日のことである。

然るに甚八夫妻と八重との申立ては喰違ひがあることが發見された。それで喜野を呼出して甚八夫妻に對面させると、甚八は違ふといふ。喜野は天を仰ぎ地に伏して、「お父さま御胸慾な」とばかり泣き叫ぶ、眞心流露してあはれの有様、役人も皆涙を流した。けれども甚八夫妻が承認しない爲め裁判決着するわけに行かず。役人審議の上、二女子の傷痕の診定を外國人の名醫マンズヘル氏に頼むことに氣がついたものがあつた。その診定によれば、喜野は火傷で、八重のは腫物の痕であることが分つた。此處に至つて八重の僞たるは蔽ふべくもなくなつた。八重は恐入つて白狀した。自分は幼少の時ながら、略ぼ瀧藏の娘といふことを知つてゐるが、偶々お客から甚八夫婦が家出の娘を探してゐる話を聞き、とうとう年頃も似合つてゐるので、自分が喜野になつた

ら、苦界を脱出できると思ひ、大それた次第ながら女天一坊を思立つたのでありますと、神妙に申立てた。

かくて裁判決着し、喜野は甚八に渡され、喜平次は無罪放免、入り代つて八重の入牢となつた。甚八が喜野を見て、ハツと思ひながらも承認しなかつたのは、既に自分夫婦、八重を認めて取返し訴訟を起しながら、また喜野を認めると、自分たちが重罪に陥るだらうと思つたからなので、一目で喜野が眞の娘だと分つてゐたのであつた。

此の劇的女天一坊の疑獄事件が、首尾よく、めでたし／＼の大團圓を告げるに至つたのは、全く横綱不知火の義侠の働きによることなので、角力史に傳ふべきである。

九 角力道に傳へられてゐる巨人

(一)

我邦では、大男といへば直ちに角力を聯想するは、古來の常識となつてゐるが、日本の偉大な力士といふ者は、凡そどれ位のものであるか、左に列擧して見よう。そして昔の角力は大きかつたがといふ老人の述懐談は、今に始まらず、昔からあつたことのやうであるが、果して昔の角力は大きくて、今の角力は、小さくなつてゐるか。此問題は、日本人は昔、大きくて次第に小さくなつたといふ説と關聯して考究すべきものであるが、その事は暫らく措いて、今、茲には、江戸勸進角力創生以來、六尺を標準として、世に傳へられた巨人を、角力道に有名な「相撲大全」、「相撲今昔物語」、「相撲起顯」、「大關鏡」、及び「甲子夜話」等の書物の中から選出して、所傳の身長順によつて並べて見る。

- (一) 生月鯨太左衛門 七尺五寸 四十五貫 平戸、天保年中
- (二) 鬼勝象之助 七尺三寸 四十二貫 元祿中

- (三) 大空武左衛門 七尺二寸五分 五十二貫 肥後、文政年中
- (四) 釋迦ヶ岳雲右衛門 七尺一寸七分 雲州、明和年中
- (五) 鈴鹿山鬼一郎 七尺餘
- (六) 九紋龍清吉 六尺九寸三分
- (七) 白眞弓肥太左衛門 六尺八寸六分 四十貫五百目 飛驒、慶應年中
- (八) 山嵐嶽右衛門 六尺六寸七分 卅八貫五百目 明石侯抱力士
- (九) 雷電爲右衛門 六尺五寸
- (十) 里見山丈右衛門 六尺五寸
- (二) 土蜘蛛塚右衛門 六尺五寸
- (三) 金碓仁太輔 六尺四寸七分 四十二貫 筑前、元祿中
- (三) 石槌島之助 六尺四寸七分 四十四貫 伊豫大島、明和年中
- (四) 御用木無次衛門 六尺四寸五分
- (五) 大碓灘右衛門 六尺四寸五分
- (六) 西國市太左衛門 六尺四寸
- (七) 大木戸團右衛門 六尺四寸 伊勢山田、元祿中

- (一八) 大鳴戸淀右衛門 六尺四寸
 - (一九) 鬼鹿毛熊五郎 六尺四寸
 - (二〇) 手柄山仁太輔 六尺三寸五分
 - (二一) 菅谷勘四郎 六尺三寸五分
 - (二二) 丸山權太左衛門 六尺三寸
 - (二三) 西國森右衛門 六尺三寸
 - (二四) 大矢島新左衛門 六尺三寸
 - (二五) 箕島十太左衛門 六尺二寸七分
 - (二六) 北國官太夫 六尺二寸七分
 - (二七) 楯ヶ崎浪之助 六尺二寸五分
 - (二八) 杉の森長右衛門 六尺二寸五分
 - (二九) 吉野川團右衛門 六尺二寸五分
 - (三〇) 大岬丈右衛門 六尺二寸五分
 - (三一) 鰭之山浦右衛門 六尺二寸五分
 - (三二) 谷風梶之助 六尺二寸五分
- 尾州、元祿中
- 四十三貫 仙臺、享保年間

- (三三) 卷尾曾津之助 六尺二寸
 - (三四) 波戸崎峰右衛門 六尺二寸
 - (三五) 相引森之助 六尺二寸
 - (三六) 阿蘇岳洞右衛門 六尺二寸
 - (三七) 源氏山住右衛門 六尺二寸
 - (三八) 磯碓平太輔 六尺二寸
 - (三九) 稻妻雷五郎 六尺二寸
 - (四〇) 秋津島浪右衛門 六尺一寸八分
 - (四一) 細石嵯峨右衛門 六尺一寸五分
 - (四二) 窟林左衛門 六尺一寸五分
 - (四三) 兩國梶之助 六尺一寸五分
 - (四四) 小野川喜三郎 六尺一寸
- 四十貫 因州、元祿中
- 右の外、なほ精研するに随つて、多少の追加すべきものを發見するであらうが、大體著名なるものは網羅されてゐる。此外に、從來、世に第一代の横綱と傳説さるゝ
- 「明石志賀之助」

「仁王仁太夫」

あり、明石は身長八尺などとも稱せらるれども、明石及び仁王のことは、傳説中の人物であり、確たる文献の證左は得難いから、茲には省くこととする。

さて右列挙したる巨人に就き、大部分は名ばかり傳はり、實在の人物に相違なきも、その傳記は不明のものが多し。

右表の中に、七尺の大男は僅に五人、明治維新前、二百年の角力道としては、巨大漢が割合に少ないやうにも思はれるが、巨大漢が悉く角力になつたわけではないから、此外に、まだ若干の巨大漢が、何處かに生存してゐたものがあるだらう。

右の七尺男の中で、實際に角力の上に名譽を得た者は少なく、釋迦ヶ岳雲右衛門が明和八年の番附に、西大關に署せられ、其後、下つて關脇となつてゐるのを見ると、此人ばかりは、ほんとうに角力を取つたらしいが、その外の巨大漢は、唯土俵上の裝飾たるに過ぎなかつた。大男といふだけで角力を取らぬでも、興行價値はあるのである。元祿の鬼勝象之助はさういふ中では、多少、角力をとつたらしく思はれるけれども、土俵上の名譽はなかつたらしい。第一の大男、

「生月鯨太左衛門」

天下に喧傳され、いろ／＼の文學にも書かれた、極めて有名な角力だが、十七八の頃、郷里平戸

生月鯨太左衛門畫像



(中尾方一氏藏)

から江戸に出て、土俵に上つたのは僅に數回といはれ、その外は唯土俵入のみを勤めてゐた。大坂では小野川喜平次の弟子になり、暫らくして江戸に出て玉額の門人になつたのである。

「身長七尺五寸、體重四十五貫、土俵入り仕り候」

と書かれた巨人である。似顔や錦繪などは、いろ／＼あるうちに、

元祿の頃、鬼勝象之助、身の丈七尺八寸、又明和年中に、釋迦ヶ岳雲右衛門、身の丈七尺四寸五分。寛永之甲子年、勸進角力開基より天保の今に至るまで、七尺に餘る大男、右三人の外になし。古今の力士といふべし。

生月は 古今の力士 世の中に
並ぶ方なき 男なりけり

とある。廿四歳の時、瘡毒にかゝり病歿したと傳へらる。

生月より少し前、文政年中に、巨人として著名なのは、

「大空武左衛門」

肥後國上益城郡矢部庄田所村の生れで、文政十年、廿三歳にして江戸に出て力士となる。足を擧げて、牛を跨ぎ得るから、世に「牛股」と稱したが、後ち大空武左衛門と力士名を呼んでゐても、これも角力は取らず、土俵入りだけの力士であつた。その一枚繪の記事には、

元祿の頃、鬼勝象之助、身の丈七尺三寸餘、また明和年中に、釋迦ヶ岳雲右衛門、身の丈七尺一寸六分あり。今や文政十丁亥年、大空武左衛門、行年二十三才、身の丈七尺二寸五分なり。正保二乙酉年、勸進角力開基より、七尺に餘る大男、

此三人の外になし。古今の力士と謂ふべし」

とある。大空の話は、體量五十二貫、掌の長さ中指まで一尺二寸、足袋一尺四寸、両手を合はせて米一升三合を入れる、腰圍八尺一寸、身長七尺六寸などと評判されたが、松浦靜山侯の甲子夜話には、

身長七尺三寸、體重三十五貫五百目、食量一日一升七合餘、衣服は三反を要す

とある方が、眞實に近いであらう。食量の多いのを見ても、彼が單なる巨大漢にして、土俵上の活金剛でなかつたことが分る。

大木戸團右衛門は、相撲大全に大男の部にのせた吉野川團右衛門と同一人物だといはれてゐる。大木戸は、大男何とやらの俚諺を外にして、その角力は鈍重でも強引でもなく、頗る智的であつたらしい。彼は尾州侯の抱力士となり「日ノ下團右衛門」と名乗つてゐた。日ノ下といふは、日本一といふ意味であらう。其頃、同じく尾州侯の抱力士に、鬼鹿毛熊五郎といふ十八歳にして六尺四寸といふ青年力士があつた。大木戸が彼と取組む前に、肩口と肌とに油を塗つて對場し、鬼鹿毛その大力を出すことができずに負けた。次の勝負の時には、また手を變へて、自分が五寸後退したら負としよう、廣言を放つて少年力士を昂奮せしめ、鬼鹿毛が唯一突きと満身の力を籠めて突進するを、待つてゐましたとばかり、巧みにかはして勝つたといふ大男に不似合な智的な



大空武左衛門畫像

(中尾一方氏藏)

取口であつた。全く此のやうな巨人の角力としては、古來稀なるものであらう。

兩國棍之助は、明石志賀之助を初代としての二代目横綱と傳説されてゐる名譽の力士であるが、その横綱に就いては、確實なる文献は無い。御用木無治右衛門は江戸角力の大關で、體重も約四十貫あるのが、風呂桶に入つてゐる儘を、抱へて持つて行つたといふ、兩國の強力話がある。その外に、兩國は角力櫛の元祖として傳へられてゐる。元祿年中に、角前髪の力士が、櫛をさすことの流行したのは此の兩國より始まるのだといふ。

丸山權太左衛門の手形と傳ふるものが世間に傳はつてゐる。長さ八寸、幅は四寸餘である。此の大男は、享保年間、江戸の大關であつた。その力士になつた由來がおもしろい。彼は青年の頃、家老の家來になつて、故郷仙臺を出發し、江戸見物に出て來たが、大男、一日に二足づゝの草鞋を踏み切るといへども、自分の足に合ふやうな草鞋はないから、毎晩、宿につくと、二足宛の草鞋を作らねばならず、馬に乗れば、足が地につくといふわけで、ほと／＼自分の足を持て餘した。こんな具合では、また歸途の難儀がおもひやられると、江戸に留まり、大男、他に向き口はなし、角力になつたのだといふ。長崎に下り、角力興行中に病歿し、皓臺寺に葬り、墓は長崎の入口、日見峠の道傍にあり、法號を丸山良雄信士といふ。彼の自作の句と傳ふるものに、

一つかみいざ參らせん年の豆

釋迦ヶ岳雲右衛門の「身の丈石」と稱するものは、深州八幡宮の境内に存してゐる。朝早く豆腐屋を叩き起すといふて、その二階を叩いたといふ傳説のある位、巨人振りは世間に流布してゐた。釋迦ヶ岳に次ぐ巨人として、當時、有名だつたのは、「石槌島之助」前名は白山新三郎、江戸角力の小結となり、後ち紀州侯の抱力士となり、大坂に轉じて大關となつた。よつて故郷伊豫國の名山、石槌山の名を取つて改名した。その娘に、すらりとした頗る美人があり、身長は五尺八寸五分もあつて、日本では古來稀有の美しい大女であつた。それで父角力のひびき客の豪商の戀女房となり、煤拂の時に疊五枚を二階に持上げたほどの大力であつた。

白真弓肥太左衛門は日本一の大家族村として知られた飛驒國白河郷に、天保四年を以て生れた。故郷の國名を取つて肥太左衛門といふ。安政三年、米船渡來の時、日本から彼等を驚かすべきものはなし、幕府は、力士をして米を米船に運ばしめて、日本人の力量を誇示したが、その中に、白真弓は、一人で八俵を運び、果して米國人を驚倒せしめた。これ程の大力に拘はらず、東の前頭三枚目が行止まりであつたのを見れば、角力は上手ではなかつたらしい。

以上の外に、巨人として擧ぐべきものに、角力は取らず、土俵だけを勤めた少年の大男が、大童山、相馬山、神通力の三人ある。これ等は、或は夭折したり、或は成長後、子供の時の割合には大きくならず、或は角力が餘りに下手であつた等の理由で、如上の巨人群には列名するの榮



(藏氏一方尾中)

丸山権太左衛門畫像

を得ないのである。

(一) 大童山文五郎

谷風歿後、寛政七年十一月、同八年二月、同九年十月の番附欄外に、續いて左の記事を載せてゐる。

前頭 羽州 大童山文五郎 當卯八歳にて土
長瀬 俵入〇〇に申候

とある。此の大童山は、一度幕尻に上つたことがあるだけで、その餘は、ずつと二段目に列し、その引退、歿年等詳かでないが、その前半生は、天下の怪童として、夙に著名になつたものである。大田蜀山人の手記の中に、「天明八年二月、出羽國大兒を産む事」と題して、

鈴木喜左衛門御代官所

出羽國村山郡長瀬村

名主 權兵衛組下

百姓 武左衛門伴

文五郎

去申二月十五日出生、(紀元二四四八)、社日のよしにて、常體より勝れて大きく、去九月中、大きな饅頭一つ食候より、小兒には甘きもの毒のよしなる故、以來食させまじき旨申し聞け置候。大切に致させ置候得共、困窮の者にて迷惑仕候よし。長二尺八九寸、手八九寸廻り、くびれ候所五ヶ所、足九寸餘廻り餘、腹の廻り二尺七八寸、耳大なる方に御座候。重さ八九貫目か、拾貫目も有之由、色黒、貫目其他寸尺等、改候事、留置申候

右、寛政元酉年四月十五日、御代官鈴木喜左衛門より御勘定所へ御寫し有之、大童山といひし角力取なり。

大童山八歳からの土俵入は、土俵上の雄姿としては、勸進角力創業以來の最年少である。

(二) 相馬山太郎治

これは寛政八年二月の番附に、大童山と並べて、左の如く、

下總、川原代、相馬山太郎治、辰十一才土俵入仕候

とある。相馬山のことは、この一事より外に所見なし。

(三) 神通力國吉

天保七年十一月の番附欄外に、

信州、南原、神通力國吉、申の七才、目方二十貫目、土俵入仕候。

と記してある。香蝶樓國貞の寫生畫が一枚刷となつたのがあるが、それには、

木村庄之助門人、

神通力國吉、

生國、信州更級郡川中島南原、

當申七歳、貫目廿貫目

土俵入計罷出候。



(中尾方一氏藏)



大島居雲右衛門

大島居雲右衛門手形
(寸 實)

(中尾方一氏藏)



島南原、
當申七歳、實目廿實目

とある。相馬山のことば。この一事より外に所見なし
(三) 神通力國吉
天保七年十一月の番附欄外に、
信州、南原、神通力國吉、申の七才、目方二十實目、土俵入仕候。
と記してある。香蝶樓國貞の寫生畫が一枚刷となつたのがあるが、それには、

と記されてある。身長は分らぬが、如何に大男の怪童子であつたかは、想像するに餘あるものがある。惜しいかな、彼は遂に金太郎に終つて大力士とはならなかつた。

怪童子神通力は、本姓、若林氏であつた。現に其出生地の隣町、篠ノ井驛の驛員で交際係を勤めてゐる温厚童顔の若林寛氏は、此の神通力の血統のもので、現在、四十歳位、神通力ほどではないが、やはり廿何貫といふ肥満紳士である。私は、此人から神通力のことをいろ／＼聞いた。

明治以後の巨人

(一)

世間には、往々、昔の角力は大きかつた、今の角力は、だん／＼小さくなる、といふやうに言ふ者がある。果してさうであらうか。私は、簡単に、さう定めてしまふことはできぬと思ふ。雑誌「野球界」に発表した元横綱大錦の追懷談に、自分たちが角力をとつてゐた頃の方が、體重の

たくひなき

生れながらの 關取は

神通力を 得たる童子

應好 立川馬

大きなものは多かつたやうだが、身長の高いものは、今の方が却つて多いやうだと言つてゐる。最近、二十年未滿の間でさへ、このやうな感想が行はれてゐるくらゐだ。今の角力が昔のよりも小さいなどは、容易に斷言できぬと思ふ。第一、昔は體格の測定法が精確ではなく、同一巨人の身長もいろ／＼に傳へられてゐる。近來でさへ力士の身長體重ともに、動もすれば、誇大的に傳へられる傾向があるから、昔の測定を精確にしなかつた時代に於ける巨人の身長は、多分に誇張されてゐたのではないかと思ふ。

明治以後の巨人として、私ども眼中に映するものは、前に「大砲萬右衛門」あり、後に「出羽ヶ嶽文次郎」の二人あり、遍ねく天下に知られてゐるが、その以前に、「武藏瀉」「男山平助」身長約七尺に達した巨人が二人あつた。此の二人は、ともに剛力無双であつた。武藏瀉は明治十年から十八年頃まで、前頭から關脇までを上下した力士で、初代梅ヶ谷が大阪から出て來て、連戦連勝、破竹の勢で、殆んど一敵無かつたときでさへ、迎へ戦ふてこれを破つたものは武藏瀉であつた。武藏瀉は角力は下手だつたが、さすがの梅ヶ谷も、その巨幹大力を持って餘し、その後も度々、引分と取つたくらゐで、武藏瀉の門の一手は封じられてゐたと傳へられる。彼が天稟の大剛振りには想像するに餘ある。その力量は、昔の雷電にも劣らぬものであつたかも知れぬ。武藏瀉は、道了權現として名高い曹洞宗の名刹、大雄山最乗寺の山下附近の農家の生れで、二宮金次郎先生

が生れた柏原村の隣村の人であり、その郷土誌に略傳が載せてある。

常陸山、梅ヶ谷の全盛時代、大阪に押出して合併角力を舉行したとき、一行中の太刀山の強剛を、大阪の行司が、男山の再來だとして驚嘆したものがあつた。その時、私どもは此の行司の博識に感心したくらゐで、男山といふ大剛力士があつたことを知つてゐる者は、めつたに無かつた。男山は福島縣の生れで、腕の太さは普通人の股ほどあつたといはれたほどの巨漢で、日清戰爭の數年前、東京に出で、年寄花籠に入門したが、最初から滅法強かつた。幕内、前頭の筆頭になつた嵐山が、稽古をつけたが、間もなく負けるやうになつたので、大關になつた八幡山が引受けて、申合を試み、足を懸けたら、其儘、抜き上げて、八幡山は懸けた足を脱臼したさうだ。男山は素晴らしい角力になつたらうと思はれるが、脚氣衝心で早く死んで、世間に知られずに終つたのは惜しい。

武藏瀉、男山以後、出羽嶽が一番大きいくらゐで、身長七尺に達した幕内力士はゐない。六尺以上は、隨分、澤山にゐる。近來、世人が知つてゐるだけでも出羽嶽に次ぐ。

男女ノ川、天龍三郎、武藏山武、太刀山峯右衛門、對馬洋を始として、大八洲、大浪、鶴ヶ嶺、雷の梅、千葉ヶ崎、雷ノ峯等、等、まだ／＼あると思ふ。これを明治以前の六尺以上の巨人表に對照すれば、大體に於て明治以後の方が身長は高くなつてゐるかと思はれる。

茲に、角力としては發達しなかつたが、身長に於ては、出羽嶽より高きこと三寸、優に七尺に達した半島出身の「白頭山」は最近では巨漢第一で、昔ならば、「土俵入仕候」と欄外に書かれる候補者だつた。彼は角力をやめて、廣目屋に雇はれ、旗持をして、街頭の人氣を呼んでゐたことは、世人の知るところである。

昔、加藤清正は非常の偉丈夫で、四尺七寸の着物を裾短かに着なし、帝釋栗毛といふ偉大な名馬に打ち跨つて行く姿は、大したものであつたといひ傳へるが、清正の體格測定は精確には分らない。今の人に較べて、どれ位なものだらうかと、着物の丈で考へて見ると、横綱大錦が五尺八寸有餘で、着物は四尺二寸。さうして見ると、清正の身長は、天龍、武藏山あたりと伯仲するかと思ふ。昔の巨人力士の着物などが残つてゐれば、單に文獻に見た身長ばかりよりも、もつとくはしく其の體格を推察することができるかと思ふ。

(二)

明治以後の巨人として、茲に特筆すべき者が一人ある。これは角力にはならなかつたが、昔ならば、生月鯨太左衛門、大空武右衛門と同じやうに、必らず幕内の張出しとして、一代に誇示される巨漢であつた。これは宮崎縣生れで桑山仲治といひ、九州帝國大學醫科で、研究の爲め入院

せしめ、體格を測定した時、身長七尺二寸であつた。學問上、精確に測定されたものとしては、本邦未曾有の巨人である。

宮崎縣知事加勢清男氏は、此の巨人に驚嘆して種々調査を重ね、縣下第一の巨人と決定したが、やがて日本第一の巨人と稱せらるゝに至れるを以て、その名譽を記念するために、東京の三越本店に注文して、偉大なる丹前を造つて贈與したが、間もなく絞扼性イレウス病に罹り、死去したるを以て、その死因研究の爲め、宮崎縣立病院の解剖室に於て、院長隈嶺雄博士が執刀の下に解剖に附されたのである。隈博士に就いて、剖檢上の概略を聞くに、骨格、筋肉ともに均齊の取れた發育をしてゐるが、頭部頭蓋は甚だ小さく、顔面顴骨の甚だ大なるに比して、稍不釣合の觀を呈してゐる。内景所見としては頭部頭蓋骨を截つて見るに、その内容たる腦髓は甚だ小さく、その空間を占むるものは、前額洞及び上顎洞にして、頭蓋内底のトルコ鞍は相當大きく、且つ肥大したる腦下垂體の爲に押し擴げられた状態であるが、その腦下垂體は、極めて萎縮して小さくなつてゐた。これに病理解剖學的考察を加へれば、一度肥大したる腦下垂體は、榮養障礙の爲に壞死状態となつたであらうと想像せられるといふ。

尙ほ同人に關する挿話の二三を擧ぐれば、九大醫科に入院中は、ベッドを縦に二つ繋ぎ合はせてあり、室内からは、彼の姿は見えずとも、欄間が暗くなるので、彼が廊下をあるきつゝあるこ

とが分つたといふ。彼は、壯年の頃は六人力と稱せられ、頗る大食家でもあつたけれども、甚だ氣が小さく、衆人の中に出ることや、汽車に乗ることなども嫌ひであつたが、晩年、その傾向がますます強くなり、自然、自宅に引籠り勝ちとなつてゐた。その死因たる絞扼性イレウスの如きも、早期に手術を施せば、生命に關するほどのことではなかつたであらうと、後には思ひ合はされるが、彼が手術を肯んせなかつたやうに傳へられてゐる。彼はまた終生、色情甚だ少なく、子供らしきところあり、童貞で終つたやうに村人は噂してゐる。

私は巨人研究の參考の爲に、隈博士の剖檢談の要領を記した。この如く、明治以來の巨人、七十年間に、右のを加へて、既に四人を算し、その後、朝鮮から世界身長行脚を試みるべく、先づ東京に上つて來た「金富貴」の如きは、更に七尺八寸以上の身長らしく思はれ、その寫眞は、都下の新聞に掲載された。日本に、此の如く續々巨人輩出して、大陸自慢、北京名物の一つとして著名なる北京植物園の改札係の二巨人の壘を壓するほどに至つたのは痛快を覺えるのである。

一〇 女角力の盛衰

(一)

女角力は、女性の裸體鑑賞といふ興味に淵源してゐるらしく、歴史に現はれたものでは、今から約千五百年前、(雄略天皇御宇)、采女どもが褌を著けただけの裸體で角力をとつたといふ記事が最古のものであるけれども、此種の女性裸體鑑賞の事實はずつと大昔からあつたもので、改めて穿鑿するまでもない。人間性の自然に本づく此の興味は、連綿として時の流れとともに進んで來て、元和偃武、數百年の亂世から脱却するとともに、情痴悦樂の欲求が爆發した、その中に、女性の裸體鑑賞の興味が、その頃盛んに發達しつつ、人氣の中心となつてゐた角力道に結びつけて、女角力となつたのである。

元祿元年の「色里三所世帯」のうちに、「折節秋の初なるに、女角力を催しけるに、廣庭に四本柱、紅の絹を巻立て、土俵に小蒲團の敷を並べ、加茂川のしやれ砂をふるはせて撒かせ、美女に男のすなる緞子二重まはりの下帯をさせ」とある。これは遊里に展開した豪華を極めた酒の肴

の女角力、遊蕩世界に前代未聞の舞臺劇。爛熟した元祿の時代相が、猛烈な魅力を以て現はれてゐる。それから三四十年、近松門左衛門晩年の作、「關八州繫馬」のうちに、

見す／＼心を引立つるは角力角力、先お坐敷に四本柱、束り枕を並べ、土俵を築き、四人のわれ／＼で、二人づゝ西東へ立ち分れて大關、腰元衆のうちで關脇、小結を擇び、残の女中皆前角力、肌の物は男の通り緞子縞珍の二重廻り、

とある。その贅澤さは前の話には及ばぬやうだが、眞實、角力道の光景に一步を進めてゐる。

此外、元祿時代に續々として現はれ来る女角力は、畢竟、酒池肉林の餘興たるに過ぎなかつた。女角力が興行物として、社會興味の一つとなつたのは、我文獻の上では、延享初年の頃のことである。

(二)

女角力の興行は、延享頃から始まつて、明和年中に盛んに流行したものであるが、此頃の女角力は、頹蕩たる好色趣味を主とするもので、最近の女角力に見るやうな技術的角力を上演するものではなかつた。しかし女角力といふ以上、女力士がなくてはならぬ。「世間化物氣質」に、「力業を習ひし女郎も、同じ大坂難波新地に女子の角力興行の關に抱へられ板額といふ關取、三十日百五十兩にて先銀取れば」とありて、莫大の給金に、女角力の人氣の程が察せられるが、力業を

習ひし女郎とあるによつて、女力士の前身が、多くは下賤な賣色者であつたと見てよからう。しかも其が美人か、または女の盛りであつて見れば、何も好んで女角力に轉向する必要はなからうから、女力士の大概は醜婦か、或は青春を過ぎた者であつたらう。此のやうな女性の裸體鑑賞では、興行價値の充實を期することはできないから、そこで盲人と女力士との合併角力となり、江戸、大坂、東西ともに晴天十五日間の興行、盛んに人氣を呼んだものであつた。黄表紙、「玉磨青砥錢」に、盲と女角力の圖があつて、その詞書に、

赤澤山の角力取も、人に勝れて大力のある者故、きつとした役にも立つべき者、角力取にして置くは惜しいことだと云つて、これも預りとし、其かほりに不用なる無能無官の坐頭を西方と定め、坐頭と女の角力を興行する。

「なるほど是は尤もだ。また今までは晴天十日なれど、是も晴天の如きは、それ／＼見物も家業を勤むる故、その妨げにならぬやうに、是より雨天十日と定むる。中入後の取組は、目無川にかさの海、杖が竹に鯨が橋、向見すに骨がらみ、こいらは見所のある角力なり。行司は灘團扇を持つて立合する。其かたち馬鹿太鼓のひよつとこの如し。「手の鳴る方へ／＼」とらまへてつきめそ。「あの子は餘程手のある子だ、それだから度々よくとまりを取つた。

坐頭ひるきの見物、齒きしりをかみ、「それ／＼杖の方へぐつとくめ／＼按摩の三十二文に切見世の五十文を加へて、札錢は一日八十文なり。」

女角力の實況は、これで想像される。此の黄表紙は、當代の政治を諷刺したものであるから、此の女角力も、よほど皮肉な口調を以て書かれてゐるが、三平二滿の裸體女と盲人との土俵光景は、

如何にも醜猥な、グロなものであつたことは言ふまでもあるまい。偶、三平二満ばかりの中に紅一點、人の目を惹く程のものがゐると、その爲に風紀問題を惹起し、營業停止を命ぜられたこともあつた。

女角力の好色的魅力は、單に裸體露出から醜態暴露の待望だけの興味を以てしては、大衆の期待に副ひ難くなつて來たので、女力士の扮装は、女鬘に正式の角力締込を締めた上に、短かい華美な化粧廻しを腰に纏ふといふ風姿に變遷した。女角力は、だん／＼角力技術の必要を認め、從つて演技は輕快な扮装を要求するに至つたのである。けれども幕末までの女角力は、依然として盲人との合併角力で、女力士の角力名も、玉の越、乳ヶ張、姥ヶ里、腹櫓、貝ヶ里、色氣取、美人草、穴ヶ淵等の下品なものが多く、その宣傳文も、

盲滅法、大無双の曲とり、双方相手を探りあてての大勝負、殊更女子太夫の儀は、あの表にて御評判受ましたる手取りにて、風の柳の手弱かに、種々手を盡し、御覽に入奉り候

などと挑發的のものばかりであつた。

(三)

明治の初め女角力は、男力士の櫓落しといはれてゐる角力様式の結髪になつて、女鬘に鉢巻な

どをして髪の亂れを防いでゐた前代に較べて、一層角力らしくなつて來たが、太政大臣三條實美の名を以て、明治六年七月十九日、布告第二百五十六號を以て、男女角力即ち女と盲人との角力は禁止され、女角力は殆んど前途の望を失つたやうであつたが、それよりずつと後れて、明治時代の中頃、やはり大角力の本舞臺、回向院に於て女角力の興行があり、東北山形縣地方に行はれてゐた女角力が、角力技術を練習し、純然たる女角力といふ新趣味を以て出現した。その角力名も好色的なものではなく、男力士のやうに富士山、遠州洋、東海道、北海道などと山名地名を用ひ、或は蒸汽船はや、電信はま、金剛石きく等と、最新文化的の名を擇んだが、風紀取締の上から忽ち禁止の沙汰を受け、櫓太鼓などを撤廢し、單に力持の藝のみを演じて興行を續けてゐた。此に於て、維新前、三都に於て盛んに行はれた江戸時代の見世物女角力の風格は、永遠に幻と消えたのである。

此の以後の女角力は、髪は角力銀杏、肌には肉襦衣、猿股を穿つた上に、馬簾下げのある締込といふ扮装となつて、女角力の淵源を爲した裸女美の魅力を一擲し、角道の趣味に生きる女角力が出現した。これは女角力としては、正しく立派な更生である。男角力と同じやうに、激げしい練習を積んで、土俵の上に勇ましい女角力を見せてゐる。但だ土俵入などに、「いちやいちやいやなー」といふ「いちやな節」をうたふことによつて、僅に女角力らしい風格を留めてゐるに過